国語解釋学

中世解釋学

能勢朝次

小野直

國語科學講座

—X—

國語解釋學

中世解釋學

能勢朝次・小野直

株式會社

明治書院

國語科學講座

— X —

國語解釋學

中世解釋學

能勢朝次・小野直

株式會社
明治書院

目次

前篇　中世文學相の斷面……………………能勢朝次〈一〉
第一章　緒　言…………………………………〈三〉
第二章　中世文學相の斷面……………………〈八〉
後篇　中世文學の研究要目……………小野　直〈三一〉
第一章　和歌及び歌論…………………………〈三一〉
第二章　連　歌…………………………………〈三九〉
第三章　日記・隨筆・紀行……………………〈四四〉
第四章　戰記文學………………………………〈五四〉
第五章　物語・說話・お伽草子………………〈六三〉
第六章　猿樂・狂言……………………………〈七四〉
第七章　延年・幸若・田樂……………………〈八三〉
第八章　佛教文學………………………………〈八七〉
第九章　歌謠（遊宴歌謠及び佛教神事の歌謠）……〈九一〉
第十章　五山文學………………………………〈一〇二〉
第十一章　繪卷物と文學………………………〈一〇六〉
第十二章　有職・故實・法度…………………〈一一〇〉

中世解釋學

……〔前篇〕中世文學相の斷面……

能勢朝次

第一章　緒言

中世解釋學といふ一般的な考察について、述べて見度い。解釋學で目的とする所は、從來の辭書的訓詁的な解釋に終始する解釋法や、鑑賞批評的な作品の讀み方から離れて、普遍妥當的な解釋の法式を考究するにある。所謂、叙述的機構型や、表現的機構型の解釋の仕方からはなれて、文學の形象作用の理會から、作品の原現象に肉迫してゆくといふ、象徴的機構型の讀解法に進み、作者が明かに意識したより以上の明瞭さに於て、作品を理會しようといふ試みであると思はれる。

この主張は誠に正しい主張である。少くとも論理的に考へられ、哲學的に裏付けられた科學的な方法であるといふ點に於ては、何人も異論は無いであらう。だが、この方法を直ちに我が中世文學に適用するとなると、我等は、その以前に尙々準備すべき多くの作業を持たねばならない。中世文學は、等しく日本文學ではあるが、明治以後の現代文學と異つて、作品自體の外的研究に於ても、充分に遂げられ研究し盡されたものはまだ一つとして無い。例へば、異

本の校勘から、原典への溯源の如き、又作品の製作された年代や作者の決定の如き、又、訓詁的な解釋の如き、現代文の解釋に於ては、全く省略し得て、何等の作業をも必要としない研究が、いづれも未だ未完成に近い姿でとり殘されて居るものが多いのである。

尙この他に、その時代的文化の特殊相の研究も、中世文學研究に於ては、ゆるがせにすべきものではない。現代人は現代の文化に生きつゝ、現代文化の所產である所の現代文學を讀む。かゝる際に、特別な文化的研究はさして必要がないやうであるが、それでも尙、或る種の文學作品となると、その作者の抱懷する所の思想なり文化意識なりに無關係に、これを理解し難いものがある。明治時代の文學も、歐米文學の影響や、歐米文學論の主張の我國に流入したものに對して、全く無智であつては、正しい解釋は困難であらう。況んや、三百年以前を以て、近世文學に接する中世の文學は、當時の文化現象の諸相に對する歷史的な認識を缺いては、到底これを完全に理解し得らるべくも無いのである。

これ等の作業は、いはゞ作品解釋の準備的作業である。しかし、これ等の準備を缺いては、完全な作品解釋は不可能である以上、これをなほざりにする事は許されない。が、一面より反省する時、時代文化の歷史的認識といふ作業には、その時代文化の生み出した文學作品の精讀といふ事を缺いては、その完全さを求める事は出來ない。從つて、こゝに一種の循環論的な一面の存する事はどうしても認めねばならぬ。一方的にのみ解明して、その基礎の上に立つて、他を解明するといふよりも、文化現象の歷史的認識は、作品の正しき解釋を助け、作品の解釋は、文化現象の歷史的認識を深めてゆき、相互に關聯し、循環的に、螺旋的に、層一層と、深まり行かねばならないと思ふのである。

又他の一面より考へる時、中世文學は、當然に上代文學の傳統を多分に持ち、それぞれの文學形態に於ても、時代

と共に展開の相を示して居るのである。故に、作品の形態・類型といふ立場に立つ時、我々は當然に上代文學のそれぞれと、比較對照して、上代のそれの傳統と、その上に加はつた中世文學的な特殊相の發展の跡をたどらねばならない。かくすることによつて、中世文學の特殊的立場を、一層に闡明し得、その特色を明かに認識し得るのであつて、こゝに文學發達史に關する豫備的作業の必要を認めるのである。

以上を要するに、中世文學の解釋には、現狀に於ては、尙その準備として、當然に果さるべき多くのものゝ存在することを忘れてはならないことである。今これ等を項目的にあげて見れば、

(一)本文整定の作業。――異本の校勘。異本の發生系統。異本發生の原由。諸異本の校勘研究によつて、可及的に原典に接近した本文整定の作業等。

(二)作者未詳の作品に對して、作者の推定に對する研究。作者の明なる作品については、作の年代、作者の閱歷、思想、性格、作者の交友、社會的地位、作者の遺傳的傾向等、作者を中心とした諸研究。

(三)時代文化現象の認識――當時の社會思想一般に關する學的研究。思想界の中心となつた思想(例へば佛敎の如き)信仰に對する深き理會。當時の社會制度等、作者の環境研究を中心とした諸研究。

(四)作品の訓詁的註釋的研究の完成。

(五)他學科との協力及補助。例へば、民族學・土俗學・風俗史・心理學・社會學・藝術學・宗敎研究等よりの參考に資すべきものを借用し、補助とすべきこと。

等になるであらう。中世以後、現代に到るまでの間に、種々の先人の努力に成る中世文學の諸研究は、大凡これ等の中の何れかに該當するものであつて、その業績に關しては、我々は多大の尊敬を拂ふものである。これ等の研究は、

解釋作用とは、前にものべたやうに、相互に相助け合ひ、循環的螺旋的に進むものであつて、これ等を蔑視するは、決して學に忠實なる所以ではないのである。

然らば、何故に解釋學に於ては、これ等の諸研究を、所謂叙述的機構型の研究として、低次の地位に置くのであらうか。その理由は、これ等の解釋法は、作品の解釋に當つて、契機に於ける歴史的なるものを偏重するが故であると說かれて居る。言語の傳達した所のものを理解するものであつて、所謂何が書いてあるかを理解するといふ程度にとどまり、作者が作品を生み出す形象作用の理會や、原現象の解明に進まないが故であると言はれて居るのである。卽ち、叙述的機構型の解釋は、語學的・文獻的・註釋的・本文批評的な地位にとゞまつて、普遍妥當的な客觀的理會に達し難い故であると論ぜられるのである。これとよい對照をなすものは、表現的機構型の解釋であつて、「何が書いてあるか」を見るのでなくて、「作者は何を書かんと欲して居るか」といふ點に中心を置いたやり方で、契機に於ける心理的なるものを偏重したる解釋法である。從來の鑑賞批評等といはれるものゝ傾きは、これを出でない。訓詁註釋的な缺點と、淺薄な鑑賞批評の缺點とを、共に脫却して、眞に正しい理會に進まんと志すものが、解釋學の目的として叫ばれて居るのである。

文學作品の解釋としては、解釋學の唱ふる所は充分に認めるべきである。但し、叙述的機構型といひ、表現的機構型といひ、象徵的機構型といふのも、類型的な見方で、論述の進め方の上から、これを三つの型に概念的に分つて、それぞれの特色をのべたに過ぎないものだと思ふ。卽ち、具體的には、かゝる作用が必ずしも個然とするものではないと思ふ。從つて、私は、叙述的機構型の諸研究を決して、蔑視するものでもなく、斥けようとするものでもない。ただ、それ等の研究が、終局に於ては、作品の完全なる理會といふ一點に向つて歸宗し、これによつて統一づけられ

るやうに、その作業をはたすべきことを考慮すべき必要を認める。即ち、前に項目的にあげた諸研究は、文學作品の完全なる理會への奉仕にあづかるものであつて、文學解釋としては、それぞれに、獨立して價値を要求すべきものではないといふ點を見るべきだといふのである。但し、これは、あくまでも文學作品の解釋といふ立脚地から見るのであつて、他學科の立場から論じたものでない事は斷るまでもないであらう。

以上の考へ方からして、私としては、解釋學が要求する所は、究極に於ては、作品の深い理會（象徴的機構型の理解）を目的とするものであるが、その故に、歴史的機構型に立つ諸研究を直に脫却せよといふことは、これ又角をためんとして牛を殺すものであると信ずる。淺薄な表現的機構型の論などこそ全く弊履の如く捨て去るべきである。又よし歴史的機構型に概念分類上加へられて居る研究でも、その業績に於てすぐれたものは、必ずや作品の完全なる理解への一階梯としての立場に立つて、正しい方法による研究であると斷じ得ると思ふのである。たゞ淺見未熟の研究をこそ斥くべきものであつて、正しき理會は、多くの基礎的研究の力を俟ち、それを統合した上に於てこそ成立し得るものであることを確信するものである。

かゝる立場に立つ私は、中世解釋學の標目の下に、先づその基礎的準備となるべきものをあげ度いと思つた。そのためには、先づ何よりもさきに、從來の研究の吟味が必要である。從來の研究業績をさぐる事なくして、或る研究をはじめることの愚は申すまでもなからう。その中の取るべきは取り、斥くべきは斥け、それ等の研究の不足せる點を補ひ、作品解釋の基礎工事をなすことを第一の問題として、小野直君に、從來の研究の主要なるものゝ索引を作製して貰ふことゝしたのである。解釋學と銘をうつて、作品の研究索引を示すことは、一見羊頭狗肉の嘲を受けるであらうことを考へないのではない。よし嘲をうけても、これを入口として、眞の解釋へ進む人の爲になればと思ふ一念の

あらはれである。

第二章　中世文學相の斷面

中世文學研究には、中世文化の諸相に關する歷史的認識が必要である所以は前にのべたが、廣汎な文化的研究は、主として中世文化史の任務であつて、それは歷史科學の補助を仰がなくては、容易でない。それと、他面に、一般文化史に於ては、文學の諸相並びにその因由などに關しては、あまり說くことが僅少であつて、文學研究者によつて、直接必要な、しかも緊切な方面は、先づ文學研究者によつて、これを直觀的に把握し、統整して示さるべき必要を感じる。もとより私は中世文學の總てに亘つて研究したものでないので、そのすべての諸相を系統的に說くなどといふ事は不可能であるが、これ等の特殊相の中で、比較的に重要なと思ふ方面について、聊かな見解を述べて、中世文學への入門者の先づ會得して居なければならない二三點を明かにし度いと思ふ。

構成藝術的傾向

私のこゝにあげた名目は、假りにかく名付けたに過ぎないのであるが、その意味する所は、中世文學には、種々の情調を釀し出すやうな要素を集めて、それを巧妙に綴り合はせ、全體として、複雜な微妙な情調的感動を起さしめるやうな風に構成された作品の傾向が多いといふ事である。例へば、謠曲の詞章などは、一つの短い物語りとも見得るが、その中には、古歌・故事・古物語の詞章の斷片、漢詩などの、最も人口に膾炙した馴染深い詞句が、綴の錦式につぎ合はされて居るのである。從つて、文意のなめらかな進展といふ立場や、冗語を剪除すべしといふ立場などから見れば、不要にして、切り除かるべき詞句が甚だ多いのである。しかし、謠曲詞章の求める所は、その詞章は目で讀まるべきでなくて、謠つて耳に快よき感情をあたへつゝ、物語の內容にふさは

しい情調的な氣分を濃厚にかもし出して、聽く者をして優雅な感動を惹き起させる點にあるのである。人口に膾炙して居る詩・歌・文章などは、それぞれ、單獨でも、人々の心に美的感動を惹起させるだけの語感的雰圍氣を多分にその背後に持つて居るのである。それが、巧妙に謠曲中に配列されて一詞章を構成する場合には、それ等の情調的な匂ひは、相互に交響しあひ映發しあつて、單獨ではとても味ひ得られない複雜な微妙な感情を醸し出すものである。ここをねらつて作られたものとして見なければ、謠曲詞章などは全くゆがんだ見方となり了らざるを得ない。この極端な例は、宴曲であらう。宴曲は、高野博士の評せられる通り、全く「張り交ぜ屛風」的な文章である。それはたゞ情調を以てのみ連なつたもので、意味の進展を度外視した作である。丁度枕草子の「物はづくし」と、蕉風連句の付合との間に位してよいやうなものである。これなども、構成藝術的傾向といふ特色と、そのねらひ所が情調醞釀にある點とを見のがしたならば、全く理解に苦しむ作品とならざるを得ない。

　かうした傾向は、その源を新古今的手法に發したものであると私には考へられる。新古今集時代の幽玄有心の歌風は、歌語の持つ語感を極度にはたらかせて、複雜にして濃やかな且つ縹緲とした情調を構成するにあつたのである。本歌取りの手法の發達や、詞は三代集を出づべからずなどといふ考方は、なるべく豐富な語感を持つた語句を使用しようといふ考方のあらはれと解すべきものである。さうした語句を以て、あたかも塔を組み立てる如き心持で、全體的な情調的効果をねらつて組み立てるのが、新古今的手法の特色である。この點に於ては、新古今集はたしかに注目に價する傑作といひ得る。和歌に於ては、鎌倉期に到つて、平淡化し、從つて新古今的手法は學び難きものとして、これをつぐものはなくなつたが、三五記や愚祕抄に見える三十種に及ぶ歌體の分類は、いづれも情調を感受することの敏感であつた當時の歌人の敏感性を物語るものであると思ふ。この敏感性と情調尊重とが、流れ行つて、新生命を

開拓したものが、有心體連歌であることも又首肯せられるであらう。

連歌は元來が機智のあらそひの面白さから發展したものであつて、長連歌になつてからも、白黒の賦物、さては源氏國名の賦物などは、何れかといへば、附合の面白さよりは、賦し方の恰悧さに興味の中心があつたものであると思ふ。それが、附合の面白さを中心とするに到るには、前句と後句との持つ情調の連關交響に興趣を見出したによるものであると思ふ。一句一句に獨立して、しかもその間を連ねる縹緲とした連想の雰圍氣を醸し、そこに情調の新生を喜びながら、百韻の間に、情調變化の序破急を考へて居る所などは、謠曲の進み方に一脈相通ずる所さへ感ぜられるではないか。連歌はどうしても、新古今的な情調構成の手法の流れと見なくては、説明のつき難いものである。

在來の著名な文學を、その構成要素に分割して、その各要素をそれぞれに結合して、新たな形に綴り上げるといふ行き方は、單に謠曲ばかりでなくて、當時行はれた物語の上にもこれを見るのである。例へば岩清水物語や異本堤中納言物語等に於て、我々は到る處に、源氏物語中の文章の有名な斷片を指摘する事が出來、構想の類似をも指摘し得るのである。創作力の旺盛でない作者や時代には、前期の有名な文學のかうした利用法によつて、幾つかの類型的な文學が生れるのであるが、これを單に無價値と斷じ去るのは、文學の一般的立場に立つ場合に於て許される判斷であつて、構成的な藝術で情調的感動だけを要求した時代としては、これは最も有効なる一手法として、存在を許されたばかりでなく、その手際が賞玩せられたのである。

かやうな組合せ式な構成手法は、當時の一般階級（貴族に對して、武士や庶民の階級をこゝでは意味する）の藝術になるほど顯著である。例へば和歌よりは連歌に、物語よりは能樂などに、一層の著しさを見る。そして、この方面

からして、中世文學の特色ある作品が生れて來たと言ひ得る。例へば、世阿彌によつて大成せられた猿樂は、平安朝末期以來一般社會に歡迎せられた所の、舞踊的要素と、今樣白拍子などの系統を引いた小唄や曲舞などの歌謠的要素や音樂的要素、平安朝以來の名歌・名文章・名詩などを綴合した詞章的要素、これ等を、巧妙に配列し組合せて、大衆の目に耳に共に訴へて、美的陶醉にひたらせる藝術たらしめたものであつて、全く構成手法の藝術である。その素材が又多く平家や曾我・義經記などの人口に膾炙したものに仰いで居るのも、この藝術的効果をねらつたものである。これが室町末になると、更に造庭藝術や茶道藝術などにも發展してゆくのであつて、何れも、情調醞釀を目的として、巧妙に組合せられた藝術である點に於ては變りはないのである。

藝術に對する態度

中世の作家なり藝術家が、藝道に對して、如何なる態度を以て之に臨んで居たかといふ事は、又中世文化を味はふ上に於て是非とも檢討しなければならない問題であるが、次にこれに就いての管見の二三をのべて見ようと思ふ。

平安朝の文藝に於ても、それぞれの作家は、自分の創作に關して誠に眞劍な態度で之に向つて居た。名歌一首に命を代へんと祈願した例など、我々は單なる物數奇な逸話としてのみは見過し得ない眞劍さを感ずる。俊成が夜更け人靜まつて後、淨衣に烏帽子して、歌を案じた話なども、如何に彼等歌人が創作に對して、眞劍眞摯であつたかを我々に物語るのである。源氏や枕などの創作にも、非常な苦心が籠められたであらう事は、充分に察せられる。かゝる眞劍さは、又次の中世文學にもうけつがれてゐるのである。

1〔道の意識と專門道的發達〕　平安朝時代の文學家が、創作に對して、彫身鏤骨的な苦心と修練を重ねたその態度が、中世に到つて大きい實を結んだものは、文藝を一の「道」として見ることであつた。

文學創作は半分以上作家の天稟による。天才にしてはじめて雄大な傑作を生み出し得ることは、古今東西を通じて變らぬ眞理である。平安朝文學は大體に於て、天才個人の所產であると見得る。これが爲に作家が苦心し修養を重ねたことは勿論であるが、彼等はいはゞ自己の創作的欲望に驅られ、天才的素質の自然的發露として、創作家藝術家となつたものと見得る。ところが、中世に到ると、天才の有無はさして問ふことなく、專門の家柄として、藝を相承するといふ現象があらはれて來た。かくして、「天才に加ふるに努力を以てした」のが變じて、「努力と鍛練と專心とによつて、天才的才能の乏しきものでも、相當の境地にまで達せしめる」といふ風な考へ方が生じて來た如く思はれるのである。

藝術に專門の家柄が生じ、子孫その藝術を相承してゆくといふ事は、よしその家柄を生ぜしめた原因が、その道の天才であつて、——例へば和歌に於ける二條・京極・冷泉の三流が、俊成定家の天才的素質によつて地盤が築かれた如き——その地盤の上に立てられ、從つて遺傳的に見て、その子孫にその道の天才の出現が望み得らるゝものとしても、藝術そのものゝ發達進步の上からは、あまり良い制とは思はれない。師匠弟子の相承に轉じてゆくのは、自然であるが、かうした惡い條件の下にあつて、前人の遺業を失墜せぬやうの人間に作りあげてゆくには、よほどの苦心が必要である。そしてそれは、專心に精進道を步んで鍛練を重ねてゆくより以外に方法はないのである。努力を以て天才を生み出してゆく方法である。而してかゝる立場から、道の意識は生れたものである。

道は專門道である。自己の携はる專門の業を、專心に苦行的に、二六時中些の油斷もなく修業してゆくのである。非常に强力な不撓の意志力を必要とする。この力は、その業を宗教的に神聖視する信念から生れる。その中に徹する道であり、そのための刻苦である。こゝに專門家・道の人と、趣味家即ち素人との區別が生れる。素人には、天分

は道の人に比してすぐれた者も多々あるであらうが、兼好の所謂、堪能といへども道の人ならぬ者は、よし不堪なりとも道を行ずる人に比べると、企及し難い藝の徑庭が見られるといふ現象が生れる。その原因は、一は道を守つて油斷なき修業をつむに反して、他は自己の嗜好にまかせてひとへにほしいまゝなるによるといはれてゐるのである。

「道」といふものゝ考へ方は、現代的にいへば一つの理念を描くことである。そしてその理念的境地といふものと、自己との結合を、精進不退轉の努力によつて貫かうとする強烈な意志力の發動がその根幹をなしてゐる。歌道といひ畫道といひ茶道といひ連歌道といひ、能樂道といふ言葉の中には、和歌なり連歌なり、その他その携はる藝術に對して、單に傑作を得ようといふ眞劍な努力以外に、その道の鍛練によつて、自己の人間的完成を庶幾する精神や、又その道の精華を以て永遠に傳へようとする念願や、又これを以て人々の魂を救はうといふ希望などの渾融して居るものを我々は感ずるのである。その根柢には、日本精神の基をなす所の誠の心の深く強く存在することも、又明かな事實である。誠なくして、捨身的な不退轉の精進などは生れよう筈もなく、誠なくして、尊重崇拜の念などは起らう筈もない。而して、この「人の內にある誠」は、又「天地の誠」に通ずるものであるとの信念が、彼等をして、道を以て宗教的なるものと觀ぜしめる原因をなして居たのである。かゝる態度を中世に於て釀成したのは、專門家的發展を遂げた所から生れて來たものであつて、二六時中、油斷なく精神を集中し統一し鍛練を重ねるといふことは、專門家でなくては、行じ難いのである。

2「型による修練と鍛練道」　道は理念的存在であり宗教的な色彩を帶びて居る。それによつて、專門家は超克の努力と不退轉の精進を呼び醒まされるのであるが、道だけでは、具體的な姿を示すものがない。「型」は實に具體的な道の發現として、中世人に見られたものである。發生の立場からいへば、先人の苦心經營の結果生れ出でた藝道の規範

であり、又同時に理想とすべき模範的作物である。歌道に例をとれば、有名な古歌人殊に俊成西行定家等の遺詠は、中世歌人の理想であり、定家以來の數々の歌論や家々の庭訓は、修業に關しての規範であつて、これ等は、先人尊敬の念と相俟つて、絕對不可侵の法則として中世歌人に感ぜられたものであつた。その法式や格に從つて、不斷の鍛練を重ねてゆく事が、道に近づく唯一の方途として考へられたのである。彼等には、自由批判の精神が缺けて居るかの如くに見えた。それほどに、型の尊重は當時の藝界を風靡したのである。

しかし中世人は、型を以て眞の自由に到る方途であると深く信じて居た一面を忘れてはならない。眞の大自在は、芭蕉の所謂「格に入り、格を出でゝ、始めて大自在を得べし」といふ點に存する。型に入り型を我がものにし、自分のすべてが型に合致する段階が第一段。遂に型の存在を忘れて、しかも自然に型に合致する、所謂心の欲する所に從つて矩を超えざる境地が第二段。この第二の境地こそ、眞の大自在の境である。中世のすぐれた藝術家は、いづれもこの境を目ざして進んだ。從つて、入門當初の型などといふものに對して、是非善惡の批判を加へる必要を認めなかつた。何となれば、先人はその型によつて、大自在に到達し得て居るのであつて、その型の實際的効果は、すでに先人の身を以て實證しておいたものであるからである。

鍛練道といふことも、中世藝道の重大なる特色であると思ふ。卽ちこれは一種の苦行であり難行道であつて、趣味や娛樂の立場に於て、藝術を樂しむ立場とは、全く趣を異にして居るのである。樂しみの爲でなくて、道に奉ずるが爲であり、大自在境に到達して道の輝きを益々あげんが爲である。彼等は單なる娛樂や趣味以上の偉大なる喜びの法悅を目ざして進んだもので、實質上に於ては己が家、己が藝道の隆昌をかち得ることを結果したのである。

鍛練道は先づ型に入る事を以て始まる。少年の時代に初まつて、生涯を習ひ徹すのである。「生命には限あり、道

には限なし」といふ信念のあらはれである。型によつて基本風を學ぶ。能樂に例をとれば、歌舞の二曲、老・女・軍の三體物眞似がその本風であり、次に本風より出發して、應用の藝風を學び、これ等によつて猛烈な鍛練を加へるのである。かくして藝を我が「心身に覺え入つた藝」たらしめ、模倣の域から、有主風の藝境へと進める。こゝに於て、師よりの學習は完了するが、それ以後は自己が自己を鍛練する眞の鍛練道に入る。かくて藝に少しの危げもない、餘裕ある藝境に進む。これを「安位」と世阿彌は呼んで居る。更に進むと闌位の藝境がある。これは所謂「格を出でたる藝」であつて、大自在境への飛躍である。心の欲するまゝに演じて、少しも藝術的効果を傷らず、却つて、一層の妙味を發揮し得る境である。而して至極の境は、妙境であり、無の境地である。妙といひ無といふのは、いづれも絶對の境であつて、これを筆舌に述べ難い點よりして名づけられたものである。以上のべたのは、能樂の一例であるが、かうした鍛練の道は、連歌に於ても畫道に於ても、歌道に於ても華道に於ても、等しく實行せられて居たものであつて、無の境地に通じ、虚の世界に優游する所に、人生最大の法悦味を求めたものであつた。そして、これ等の虚・無・空の世界は又、同時に禪の神祕に通ずる所がある。又かゝる鍛練道は、禪の修行に相通ずるものがあつて、こゝに於て、藝と、禪的宗教と、誠との結合が深く〳〵結成せられてゐるのを見るのである。

3〔宗教的傾向と作品超越性〕 中世藝術家の藝に對し人生に對する態度は、前述のやうに、究極は宗教的なものに到るのであるが、それは單に既成宗教の何れかに屬するといつたやうなものでなく、それ等を貫く一なるものに求められるかと思はれる。即ち儒・佛・老のすべてを包含し、神道的な要素をも攝取したものであつて、もはや宗教のために奉仕する藝術の域をはなれて、藝術自體を一つの宗教として見るやうな態度である。金春禪竹の六輪一露の藝論など、その格好の一例であらう。又心敬の歌論連歌論などは、佛教的色彩の多い一例であつて、連歌和歌は究極に於

て佛道の眞髓に通ずる所あることを說いて居る。又耕雲の歌論や野守鏡の歌觀などには、禪的氣鋒のするどい考察が見られるのであつて、それ等を通じて、我々は當時の藝術家の、實に眞摯な精神と、强烈な意志の發現とをしみじみと感ぜざるを得ないのである。

更に眼を轉ずると、中世後期に於ける古今傳授といふものの存在がある。これは歌道に於て、古今集の祕事を傳授することであつて、元來は學問的立場のものであつたのであるが、それの神祕化が室町後期に於て、公然と認容せられるに到つた。つまり、古今の傳授そのものゝ中に、理世撫民・治國平天下の極意が含まれて居るといふ考察であつて、遂には有名な幽齋の田邊城に於ける勅命の傳授などにまで進んだのであつた。今日の眼より見れば、實に荒唐無稽なものとの批判も可能であり、その傳授の切紙口傳などに見ても、これが治國平天下の道に深い關係のあるものとは思はれぬものであるが、文藝殊に歌道の神聖觀は、遂にかくの如きものを生むに到つて居るのである。又、連歌に於ても、連歌は法樂の大功德のあるものと考へられて、神佛に祈禱をこむる際には、多くの場合連歌が用ひられたものである。これ等も、一時的迷信であると片付けてしまへば、問題とするに足りないであらうが、さうした迷信ともいふべき考へ方を生み出した原因に思ひ到る時には、彼等が如何にこの文藝を神聖視して居たかを痛切に感ぜざるを得ないものがある。文藝は聖なるものを目ざし、天地神明に冥合する事を以て、その究極境と考へられてゐたものと見得る。

以上述べ來つた對藝術の態度から推して、當然の歸結となる所のものは、中世に於ける藝術は、結局に於て「態度の藝術」であるといふ事である。藝術的作品は、究極の目的ではなくして、作家や藝術家の人間的完成が終局目的として考へられ、藝に對する態度如何が、常に反省批判の目當となつて居る事である。芭蕉が一文字引き下せば卽ち反

古なり」と喝破して、作品自體以上の世界のある事を暗示したのは、この中世的な「態度の藝術」の傳統によつたものである。究極は解脱にあり、空無の世界に魂を優游せしめることにあり、造化の妙に從つて造化に歸する事である。しかも、これは、前述のやうに、強烈なる意志の實行力と、當住不斷の鍛練と、道を尊ぶ謙虚な精神と、道を愛する熱意とを通じて、その究極に於てのみ求めらるゝ所のものであつて、平安朝的な諦めの果の虚無の世界とは全然その性質を異にするものであることは、牢記しなければならない所である。

新興階級的要素

中世に於て目ざましい活躍を演じて、新興階級の先端に立つたものは、言ふまでもなく武士階級であつたが、それに引きつゞいてあらはれたものは、實に庶民階級である。而してこの二者は、その教養の程度に於て、又その性格嗜好に於て、平安朝の貴族階級のそれと、格段の相違を持つて居たのである。そして、貴族の實權が武士にうつり、風俗政事等百般の事象が、武士中心の傾向に推移しつゝある中世に於て、文學も亦、當然その傾向を帯びざるを得ない事も、亦明白な事實であつた。この新興階級の兩者は、政治的地位や社會的待遇に於ては、自づから區別があつたが、何れも、前代に於ける庶民階級であり、且つその延長である以上、その性格教養に於て、さして著しい懸隔は認め難い。庶民が武士と相分離して、獨自の文化を宣揚するのは、近世に到つて成しとげられたものであつて、中世の文學を考察する時には、共にこれを新興階級の名目の下に一括して述べる方が、妥當であると思はれる。以下、かうした階級によつて、中世文學が、如何なる色彩を帯びしめられるに到つたかを述べて見よう。

1「啓蒙的傾向と娯樂的傾向」　當時の文學が呼びかけようとした對手は、平安朝貴族に比して、智的或は情的な教養に於て、遙かに程度が低かつた。先づこれを自覺したのは、武士階級であつたが、たゞひたすらに貴族文化に憧憬

追隨した平家は、遂に貴族の弊害をも受けて、忽ちに滅亡してしまつた。鎌倉時代はかくして始まつたのであるから、武士が再びその轍をふむまいとして、むしろ尚武を希ひ、文學に於ても、教訓的色彩や啓蒙的色彩に豊かなものを歡迎したであらう事は察せられる。十訓抄や古今著聞集などの、世に迎へられた理由も、さうした處に一つの理由があると思ふのである。又平家物語を始め、數々の戰記物が、彼等の間に絶大な歡迎支持を受けたのも、勿論他の理由もあらうが、それ等が、自然に武人の好尚に叶ひ、教訓的啓蒙的又尚武的精神に富んで居たが爲であらうと思はれる。かくて武人並に庶民は、漸次に自己の性格に適した教養を重ねるに到つたものである。

又他の娯樂的傾向の方面を見るに、これは更に前者よりも大衆に對しての魅力は强いことは明かである。しかも、それが、深い教養を俟たずとも充分に理解され、その内容が、大衆の同情同感を誘ふものであり、いはゞ、新興階級のためにその代辯者となつて、彼等の性格を語り好尚を語り意志を語り名譽を語るものであれば、彼等がこれを歡迎しそれに陶醉するであらうことは、あまりにも明白である。戰記物をはじめ、曾我物語や義經記さては幸若詞曲などが、彼等武人に喜ばれたのは、大部分かうした理由によるものである。又純粹の娯樂的な方面、例へば、白拍子・曲舞・小唄・猿樂・狂言、さては、連歌などに到る歌謡舞曲等の、會席的傾向の文藝が、彼等の間に行はれたのは、これ亦怪しむに足りない。貴族社會の詩歌管絃に代ふるに、かうした庶民的傾向の藝術を以てしたものであつて、こゝに、時代文化の姿があざやかにあらはれてゐるのである。今これ等の色彩性質を、總觀的にながめる時、大凡次の如く言ひ得るであらう。

2〔素朴性の發現〕 素朴性といふのは、平安朝文學の感傷的性質に對して、假りにかく名付けてみたのであるが、その内容としては、明朗な健康味を帯びた庶民的性格、意志的な强直性をそなへた單純端的な武士的性格、空想的浪

曼的で、しかも物事の兩極端へと對角線的に動く庶民的傾向等が數へられるであらう。前代平安朝文學が、感性的であり情趣的であり、その表現は、縷々として情趣美を描きつくさんとする傾向があるに對して、中世文學には、何となく線の太い、大まかな、細部にあまり拘泥しないで、ぐん〳〵と事件を描き出してゆく、端的な直線的な力強い表現が目立つ。これは前代のやうな纖細な情趣美を味得するだけのこまかい感受性の教養のないものに對しては、どうしても、かうした單純端的な表現でなくては、その興味をつなぐ事は出來ない爲である。源氏物語の光源氏の心理描寫よりも、義經記にあらはれた有爲轉變の激しい主人公の運命悲劇的な事件の描き方の方が庶民にはぴたりと感ぜられる。夕貌の數奇な運命よりも、靜の悲痛が彼等には身にしみて同情を感ぜられたのである。又表現の端的な線の太さは、自づとその取材のあつかひ方にあらはれて、事件事物の對照や推移に於ても、極端より極端へと進行して、中庸を得た境地を微細に描くといふ事は不得意である。得意に對する失意、剛勇に對する怯懦、富貴に對する貧賤、善に對する惡といつた、大ざつぱな類型的な描寫で充分に滿足して居るのである。更に事件の描寫に於ても人物の葛藤に於ても、空想的であることに少しも不滿を持たず、あたかも少年時代の如き單純素朴な空想の世界をむしろ歡迎して居る傾向がある。お伽草紙などはこの適例であらう。庶民は永久に健康なロマンチストであり得るものである。

3〔英傑崇拜と實力讃美の精神〕　戰記類に最も著しくあらはれた庶民的武士的嗜好に、英傑崇拜がある。しかもそれは治世の人傑ではなくて、兵馬の英雄である。端的明朗、愛すべき單純性と稚氣を持ち、武力と智略を兼備し、一面に部下に對して厚き恩情を有する者は、當時の理想的英雄であつた。榮花物語の道長も、英傑讃歎の筆を以て描かれて居るが、これを平家物語の義經と比べる時、兩者の性質の非常な相違におどろかされざるを得ない。こゝに中世文學の一特色がある。從つて、一人の英雄を中心として、あまたの英雄的說話が漸次に附加凝結して、層一層とその

英傑を超人間的存在なものにまで高めてしまふ。こゝに庶民的な空想性のほしいまゝなる活躍を見、又庶民の心底に深い根ざしを持つて居るところの實力讃美のあらはなる表出を感ずるのである。

4〔會合共樂的性質〕　大衆性の一發現として、多數のものが一所に會合し、共に共に同一の文藝を味はうといふ性質も、中世文學界の一大特色と見らるべき重要事項であると思ふ。平家物語が語られたのは、大衆を相手であつて、獨りの聽者を求めたものではなかつた。小唄や今樣や白拍子なども、會席の一般のものを感ぜしめ樂しませる爲であり、進んでは、猿樂田樂曲舞幸若などに到つては、その對象として考へられてゐるのは、都鄙貴賤を含めた夥しい大衆であつたのである。「衆人の愛敬を以て一座建立の壽福となす」といつた觀阿の言は正にこれを裏書きするものである。

從つて、中世文學の多くは、この立場よりして、文學に書かれた冊子をひもといて、獨り靜に鑑賞するといふよりも、或は語られ或は謡はれて、耳に聞いて樂しみ感ずる性質のものとなつた。無學文盲の者にも、耳にひびく快よい律語の感受性はあり、目に見る美しい舞姿を鑑賞するだけの感受力はあり得る。この耳に訴へる美、目に訴へる美、この二つが結合して、これに物語的な筋の發展をからませる時、自然に劇的藝術の形成せられるに到ることも明かである。能樂はかゝる立場から考へても、中世に於て當然に發生しなければならないものであつたのである。狂言は台詞劇であるから、耳にひゞく律語の快感は缺ける代りに、その用語に於て當時の會話語を用ひ、その內容に於ては最も庶民の實生活に近いものであるだけに、會合的共樂的文藝としては、或は能樂以上に歡迎せられたものであるまいかと推測せられる。又、文學としての性質に於ては、前者と異るが、連歌といふものが、二條河原の落首に見えるほどに流行したといふのも、その大半の魅力は會席文藝であり得た爲であらうと思はれる。庶民の間に弄ばれた連歌は、作者すべてが文字を解する徒であつたとは思はれない。文盲にして文藝の座に連るといふ奇現象は、當時にあ

つてはさして奇ではなかつたであらう。狂言に見える連歌物には、さうした世態を思はせるものが多い。かうした會合的な又共樂的な性質は、一面に於ては、それによつて文藝へ接近せしめ、一般庶民を相當な教養にまで高める機緣となつたであらう事も想像せられ、又多數が一堂に會して、共に共に同一文藝を享樂する事は、相互の融和と團結を强固ならしめる結果を生じたであらう事も考へ得られるのである。

以上あげた三つの特色の他に、尚中世文學の特色として、佛教思想の浸潤や、武士道的精神の發現や、老莊隱遁的思想や高踏的思想のあらはれなども重要なものであるが、これ等は多くの先覺者によつて旣に充分に說かれて居ると思ふので、直に結語に移る。

中世文學に於ては、情趣構成藝術的傾向と、大衆的傾向との二流がある。前者は平安朝の貴族文化の餘響であり、後者は庶民といふ新興階級の要求に應じたものである。しかも、前者よりは幽玄微妙な情趣美を、後者よりは力と意志の强さを、それ〳〵に巧妙に攝取して、これに道の藝術としての深味と力强さを與へて、文藝以上の人間的修養に資し、日本精神の發現として、世界にほこるべき精神的遺產を殘してくれた中世といふものは、今後益々研究せられてゆくべきものであり、現に又その機運の旺盛に漲らんとして居ることは、學徒として深い關心を持つべきであることをのべて、この稿を終ることとする

中世解釋學

……〔後篇〕中世文學の研究要目……

小野　直

第一章　和歌及び歌論

和歌方面に於ては、上代と中世を分つに、新古今集を以てした。平安朝の和歌の發展は、新古今集に到つて、大凡その極地に達して居り、新勅撰に到つて、平淡の境に向ひそめて居ることが一つの理由、第二の理由は、後の中世歌人等の理想が、新古今は及び難きものとして、新勅撰の風を規模と仰ぐに到つたことである。勿論定家晩年の嚮撰といふことも、與つてこれに力あるのである。近世と中世との境界は、戸田茂睡の得本値を以て分つことゝした。茂睡によつて、二條家風の傳統和歌に、革新の巨砲が發せられたためである。

和歌及び和歌史に透徹した理會を把持せんが爲には、先づ我々は作品の世界に分け入らねばならない。この作品に對する解釋に當つては、その作者の個性の問題、その作者の生存した時代の歌の理想若しくは歌の理念の如何なるものであつたかの問題、又理念と實際の創作とを連繫する役目に立つ所の歌學・作法・修辭等に對する理解の問題を、根本的に審査する必要がある。これ等の研究によつて、我々は當時の歌界を包む雰圍氣を味讀し、かくして、その家

圍氣の中に於て製作せられた作品に對し、比較的に公平妥當な價値判斷を下し得るのである。又同じ作品としても、それが勅撰集といふ公的儀禮的な色彩を帶びたもの丶中のそれと、個々作家の家集のそれとは、見る角度を違へてかからねばならない。又百首和歌などといふものは、その本來の性質・約束を理解した上で、これに臨む必要がある。

特に心すべき事は、中世に於ける和歌の流派についてである。二條・京極・冷泉の三家の傳統の發生、その反目、各派の理想等、これを仔細に見なくては、中世の和歌は論じ難い。又これ等の爭の圈外に立つた人々の歌論歌風をも併せ見るを要する。

以上の用意にして闕くる所なくんば、中世和歌の姿を大體あやまりなく認識し得るであらう。而してかく生れたる見解を、上代及び近世とのそれと比較する時、中世和歌を一貫する時代的個性を愈々鮮明ならしめることが出來ると思ふ。

勅撰集の部

勅撰集一般について考察すべき事項は、その集の勅撰せられた時代の歌界の横斷面的認識である。歌界全體の流れを、横斷して、その時代の歌風を直觀するのである。家集などが一個性の進展の流動相そのものを示すのとは性質の相違のあることに注意を要する。この認識を誤なからしめる爲には、更に次の諸點に心をいたさればならない。(一)その勅撰集の成立事情。(二)撰者の和歌に對する態度、換言すれば撰者の理想、傳統的地位、歌風等に關する理解。(三)撰者の撰歌態度、これはその時代の作家の作品に臨む態度と、前代歌人の作に臨む態度との兩面より見るを要する。これ等の三點に心して、勅撰集に對する時、撰者の見識と時代歌風との綜合の上に成立した和歌界の横斷面的消息が明かになる。而して次にそれ等の幾つかの勅撰集を、時代的系列に於て再吟味する時、各々の特異性に愈々明かになると共に、中世歌風推移の大なる流を直觀的に把握し得る。以下勅撰集及これに類似のものについて個々的に略記しよう。

一般的に參考すべきものは、吉田令世の歴代和歌勅撰考(校註國歌大系、八代集下卷、附錄として收められてゐる)である。研究者はこれによつて概略の知識を得、更に溯つて、當時の日

記・記錄等の原據から、充分に調査を要する。

新勅撰和歌集　藤原定家が四條天皇の貞永元年六月和歌勅撰の命を奉じ同年十月假名序と目錄を奏上し、天福二年六月假に奏覽し、切捨切繼が行はれ、嘉禎元年三月十二日奏覽に供したものである。定家七十歳をこえた老境にあつて、歌才圓熟の上に更に枯淡の味を好む域に至つての獨自の撰集である。本集に於て着眼すべき點は、(一)定家の歌境。平明淡雅の點を、新古今集、及拾遺愚草等と實際上に於て比較すること。(二)新古今集を華に過ぎたりといひ、本集は實を採れりといはれる二條家の理想を、本集の中に把握すること。(三)明月記によつて本集成立時代の定家の心境を考察して、その成立事情の機微にふれるべきこと等であらう。

▲新勅撰和歌集抄(八卷)祖能著　▲新勅撰抄(二十卷、寫本、國書一覽に見ゆ)堯眞著　▲新勅撰評(二卷、元祿十三年五月廿六日成、契沖全書註釋部所收)契沖　▲新勅撰類礎(一卷)　▲新勅撰和歌集疑問(一卷、寫本、大日本歌書綜覽)　▲美濃迺家苞折添(本居宣長、六十五首を拔萃評註)　▲新勅撰和歌集の一考察(「國語と國文學」昭和七年一月)谷亮平

續後撰和歌集　二十卷　撰者藤原爲家。大覺寺統の後深草天皇寶治二年七月、後嵯峨院の院宣により撰集を始め、建長三年に成る。多く後拾遺以後、新くは寛元四年後深草院御即位大嘗會の風俗歌も載る。その歌調は新勅撰の承繼と見るべき平明の調に滿されてゐる。本集の撰者爲家の歌風・歌論・及び彼の性格等を一わたり檢討して、後本集の撰述態度を見直す必要がある。又、新勅撰集との比較、續古今集との比較によつて、爲家の本集に對する態度は一層明瞭になるべき筈である。

▲八雲口傳(和歌古語深秘抄所收)

▲美濃迺家苞上卷には本集の歌六十六首を拔き、註釋あり。

續古今集和歌集　二十卷　撰者爲家・基家・家良・行家・光俊五人。大覺寺統の後嵯峨上皇の院宣を受けて(正元元年三月十六日)爲家一人が撰集に從事したが、後前記四人が加つたことを爲家は不滿に思つた。本集に於ては、爲家と左大辨光俊との關係について考慮を拂ふを要する。兩者は歌風に於てやゝ異るものがあり、光俊が幕府の背景を以て相當に爲家に掣肘を加へた點などを考へるべきである。

▲水蛙眼目(群書類從所收)

續拾遺和歌集　二十卷　後宇多天皇建治二年七月二十二日、藤原爲氏が龜山院の院宣により撰集に從事し弘安元年十二月廿七日奏覽した。

▲勅撰次第　▲勅撰目錄　▲增鏡(老の波)　▲拾芥抄　▲水蛙眼目。爲氏の歌論書として和歌用意條々。

新後撰和歌集　二十卷　後伏見天皇の正安三年十一月二十三日、藤原爲世が大覺寺統後宇多上皇の詔を承け、後三條天皇の嘉元元年十二月十九日に撰進した。爲世は後宇多天皇に事へて寵臣となり、その女は後醍醐天皇の寵幸を得て尊良親王・宗良親王等を生んだ。當時得意な狀態にある爲世は、反對派歌人の

歌を載することが少く、津守國冬・津守國道・津守國助等の津守氏一統の歌が多かつたので難ずる人は津守集といつた。

▲拾芥抄　▲勅撰次第　▲水蛙眼目　▲延慶兩卿訴陳狀　▲和歌庭訓抄　▲野守鏡の所說も參照。

玉葉和歌集　花園天皇の正和元年三月廿九日に成つた。但し成立年月には異說がある（歷代和歌勅撰考參照）。撰者は京極爲兼。本集に就ては、風雅集と共に、京極家系の撰集として注目する必要がある。成立事情に關しては、伏見院御記・花園院宸記・延慶兩卿訴陳狀等によつて、爲世爲兼の爭を考へるべく、歌風に關しては、爲兼の歌論爲兼卿和歌抄によつて撰者の態度を見るべく、更に二條派の對玉葉觀は、歌苑連署事書等によつて見るべきであらう。これ等に通じた上で、更に本集の中にあらはれたる特異の歌風を、自ら考究すべきである。尙、爲兼集の條參照。

▲拾芥抄　▲勅撰目錄　▲勅撰次第　▲增鏡

續千載和歌集　二十卷　後宇多上皇の詔を承けて、藤原爲世が撰して後醍醐天皇の元應二年四月十九日に奏覽した。爲世はその女爲子が後醍醐天皇の寵遇を蒙つて、尊良宗良兩親王を生み奉つたので益勢力を得、玉葉和歌集の撰者を爲兼と爭つて果さなかつた憂欝もここに全く晴れたといふことが出來る。

▲勅撰目錄　▲勅撰次第　▲增鏡　▲水蛙眼目　▲和歌庭訓抄

續後拾遺和歌集　二十卷　撰者爲藤後に爲定　元亨三年七月二日藤原爲世の子爲藤勅命を奉じ同年八月四日に撰歌のことを初めた（勅撰次第）、翌四年七月十七日（拾芥抄・常樂記）に爲藤が卒したのでその甥爲定が命を奉じて正中二年十二月十八日に四季の部を奏覽した（增鏡「春のわかれ」）

▲拾芥抄　▲勅撰目錄　▲勅撰次第　▲增鏡　▲花園院宸記

風雅和歌集　二十卷　花園院御自撰、南北朝對立の頃始めての勅撰和歌集で、干戈相交ゆるの折、院の御自撰の集として、この理由からも尊い歌集である。貞和二年十一月成立。この撰集に從事したのは藤原公蔭・藤原爲基・藤原爲秀で、爲秀は爲相の子で、冷泉家の運はここにやうやく興つて來たといへる。

▲園大曆　▲了俊辨要抄　▲東常緣聞書　▲幽齋聞書

新千載和歌集　二十卷　撰者藤原爲定が後村上天皇の正平十一年六月十一日に後光嚴院の勅を承けて、同十四年奏覽。數に於て多いのは爲世の四十二首、爲定の三十六首である。歌調は流麗であるが、尙爲世の平板溫和な域を脫し得ない。

▲園大曆　▲勅撰次第　▲拾芥抄

新拾遺和歌集　二十卷　吉野朝の後村上天皇の正平十八年二月廿九日藤原爲明が後光嚴院の詔を受けて撰に當り、中途で薨去、ここに頓阿法師は之を繼ぎて定成す。

▲拾芥抄　▲勅撰次第　▲徵書記物語

新後拾遺和歌集　二十卷　長慶天皇の天授元年六月二十九日後圓融院の詔を承けて藤原爲遠がその撰者となる。爲遠（永德元年）中途で薨じ藤原爲重後を繼ぎ弘和三年完成し、元中元年奏上。南朝君臣の詠は選んでない。

▲勅撰次第

新續古今和歌集 二十卷 後花園天皇の永享五年八月二十五日飛鳥井雅世勅命によつて撰集のことに當り同十一年六月二十七日完成した。一條兼良が和文と漢文との序を撰し、南朝の臣の作は撰らなかつた。

▲薩戒記 ▲拾芥抄

尚、勅撰集以外の撰集として注目すべきものに、新葉和歌集、夫木和歌集、風葉和歌集がある。序を以て次に記しておく。

新葉和歌集 二十卷 撰者宗良親王 長慶天皇の弘和元年、十二月三日奏覽し奉つた勅撰に准ぜられた。所載千四百二十首元弘元年より弘和元年に至る吉野朝關係者の和歌集。集中には悲憤慷慨の歌もあつて力と意氣とで南朝を支持した涙ぐましい悲壯な生活がうかがはれる。しかし、大體より言へば二條家の歌風が主流をなしてゐるのである。

▲新葉集作者部類(一卷)柳原忠次 ▲頭註新葉和歌集(一冊、明治二十五年三月忠順の嗣子忠淨出版) 村上忠順 ▲新葉和歌集を讀む(「國學院雜誌」第五卷第六號)鳥野幸次 ▲新葉集の奥書について(「歷史地理」第一八卷第六號)中村直勝 ▲新葉和歌集註釋(「あさみどり」五卷1、3、4、8、10號)森臣彦 ▲新葉和歌集を讀む(「わか竹」四卷十一號)岳南道士 ▲芳野朝の歌道(「わか竹」第七卷一號)武田祐吉 ▲新葉集と李花集(「わか竹」第七卷第二號)芝野六助 ▲新葉集は長慶天皇の勅撰(「わか竹」第九卷十一號)八代國治 ▲南北朝の歌(「心の花」第二八卷第十號)川田順 ▲新葉和歌集講義(「短歌講座」第五卷) 沼澤龍雄 ▲新葉和歌集(岩波講座日本文學第八回)大野木克豊 ▲後醍醐天皇の御製について(「國語教育」昭和七年九月)伊藤義教

夫木和歌抄 三十六卷 撰者藤原長清、古來の勅撰集に洩れたる歌を類聚したもので、「扶桑」を略名とすべきところを略し夫木と稱したといふこと。所收歌數一萬六千餘首。成立年代は延慶年間と思はれる。(國書刊行會本一卷、寛文五年板を底本とす明治三十九年發行)

▲夫木集抜書(一卷、連歌の付合に便)信西順 ▲歌林拾葉集(一二卷、夫木和歌拾葉抄六卷とも)小幡正信 ▲夫木集類句(三十卷)作者不詳 ▲夫木抄類聚(五卷)同 ▲夫木類標(三卷)高田興清 ▲夫木和歌抄索引(十二卷、いろは順に配列)作者不詳 ▲夫木和歌抄索引(五十音引)國書刊行會明治四十年發行 ▲夫木和歌抄書入(三十七卷、契沖の用本を校正して書入をせるもの)明峯(讃岐の友) ▲細中夫木和歌集(四卷)石津亮澄 ▲夫木和歌集吉詞(二卷)石津亮澄 ▲夫木和歌抄私見(國學院支の研究第廿五號)岡田希雄

風葉和歌集 十八卷 撰者不詳 古い物語中の歌を、勅撰集の體裁に類聚したもので、その序に「ふみなかしといふとしのやとせふりみふらすみしくるるころこれをたてまつりぬる…」とあるから龜山天皇文永八年に成立したことは明かである。所

收千三百八十首、「くさ〴〵のすがたまですべてちうたあまりをあつめてはた巻とせり」(同序)とあるのでもと二十卷あつたことが分る。十九、二十兩卷を缺き十八卷存す。この歌集にあらはれた物語中現存しないいくつかの名をも見し得る。物語研究の上に於ては、極めて重要な參考資料である。(丹鶴叢書及續々群書類從歌文部)

▲校本風葉和歌集　中野莊次　▲風葉和歌集(國語・國文昭和八年二月より)中野莊次

家集之部

拾遺愚草　四卷　藤原定家の歌集、所載歌數約七千六百七十首。內定家の作は三千六百五十三首。建保四年三月十八日に最初の集の淸書を終り、その後追加され天福元年十月三十日出家の時の贈答歌が最後のものである。上卷に百首和歌が多く、中卷に應製、屛風の和歌、下卷部類和歌となつてゐる。他の一卷は韻歌百二十八首七言律詩の韻歌を收む。(刊本六家集本、國民文庫、有朋堂文庫、續國歌大觀等所收)

▲拾遺愚草抄出聞書(寫本一卷、文亀四年乙未玄旨法印寫本の奧書のあるものがある)▲拾遺愚草註(二卷)　▲拾遺愚草抄釋(大正十五年十一月國民文學)新見はるを　▲拾遺愚草研究(昭和二年一月國民文學)谷鼎　▲拾遺愚草研究(日本文學講座)風卷景次郎

金槐和歌集　金槐集とも、鎌倉右大臣家集とも、鎌倉右大臣歌集ともいふ。鎌倉幕府第三代將軍實朝が、公曉の兇刄に斃れた二十八歲までの短歌集で定家所傳本、貞享本、群書類從本は多少の差異が存してゐる。歌は定家に就き乍ら、定家の歌調にそまず、萬葉を取り、まだ生々發展すべき創作力が練達され完成されるのを見なかつたのは遺憾である。

◇塙保己一の群書類從和歌部八十七所收　◇岩波文庫所收

◇國歌大系第十四卷所收、小林好日氏の校訂頭註、類從本を底本とし、貞享本を參考、昭和三年國民圖書株式會社發行

◇鎌倉源實朝公七百年祭協贊會發行、大正八年、類從本原統、賀茂眞淵の評があり、池邊義象の「金槐和歌集のあとに」の文をのす。

▲鎌倉右大臣歌集(覆刻叢書第一卷として明治三十六年覆刻堂から出版の類從本、後に佐々木信綱博士校訂の名で文祥堂から發行)▲訂正增補金槐集(和裝一冊森與里、本多阿伎良、三宅古城校訂、貞享本眞淵、貞享本による、明治三十二年長崎にて出版)　▲新釋源實朝歌集(新釋和歌叢書第三、大正十三年紅玉堂發行)尾山篤二郎　▲金槐和歌集註釋(大和田建樹閱、明治四十年龜井支店書籍部發行)田中常憲　▲金槐和歌集通釋(大正十四年文祥堂發行)杉野又五郎　▲金槐和歌集評解(二冊、朝日商豆閣)飯塚朝子　▲金槐集評釋(昭和二年厚生閣發行)小林好日　▲校註金槐和歌集(貞享本を底本とし類從本を參考、眞淵の評を附す、昭和二年、明治書院發行)佐々木信綱校訂　▲金槐和歌集(要註國文定本總聚の一編、昭和三

年廣文堂發行)森敬三氏校註 ▲新訂金槐和歌集(岩波文庫、貞享本を底本とし、類從本その他で字句の異同を示し、定家所傳本によつて校訂す、昭和七年校訂增補) 齋藤茂吉校訂 ▲源實朝(岩波講座「日本文學」)齋藤茂吉 ▲源實朝公年譜東鑑抄出(「金槐和歌集詳解」所收)飯塚朝子 ▲金槐集研究(日本文學講座)齋藤茂吉 ▲西行と實朝(「日本文學聯講」第一期昭和二年中興館)久松潜一 ▲金槐集に就いて(雜誌「日本文學」一ノ五) 彌富破摩雄 ▲奥儀抄其他と金槐集(「アララギ」昭和七年四月)齋藤茂吉 ▲金槐集の印象(「文章世界」四卷八號) 窪田空穗 ▲金槐集私鈔(大正八年增訂春陽堂發行)齋藤茂吉 ▲金槐集私抄(「アララギ」十九卷九號)德富蘇峯 ▲鎌倉右大臣餘話(「歷史地理」三十三卷四號)紫水生 ▲時代の犧牲者源實朝(「歷史地理」三十三卷四號)黑板勝美 ▲人としての源實朝(「國語と國文學」二卷の二號)上田英夫 ▲實朝に對する增鏡の評論(「國學院雜誌」八卷五號)浪打石丸 ▲歌人としての源實朝(「歷史地理」三十三卷三號)武島羽衣 ▲源實朝の生涯(「歷史地理」三十三卷三號)大森金五郎 ▲歌人源實朝(「わか竹」十二卷三號)武島羽衣 ▲詩人實朝(「史學界」五卷二號四號) 小杉未醒 ▲源實朝(「改造」一〇卷一號)齋藤茂吉 ▲源實朝の宗教信仰及渡宋計劃(「歷史地理」三十三卷三號)鷲尾順敬 ▲源實朝と京都文明(「日本演劇の起源」)吳文炳 ▲源右大將の文書(佐々木小次郎の父に宛たもの)(「天則」八卷一〇號) 日下寛 ▲源實朝雜記(「詩歌」六卷四號)齋藤茂吉 ▲實朝の精神生活の三區分 日本文學大辭典 ▲實朝の歌の展開(「青虹」昭和六年三月)津田秀久 ▲實朝の得功德歌について(「國語と國文學」昭和四年十二月)服部如實 ▲後鳥羽院と源の實朝(「文學」昭和八年四月)齋藤茂吉 ▲實朝一生の歌風(「水甕」昭和八年四月)武田祐吉 ▲新人實朝(「國語と國文學」昭和四年八月)西下經一

蒙求和歌 十四卷 源光行(續群書類從四〇五)李瀚の「蒙求」の中から二百五十箇の故事を抄出して、國語に譯して、標題毎に四季戀雜の和歌を配して二百五十二首ある、飜譯說話とも見るべく、又歌物語の亞流といふことが出來る。元久元年の序がある。鎌倉初期の作。定家の所持本の次第に寫傳したものが東京帝大附屬圖書館に藏し續群書類從本と內容の相違あるらし。▲蒙求和歌(「歌學」二卷一號)黑川眞道 ▲蒙求和歌(「鎌倉時代文學新論」二一四頁)野村八良 ▲蒙求和歌(「日本小說の展開」日本文學岩波講座)鈴木敏也

爲家集 七卷 中院大納言集、中院詠草、中院集ともいふ。元祿七年の板本には七卷八本。續後撰集及新古今集の撰者として二條家の權威を高めたので二條派の流をくむ歌人によつて、愛尊された。歌風平明。(爲家建治元年歿)

▲爲家千首集(爲家卿千首、中院禪門千首とも。爲家廿六才の秋五日間に詠んだもの) ▲爲家卿藤川題百首(爲家々集) ▲爲家一夜百首(所謂百首難題で詠んだ歌集、群書類從三九〇、定家の百首と合して兩卿難題百種とも呼ぶ)

俊成卿女集　一卷　俊成女集とも（群書類從二七二）、正治より寶治に至る五十年の詠歌より抄錄したもの、後人の編纂にかゝはるものか。

▲俊成卿女と越部禪尼（「國語と國文學」昭和六年十月）石田吉貞　▲俊成卿女集考（「鹿兒島日本文學」昭和六年十二月）石田吉貞　▲俊成卿女傳に就いての一考察（「國文學誌」昭和六年八月）谷鼎　▲俊成卿女事蹟考（「大八洲學會雜誌」二五卷二、五、八、號）櫻井秀

爲兼卿集　入道大納言爲兼卿集とも。壹卷　二條派に對抗して京極一派の歌流を開いた爲兼の集として、舊套を排し、萬葉調を倣ひ、自由に清新に、而して巧緻に力めたので他の歌調、作風と異るところが多い。二條派から異端視され、痛擊されたことは夥しい。文安元年甲子三月下旬宸翰本を以つて書寫校合した一本所收歌數七百八十九首、（續群書類從四三二）、慶長三己寅八月下冷泉爲景の奥附ある中院大納言通勝卿手跡本は二百七十六首（續群書類從同前）。◇爲兼卿家集　二卷　北川眞顏。中院本に百八十餘首補ひ、都合四百六十四首を集め、終に詳傳を添へたもの。

▲入道大納言爲兼卿集（二卷、爲兼卿集とも千百餘首）　▲爲兼卿遠所詠歌（一卷三十一首並兒歌）爲兼　▲爲兼卿家歌合（一卷、爲兼、爲相、經親、藤大納言典侍）　▲爲兼卿庚百首（一卷）爲兼　▲延慶兩卿訴陳狀（爲兼）　▲爲兼卿家集補遺（爲兼）　▲爲兼卿和歌抄解說（福井久藏）　▲爲兼卿和歌抄（一卷）爲兼の歌論をうかゞふべき絶好の書である。大正五年珍書同好會刊行）爲兼　▲冷泉爲兼卿補（「史學界」五卷二號）萩野由之　▲歌人京極爲兼（「歌と觀照」昭和六年十月より昭和七年八月まで）上田英夫　▲京極爲兼の左遷と其の歌風の批評と（「國學院雜誌」一〇卷四號）江見淸風　▲京極爲兼論（「國語と國文學」昭和七年十月）上田英夫

兼好法師家集　一卷　卜部兼好の歌二百六十九首を收む。成立由來につき、三光院實澄「崑玉集」、藤岡作太郎「鎌倉室町時代文學史」、松浦貞俊「日本文學大辭典兼好法師家集」の條參照。

▲尊經閣叢刊兼好自撰家集解題　▲吉田兼好自撰歌集の起草年代に就いて（「帚木」昭和七年五月）富倉二郎　▲兼好法師自撰家集について（「はゝき木」昭和八年四五六月）忠平茂登　▲兼好法師とその時代（「史潮」昭和八年三月）志賀剛　▲歌から見た兼好法師（「わか竹」七卷四號五號）芝野六助

權中納言爲相卿集　寫一卷　藤谷集とも、所收歌三百七首、爲家の子、母は阿佛尼。歌學を受け、冷泉の家を起す、鎌倉藤ケ谷（ふぢがやつ）に住したるをもつてその家集を藤谷集ともいふ。

▲爲相卿千首　寫本一卷（續群書類從三七六）　▲爲相卿百首藤谷百首とも一卷（續群書類從三九一）　▲藤谷集私考（冷泉爲相論）（「水甕」昭和六年八月）熊谷武至　▲冷泉爲相の東國生活考斷片（「水甕」昭和七年二月三月四月）熊谷武至　▲冷泉爲相（「水甕」昭和八年一月）熊谷武至　▲冷泉爲相の嘉元百首

とその異本(「水甕」昭和八年四月)熊谷武至

草庵集　草庵和歌集とも四巻　頓阿。新拾遺和歌集の撰者である頓阿は二條家歌風の指標であり、二條派中興の實をあげ草庵集は「和歌中道の龜鑑」(近世の澄月法師)と尊崇する信奉者を出した。刊本（寛文四年刊本、承應二年校本、國歌大系所收)、部立、所收歌數短歌二千二首、長歌二首、物名二十三首、折句十首、旋頭歌三首、回文歌一首、俳諧歌十六首、連歌百句。

▲草庵和歌集類題(六卷、正續兩集を類題別にしたもの、詞書を略す、寛延四年袖珍本を刊行する程尊重さる)蜂公久玄　▲草庵集類題拾遺(一卷)草庵集に洩れたる歌を集め類題別にす　▲草庵集蒙求諺解(十五卷、梅仙堂平景新訂享保九年刊行、頓阿の歌二千餘首を諺解せるもの、引用書三百餘部)梅月堂香川萓阿　▲續草庵集蒙求諺解(五卷)香川萓阿　▲草庵集難註(一卷、正續草庵集蒙求諺解の誤を辨じ自説を加ふ。)櫻井元茂　▲草庵集啓蒙（寫六卷、諺解同故事舊歌を註し所々自説を加へたもの)裏松固禪　▲難草庵集(寫一卷)日野資枝　▲草庵集玉箒(六卷)本居宣長　▲續草庵集玉箒(一卷　本居宣長(宣阿、元茂等の説を批正したるもの天明六年板)　▲草庵集正誤（一卷流布本の本文訂正百五十八首に亘る。文化二年の序あり)。磐雄重文▲草庵和歌集を讀みて頓阿を論す(「國民の友」十卷一五號)薇日生　▲頓阿法師の一生(「國語・國文」昭和七年八・九・十月）齋藤清衞　「附」頓阿の歌學歌論は別に述ぶ。

草根集　十五卷　一條兼良が草根集と命名する以前は松月庵詠草と呼ぶ。東福寺の書記正徹(徹書記、清巖和尚)の歌集を信正廣が編纂したもの(丹鶴叢書所收)。所收歌數二萬餘首、應永永享年代は勿論、個人の歌集として類の少いものである。百首歌五十首歌等限定數歌、年序的排列の四季雜詠である。この歌の特長として詞書の多い點が七十九の長壽を保った正徹の殁前三十年の生活を知るよき參考である。歌風は二條派の歌調にあきたらず純新興派で定家を目標として作歌したもの、卷十五は草根殘葉集といはれ、草根集整理後聞屆されたもの。

▲草根集別卷（十五卷に洩れたる詠草を集めた。前田侯爵家藏)　▲草根集拔書(一卷)一條兼良　▲草根集聞書(圖書叢書　▲草根集類題（二卷、草根集私鈔類題とも）安田躬弦　▲草根集部類(寫一卷、特殊の表現に評を附したもの)高田與清　▲草根集の考察(「國語と國文學」昭和七年十月)齋藤清衞　▲徹書記百首(寶德三年春日法樂百首)　▲歌人正徹(「國文學」七三號)神谷保則　▲正徹(「思想」六七號)岡崎義惠　▲正徹年譜(「國語と國文學」昭和六年六月)藤原隆景　▲徹書記物語清巖茶話、正徹物語、なぐさめ草等歌論の部で述べる。▲正徹の殁年につき(鹽尻參照)天野信景

權大僧都心敬集　一卷　心敬(十住心院權大僧都)寛正四年紀州田井庄宮法樂百首、應仁元年旅中の百首、應仁二年法樂百首、雜詠百二十七首、合計四百二十七首所收(續群書類從四四六)、室町中期連歌七賢の一人として重きをなした心敬の歌として價

究すべきものである。
▲蹴鞠百首（寫一巻）心敬　▲心敬僧都百首一巻（續群書類從三九七、文明二年清嵓和尚十三回忌供養のため）

常縁集　一巻　東常縁　部立を設けて詠歌を集む（群書類從二六〇）。古今傳授の始祖（文明三年常縁宗祇に傳授す）である。東野州聞書は常縁が堯孝法師、僧正徹より聞き得たる歌學説の記述で、歌學歌論の上重要の書。

▲東常縁の作歌態度（「國語國文の研究」昭和三年十月）谷鼎
▲常縁（日本文學「岩波講座」日本文學史概説鎌倉室町時代）齋藤清衞　▲東野州拾唾（拾遺愚草註釋書、文明十四年成）東常縁　▲東野州消息（宗祇に與へたる和歌上の解答、群書類從）東常縁

宗祇集　自然齋宗祇家集とも。一巻　宗祇（群書類從二七〇）東野州より古今傳授の後、更に相傳を望むの長歌がある。連歌道大成者宗祇の詠歌として見るべきもの、宗祇のことは連歌の部に記す。

衆妙集　五巻　細川幽齋の歌文集、編者飛鳥井雅章。歌集としては巻一、二、三で、所收歌數六百餘首、生新でなだらかな歌多く、時に臨んで詠じた歌が多く、題詠歌でない點に又異つた價値が存する（國歌大系近古諸家集所收）。

擧白集　八巻　木下勝俊。五巻まで歌。六巻より文。門弟公軌、公軌の歿後その子景軌が編纂をつゞけ、山本春正之を刊行せる由。京極爲兼の歌風に近く、詠風自由。徳川初期注意すべき歌集。（豊臣氏、左近權少將に任ぜられ、入道して長嘯子又天哉翁と號す、慶安三年歿八十一才）。
▲若狭少將勝俊朝臣集（一巻）木下勝俊　▲長嘯歌選（寫一巻）
▲難擧白集（大王巻）尋求坊　▲擧玉心評（一巻、擧白難々とも）　▲擧白集に就いて（國漢研究）原田芳起
▲長嘯子の人格をたゝへ、難擧白集を駁す、）

晩花集　二巻　下河邊長流。晩花集は延寶九年五十五才の時自撰、所收歌數約四百首（續日本歌學全書）。

漫吟集　二十巻　契沖　自撰漫吟集は契沖四十二才の時自ら撰ぶ所、延寶九年下河邊長流の序あり、流布本は二十巻、所收歌數四千八百餘首。
▲漫吟集（一巻）一名契沖家集

歌學歌論之部

歌學歌論の性質は、所謂表現學の範疇に屬すべきものと思はれるが、我が國の歌學は、單に短歌の藝術性や創作理論ばかりを述べたものではなく、訓詁註釋もあれば、歌人の逸話もあり、文法句法の問題もあるといふわけで、内容頗る多岐に亘つて居る。學とし論としては純粋を缺く嫌はあるが、又一面に當時の歌界、廣く言へば文學界全體の空氣を知るに、好材料に富んで居るのである。從來の多くの研究は、それ等の中から、理論方面のみを抽出して、何々の歌學思想などゝいふ立場で論ぜられて居たが、今後の研究は、そのすべての部門について、傳統と

獨創と展開相を見るべきものであらうと思ふ。

平安朝以来の歌學は、大體から見て、順德院の八雲御抄に於て集大成せられた觀がある。中世歌學の特色は、先づ爲家の八雲口傳や夜の鶴などから出發して、二條家、京極家、冷泉家の歌學に分裂展開したあたりから考察すべきものであらう。しかし、此等の歌學は、其の理想なり論據なりを、主として定家の歌論歌學に仰いで居る以上、定家を除外しては、又中世歌學を語り得ない。從つて、本章に於ても、定家のそれを以て始めることゝした。

中世歌學の特色は、大凡二方面から觀察するが便利である。一つは、理論と實際作歌とを結合する立場であつて、所謂作歌技巧の末節に走り、歌語、てにをは、句法、本歌取の方法、百首歌の詠じ方、歌會の式作法などといふ方面に、徐々微細に進んで行き、形の上から歌に入らうとする方向に向つて居る。制約規矩の繁雜はかくして生れて來た。第二の方面は、和歌を以て文藝以外の理念に結合しようとする方面であつて、尊重崇拜の念が度を超えて、宗教道德などと同一水準の取扱ひに進んで居る。或者は和歌は本朝の陀羅尼であるといひ、或者は天台の空假中の三諦これにこもれりといひ、或者は禪の第一義佛教の第一義に通ずるものありと說く。これ等は宗教的方面に於て和歌の尊嚴を說いたものであるが、道德政治と結合する方面に於ては、和歌は理世撫民の德ありとし、王道と歌道の一致を說き、遂には有名なる古今傳授の形へ方にまで到つたのである。

これ等の事實を如何に解釋すべきかは、これからの問題であるが、我々はそれ等の中に於て、中世歌人のかゝる態度を以て藝に臨んだ結果、將來されて來た藝道精神といふものに眼を着ける必要がある。己が世界に沈潛してゆく專門家としての特殊の心的體驗、それに關係せしめて考へなくては、物の見方が表面を辿つてしまふ。更に、かゝる藝道精神が、新興藝術に如何なる深味をあたへて居るか、即ち、能樂、連歌、茶道等、何れもこの中世的なる道の精神を中核として、偉大なる日本的なものを創造して居るのである。以下、先づ中世歌論一般に關する研究をあげ、次に定家以下各人の歌論についての諸研究を紹介する。

◇**中世歌論一般**（特に理念的方面を顧慮したる研究）

▲幽玄（日本詩學「岩波講座」歌學史の研究（歌論を中心として）久松潛一　▲幽玄美について（「國華」昭和五年七月）峯岸義秋　▲幽玄について（日本文學聯講第二期「中世近古文學概論」）久松潛一　▲幽玄への發展（新古今への不滿より新しき幽玄への出發）（「眞人」昭和八年一、二月）吉原敏雄　▲幽玄と能因（「眞人」昭和八年一月）道元博　▲幽玄說展開事情放談（「帚木」昭和八年一月）吉澤義則　▲幽玄美（鎌倉時代の古典主義）（日本文學「岩波講座」日本文學史概說（三）鎌倉室町時代）齋藤清衛　▲幽玄論の變遷の一動機（「東京朝日新聞」昭和五年一月）久松潛一　▲幽玄といふ理念の構成と表現（「國學

院雜誌」昭和六年十一月)峯岸義秋 ▲新幽玄體私觀(「眞人」昭和八年一月) 中村清一 ▲傳統墨守思想を反映せる諸種の文學作品(「日本文學講座」鎌倉時代文學概說)沼澤龍雄 ▲傳統的精神と新興の風尙(「日本文學講座」鎌倉時代文學概說)沼澤龍雄 ▲傳統的精神(「日本文學聯講二期」中世近古文學概論)久松潛一 ▲闇の中にひらめく白光(「日本文學聯講二期」中世近古文學概論)久松潛一 ▲鎌倉時代の歌論(「日本文學」岩波講座 歌學史の研究—歌論を中心として)久松潛一 ▲中世歌論に現はれたる和歌史論的傾向 (「國文學誌」昭和七年四月)峰岸義秋 ▲型の文學、型の固定と因襲(「日本文學聯講」二期近古文學の概論)久松潛一 ▲中世歌論(「日本文學講座」新古今集研究)松浦貞俊 ▲中世の和歌(日本文學、岩波講座和歌史の研究) 西下經一 ▲鎌倉時代の歌論の位置と其の材料(「日本文學講座」鎌倉時代の歌論)久松潛一 ▲鎌倉時代の歌の古體と近體(「日本文學講座」鎌倉時代の歌論)久松潛一 ▲鎌倉時代の歌の心と詞、十體論と有心(「日本文學講座」鎌倉時代の歌論)久松潛一 ▲鎌倉時代歌論の大觀 (「文學に現はれたる我國民思想の研究」武士文學時代)津田左右吉 ▲鎌倉時代僞作の歌書と其の所說 ▲鎌倉時代の和歌 (「わか竹」十三卷七號九號)鳥野幸次 ▲中世文學論に於ける道と型 (「國語と國文學」昭和六年十月)久松潛一 ▲中世歌論に於ける平淡美、素樸美、道と型、歌論の理念の進展、妖艶化と平淡化、中世歌論の破壞 (「日本文學」岩波講座、歌學史の研究歌論を中心として)久松潛一 ▲幽玄と妖艶化と平淡化(「國語と國文學」昭和五年十一月、十二月)久松潛一 ▲漢學者の見たる歌學說と其の反駁(「大日本歌學史」)福井久藏 ▲芳野朝の歌道(「わか竹」七卷一號)武田祐吉 ▲南北朝の和歌(「心の花」二十八卷十號、十二號) 川田順 ▲上代より室町時代に到る和歌概說(「日本文學」昭和七年一月)福井久藏 ▲法樂和歌の史的展望(「東洋學研究」創刊號昭和七年一月)早川正道 ▲歌論史研究序說(「鹿兒島日本文學」昭和六年十二月)峯岸義秋 ▲和歌史概說「日本文學」昭和七年四月)尾上八郎 ▲和歌史の研究(「日本文學」岩波講座)西下經一

◇藤原定家とその歌論 先づ彼の歌學書をあげ、次にそれぞれの參考文獻をのべ、最後に、全般的な研究をあげる。

每月抄 別名和歌庭訓、定家卿消息 定家(群書類從二九二)詠歌の心得を述べ、代々の勅撰集の歌風の變遷を知るべきこと、定家の十體(幽玄樣、事可然樣、麗樣、有心體長高樣、見樣、面白樣、有一節樣、濃樣、拉鬼體)のこと、秀歌のこと、本歌取りのこと、題詠のこと、歌病のこと等。

▲每月抄私解(「短歌雜誌」第四卷二號)松村英一 ▲中世歌學の定家和歌十體への歸趨(「短歌研究」昭和八年四月)太田水穗 ▲定家の家體十體(「日本文學」岩波講座、歌學史の研究、歌學を中心として)久松潛一 ▲藤原定家の和歌十體論 (「心の花」第三〇卷第八號)久松潛一

詠歌大概（被井宮抄）　一卷　定家　和歌に對する概括的見界を漢文で記してゐる。

▲詠歌大概抄（一卷寫、項を分ちて解釋）宗祇　▲詠歌之大概（一卷寫、「詠歌大概、秀歌三體」の宗祇の説を引き增補）一條冬良　▲詠歌之大概抄（一卷寫）三條西實隆　▲詠歌大概音義（一卷寫）三條西實隆　▲詠歌大概抄（一卷寫）里村紹巴　▲詠歌大概聞書（二卷寫、實枝（三光院内府）の講釋を細川幽齋の記述せるもの）三條西實枝　▲詠歌大概抄（六卷）細川幽齋　▲京極中納言の詠歌大概抄について（「古能美知」第一卷第六號）篁村冬鶯　▲詠歌大概の情以新爲先といふ事について（「國學院雜誌」第十五卷十一號）武島羽衣

近代秀歌　定家和歌式、承元和歌式とも。定家。實朝に奉りしもの、古來の和歌の姿體を論じ、詠歌法を略述し、先人の秀歌をあげて評論す。

▲定家卿自筆本近代秀歌について（「心の花」三十卷六號）佐々木信綱

雨中吟　一卷、未來記一卷　兩者ともに歌學書ではなくて、歌集であるが、從來、未來記は秀歌の見本、雨中吟は惡歌の見本として作られたもので、定家假託の僞書とされて居た。最近に風卷氏によりこれはやはり定家の作なることが論ぜられ、歌學とは關係なき集であることが説かれるに到つたのである。

▲未來記雨中吟抄（一卷寫）宗祇　▲未來記雨中吟抄（一卷寫）後陽成天皇　▲未來記雨中吟註（一卷寫）中院通村　▲未來記雨中吟聞書（一卷）松井幸隆　▲雨中吟僞作異見（「國語と國文學」昭和六年一月）風卷景次郎

この他に、定家に假託して作られたる後人僞作の歌書の一群がある。卽ち、

愚秘抄（鵜の本末とも）二卷　鎌倉後期の作であらう。上卷歌體、詠歌の用意、歌人の作風批評等下卷、歌道精神のこと、歌を案ずる態度、古今集の三ケの大事、勅撰集の故實、和歌會式、百首詠方、合點等（「群書類從」三〇一）

▲愚秘抄黄萃（「しがらみ草紙」卷五七號）三浦千作

三五記　二卷、鷺の本末とも。上卷、歌體のこと、題のこと、歌のよみやう、歌病、係結、文字あまり。下卷六義、長歌旋頭歌等のこと、等を記す。鎌倉後期の作か。

愚見抄　一卷　内容は、前二書と大同小異のものである。續類從所收。鎌倉後期の作か。

桐火桶　一卷　定家が俊成の庭訓を記しつけた體裁に成つて居り、初に萬葉集についての意見、模範とすべき萬葉の歌などをあげ、次に俊成の詠歌の樣子なので、第三に古來よりの名歌人の歌をあげて短評を加へ、最後に古今の傳授のことにふれてある。鎌倉後期の作か。

▲桐火桶抄（一卷）頓阿　▲桐火桶號志氣（一卷寫本）室町時代末期の作か　▲桐火桶要略（一卷寫）

以上の四書は、定家假託の僞作であることには疑なきものであるが、その中には、定家の所説も多く混じて居るらしい事は久

松氏の指摘せられた通りであらう。大體より見て、冷泉家系のものであると見るべきである。前記の「雨中吟僞作異見、風卷氏」の中に、これに關する研究がある。

◇定家歌論一般に關する研究

▲定家の生涯（「槻の木」昭和六年十一月より昭和七年二月號）横尾豐 ▲定家（「日本文學史概說」（三）鎌倉室町時代日本文學）齋藤清衛 ▲定家の有心體（「國文學史新講」上卷鎌倉時代）次田潤 ▲藤原定家の歌風（「國語國文の研究」三號、四號）谷鼎 ▲藤原定家歌學（「短歌雜誌」四卷一號）松村英一 ▲藤原定家の歌學思想（「國語國文の研究」十八號）谷鼎

◇本歌取の意識的作用的使用に至る變遷

▲藤原定家の仁和寺宮五十首について（「帚木」昭和八年一月）谷鼎 ▲定家和歌庭訓評釋（「わか竹」十卷三、六、八、九、一〇、一一、十一卷二、三、五、八、九號）小倉博 ▲定家傳より見たる一つの問題（「國語と國文學」昭和六年十月）風卷景次郎 ▲定家の歌小觀（「文藝春秋」四卷一號）齋藤茂吉 ▲定家卿の歌につきて（「歌文」四號）中村泰二 ▲定家の古典研究（「國文學史新講」上鎌倉時代）次田潤 ▲定家の戀歌（「歌と觀照」昭和六年十一月）川田順 ▲定家と式子内親王（「心の花」昭和六年十二月）川田順 ▲定家（「鎌倉時代文學概論」日本文學講座）沼澤龍雄 ▲藤原定家とその倭歌（「國漢研究」昭和八年六月）小森哲雄 ▲藤原定家（「國語國文の研究」一）小島吉雄 ▲藤原定家の健康（「文學」昭和六年九月）石田吉貞 ▲古典愛護者としての藤原定家（「國語と國文學」一卷八號）玉井幸助 ▲惡筆藤原定家（「國語教育」九卷十一號）玉井幸助

無名抄 二卷。無名祕抄とも。群書類從所收。和歌に關する四十八項の隨筆をあつめたものであるが、其の中幽玄體に關する說は特に有名である。鎌倉時代初期の和歌の世界を知る絶好の書である。

▲長名の無名抄撰述年代（「國語國文の研究」十三號、十四號、十五號）岡田希雄（雀羅堂雜記）

瑩玉集 一卷 古語深祕抄所收。現存は零本かと思はれる。歌の十體、詞、意、故實、病難等について記したもの。僞書說もあるやうだが未詳。

詠歌一體 一卷 爲家詠歌に關する諸般の注意を述ぶ、（群書類從二九二）、流麗を愛し、淸楚を望んだ彼が「詞なだらかにいひくだし、淸げなるは姿のよきなり云々」としてあるので平淡美を歌道の一大眼目と見たことが分る。

八雲口傳 一卷 古語深祕抄所收。爲家の歌論としては、良く整へられたもので、前の詠歌一體と比較すれば互に發明する所が多い。有名な制の詞も見えてゐる。

續後撰集序文 撰者爲家の歌論を窺ふことが出來る。

夜の鶴 一卷 阿佛尼口傳 爲家の後妻である阿佛尼が、「歌よむやう教へよと度々仰せられて」爲家の說を祖述したるもの、（群書類從二九二）

▲阿佛の夜の鶴（「水甕」昭和六年十二月）熊谷武至

和歌口傳　源承法眼（爲家の六男）爲家の歌を辯護するために父の說をといたもの）

竹園抄　一卷　藤原爲顯著。父爲家の教示を記述したもの、初心者のために歌道に關する十一項目ち歌病、對詞、親疎句、六義、本歌取、返歌取り、題存知のこと、懷紙の認め樣、披講の作法、物名類存知のこと、風體のこと等を明らかにしたもの（續群書類從四六四）

▲藤原爲家論（「國語と國文學」昭和八年三月）谷亮平　▲御子左家の歌學　その三爲家（「大日本和歌史」一〇二）福井久藏　▲爲家の平淡美歌論（「國の光」昭和五年一月）久松潛一

簸川上　一卷　藤原光俊の歌論書、歌病のこと、本歌取、萬葉集の詞、名所、題詠等。藤原公任の新撰髓腦と藤原俊賴の俊賴口傳を骨子とした論である。爲家の反對派の人の所論である點に注目すべきである。

◇二條家系流の歌學書

和歌用意條々　爲氏作と推定すべきもの、古書濯秘抄所收。歌題の扱方、本歌取の事、上下句の事等について述べたもの。

延慶兩卿訴陳狀　一卷（群書類從二九三）撰集撰者の事より京極爲兼と二條爲世との間に爭起り、爲世の撰事におび、爲兼延慶年中に駁擊の訴願をしたのを更に爲世が攻擊せるもので、兩家兩人の歌道に對する主張を見ることが出來る。

歌苑連署事書　一卷（珍書同好會出版、福井久藏解說）玉葉集（京極爲兼撰）に對して慈持法師、素性法師、惠慶法師等僧侶の歌八十一首の選署の實義を以つて、卷頭の歌の事、詠歌の詞及事、旨、歌の數等分ちて論難したもの。爲世派が正和四年に作つたもの。

和歌庭訓抄　一卷　傳二條爲世作。心は新らしきを求むべく、詞は古きを慕ふべきこと、古歌を學び、題をよく心得よと教へ、爲家の說を作守して違せず、「見習しき事などは捨てて詠み侍らぬを（二條家代々傳世の秘訣）、珍らしき事の外りたるとて、求め出だし詠まれ侍るは口惜なきが致す所にこそ侍らめ（京極爲兼の作歌態度を指す）」と論じ、爲世等二條家の人が京極家攻擊の爲に作つたものであらう。

野守鏡　二卷　作者未詳、千種有房說あれど信じ難し（群書類從四八四）六ケ條をあげて京極爲兼の歌風を攻擊せる書、一、心を種とせざること、二、心をすなほにして心をすなほにせざること、三、詞をはなれざること、四、風情を求めざること、五、姿をならひて姿をならはざること、六、古風をうつして古風をうつさざること。

井蛙抄　六卷　頓阿（新拾遺集撰者）（續群書類從四六二）第一卷風體の事（引用歌書は近代秀歌、九品、古來風體抄、詠歌大概、八雲御抄、水天抄、每月抄、六百番歌合等）第二卷本歌取りの事、第三卷禁制の詞のこと、第四卷同名の名所、第五卷同類の歌の事、第六卷雜談、八雲御抄に次ぐ大なる歌學書。

水蛙眼目　一卷　頓阿（群書類從二九五）井蛙抄卷六の分離し

て一卷をなすものと見るべき內容。

愚問賢註 賢答抄とも五卷（續群書類從）詠歌に關して良基質問、頓阿返答、貞治二年に成る。

▲愚問賢註抄（一卷）堯惠 ▲愚問賢註抄（一卷）青蓮院尊鎭親王 ▲愚問賢註六窓抄（五卷正德二年刊）松井幸隆 ▲愚問賢註抄（一卷）加藤磐齋

近來風體抄 一卷二條良基（續群書類從四五九）嘉慶元年の跋あり、當時の歌人の歌風評論。本歌取。詠歌の心得、歌病、主ある歌、禁制の詞等例證

▲頓阿及び二條良基（「日本歌學史」一三九頁）佐々木信綱

▲頓阿と二條良基（「大日本歌學史」一三六頁）福井久藏 ▲頓阿法師の一生（「國語と國文」昭和七年八月九月十一月）齋藤清衞 ▲頓阿（「日本文學」岩波講座和歌史の研究）西下經一

▲二條良基につきて（「日本文學」岩波講座日本文學史概說鎌倉室町時代）齋藤清衞

十口抄 東常緣 古今集に關する歌書

東家三部祕錄 東常緣三代集に關する歌書

東野州消息 一卷、常緣 門弟宗祇の疑問に對し解答したる書簡、（群書類從二六〇）

東野州聞書 堯孝歌とも一卷 常緣（群書類從二九八）文安六年より康正元年堯孝法師の歿する迄、師に隨從した間の聞書を詳述し、名歌歌詞の註、逸話等。

東野州拾唾 拾遺愚抄聞書とも。常緣。

▲東常緣の作歌態度（「國語國文の研究」二十五號）谷鼎

耳底記 三卷 幽齋の口述を光廣が筆記せるもの、和歌に關する故實、釋義、歌書、連歌のこと等、幽齋の歌論を系統的に見るために主たる參考書。

幽齋歌道聞書 一卷 烏丸光廣、題のこと、本歌取るべき樣のこと、風體のこと、晴の歌のこと、歌合の歌のこと數十條を掲ぐ。

細川幽齋聞書 和歌受用集とも。二卷 佐方宗佐編。和歌作法に關する口傳書で、幽齋より聞書せるより名とす、題歌、本歌取の事、風體、歌合、字體、十體、六義、其他作歌上用意の條項を說示す。

◇校訂正誤細川幽齋聞書講習辨 四卷 元文二年成り、幽齋聞書の註書、桃原堯民

▲細川幽齋と古今傳授（「帝國文學」一卷一號）三上參次 ▲細川幽齋（單行本）池邊義象

詠歌大槪抄 六卷二册、細川幽齋、三光院實枝の講義の聞書である。この二册に纒められたのは天正十四年八月であつたらう。

戴恩記 歌林雜話集とも 四卷 松永貞德 幽齋の門弟、花實相對を說き、新古今を抑へ、古今を揚げ、定家を尊び、歌を敎誡の道とし、歌學、當時國文學界の消息、貞德の歌學の系統學問の系統を知り得る。

▲鎌倉室町時代の戴恩記（「日本文學」岩波講座五三頁）齋藤清

衞　▲日本歌學史（一八六頁）（二三三頁）佐々木信綱

貞德翁筆記　一卷　松永貞德　慶長十年頃成。

◎京極家系統の歌論書

爲兼卿和歌抄　一卷　爲兼作　珍書同好會刊行。和歌の本質論、眞の詠歌法、和歌の標準論、古今の和歌沿革等について、明快に論斷したものであつて、定家の初期の歌論及び萬葉三代集時代に範を求めんとしたものである。二條家の保守的なるに反して、進步的、改革的、本質的なる意見をのべてゐる。

延慶兩卿訴陳狀　群書類從所收。

▲爲兼卿和歌抄解說（和歌抄附載）福井久藏　▲京極爲兼論（「國語と國文學」昭和七年十月）上田英夫

◎冷泉家系統の歌論書

愚祕抄。三五記。桐火桶。愚見抄、以上定家の條に解說した。

和歌所へ不審條々　二言抄とも　一卷　今川了俊　應永十年成、歌詞、歌體につきて意見を述べたもの（群書類從二九六）

了俊辨要抄　一卷　今川了俊（群書類從二九六）應永十六年、その子の爲に詠歌の體驗を述べ、和歌全般の問題に關して奧儀を錄したもの。

言塵集　七卷　今川了俊、應永十三年五月八十三歲の了俊が古來諸歌集にある詞の註解證歌をあげ、懷紙のこと、讀方のこと、連歌の事がある。

落書露顯　一卷　今川了俊（群書類從二九六）冷泉爲尹のために歌道並に連歌の事を說けるもの、この爲尹派の說を地下人の攻擊したものが落書記である。

師說自見集　二卷　傳今川了俊　言塵抄の拔萃若くは粉本とも思はれる、奧附書寫最古の年號は寬正五年で了俊の歿後に當る。（續群書類從四六八）第二卷の末に「自冷泉家年來相傳申所書集候から、又自見の分候是取合、號師說自見集、更他のためにあらず了俊筆也」とある。

▲今川了俊と歌道（「心の花」二十七卷四號）渡邊世祐　▲了俊の歌論に關する覺書（「國語國文の研究」二十五號）小島吉雄

徹書記物語　一卷　正徹（群書類從二九七）歌題、歌書、歌會等に關する隨筆、招月清巖和歌抄（寫一卷）は同一內容の書。

清巖茶話　二卷　黃川新右衞門聞書（續群書類從四六二）清巖和尙即ち正徹の歌話を記述せるもの。（延寶年間刊）

正徹物語　二卷　徹書記物語と清巖茶話とを合せ天明中有賀長收序を加へて再刻

なぐさめ草　一卷　歌學方面を重んじた藝術的の立場が見られる。（群書類從三三四）

▲正徹（「日本文學大辭典」）齋藤清衞　▲正徹（「思想の日本文化研究」六九號）岡崎義惠　▲正徹（日本文學、岩波講座「和歌史の研究」）西下經一　▲正徹年譜　（「國語と國文學」昭和六年六月）藤原隆景　▲國文の妖艶化と平淡化（「國語と國文學」昭和五年十月、十一月）久松潛一　▲草根集の研究書（歌集草根集の條參照）

さゝめ言　二卷　心敬僧都　群書類從所收。主として連歌に

關した著であるが、中に和歌に關する學說の見るべきものが多く含まれて居る。佛法と和歌と結合して說いた處に、特色がある。

老のくり言　一卷　心敬僧都　群書類從所收。歌道に關する說が大部分を占めて居る。さゝめ言と併せ見るべきもの。

心敬僧都庭訓　一卷　兼載聞書　續群書類從所收。兼載が心敬の教を記しとゞめたものである。連歌書であるが、中に和歌に關する意見が散見してゐる。

ひとり言　一卷　心敬僧都　東方流浪記であるが、中に和歌論が見られる。

▲心敬僧都の藝術境(大谷學報)能勢朝次

兼載雜談　一卷　猪苗代兼載　和歌連歌に關する雜談をあつめたもの。

◇二條、京極、冷泉三流以外の特殊的立場の歌學書。

耕雲口傳　一卷　藤原長親(耕雲山人と號す)反二條派の歌論、佛理を加へて歌を論じ、師範家の口傳、故事を誹り、初學者の爲歌學六條(詠歌は心を本とす、二詞を聽くべきこと、本歌取りの法、當座の歌詠む心得、兼日題詠、古歌の體)を說く。應永十五年成(續群書類從四六五)、耕雲は源氏物語に一見識をもち、博識である。內省的、沈潛的で南朝方二條家の歌詞の平淡味にあきたらず複雜な境地を好んだ。佛教教理と藝道との接近は、歌道のみではない田樂道、猿樂道に於ても認むべき傾向であつた。

歌林良材集　二卷　歌林金葉集とも。一條兼良　永享年中成立、(續群書類從四六九)上は詠歌諸體、本歌本說を取る體、虛字言葉、實字言葉等百二十七條を示し、下卷は由緒ある歌五十八條を載す。

▲一條兼良の和學再興(日本文學「國學史概說」)竹岡勝也

第二章　連　歌

連歌は幽玄なる構成美を愛尙する文學として中世時代に勃興したものである。連歌の起源を日本武尊と火燒翁との片唱和に發すると見る說と萬葉八の尼と大伴家持との唱和に始まると見る說とがあるが、前者は獨立した意味をもつ片歌が相並んで旋頭歌の體裁を取つたものであるに對し、後者は二人の作が合してここに完全な意味を形成するところに連歌としての體裁を備へたものといはれてゐる。この種の短連歌が長連歌となつて發達・大成する時機の動いて來

たのは院政時代からであり、その盛な催しとして記録にのこされて居るのが、後鳥羽院の御代からである。この頃盛な連歌の會が催され、時俗も和歌の隆盛期で歌學歌論が行はれて居たこととて、自然新興文學連歌もその影響をうけて、歌學・歌論は多く連歌論にも採用せられた。從つて、懐古的手法や、和歌の修辭などは、連歌にも大いに影響し、幽玄を以てその理想とするに到つたものである。しかし鎌倉時代に於ては、連歌はただ、歌人の餘技とし賞翫の餘興として弄ばれる狀態であつたが、これが庶民階級に傳播して、地下の連歌の隆昌となるに及び、鎌倉末期には、連歌を以て本業とする連歌師もあらはれ、室町初頭に、二條良基出づるに及んで、連歌は和歌に對抗するだけの隆盛に赴いた。

二條良基が救濟等と計つて、連歌最初の準則たる應安新式を定めて式目の統一をはかつた事は連歌發達史上一の時期を劃した偉功である。救濟に次で梵灯庵、更につゞいて宗砌心敬等の名手の輩出を見、遂に室町中期の宗祇の出現に到つて、連歌は隆盛の極に達した觀がある。和歌歌論の方面に於ける作家の理想や手法や修辭論なども、この時代には、連歌の中に巧妙に攝取せられ消化せられて、幽玄美なる連歌の完成を見るに到つた。その後、連歌の流儀は、兼載に肖柏に宗碩に、宗長に連れ、紹巴に及んだが、漸く連歌の法式の煩雜さに創作力が負け、剩へその作が平板に傾くため連歌は人々の關心を失ひ、遂に無心連歌の系統ともいふべき滑稽味を主とし、規則に拘泥しない俳諧連歌が隆になるに至つた。かの山崎宗鑑の犬筑波集が出るに至つた頃は、滑稽の連歌師で俳諧の連歌が大衆にひろまり、德川時代に榮えた俳諧の發達を見るに至つた。

要之、連歌は先づ中世に榮えて中世に衰えたと言つても過言ではないのである。

斯様にこの時代に盛衰しながら、連歌は我が國文學の一形態として重大なる存在であり、近世文學を指導した點は

蓋し甚大なものがあるのである。

〔一〕連歌概論及式目

▲連歌研究序説(「思想」十二卷十七號)山田孝雄 ▲連歌の研究(「國語教育」九卷九號) 德本正俊 ▲阿佛尼時代の古連歌(「黄燈」昭和六年六ノ一二) 勝峰晋風 ▲現存最古の長連歌(「國語國文」昭和七年三月)潁原退藏 ▲室町時代連歌について(「室町文學概説」日本文學講座)笹川種郎 ▲花下の連歌のはじめ(「連歌及連歌史」日本文學)山田孝雄 ▲連歌の勃興と柿本栗本二座(「連歌及連歌史」日本文學)福井久藏 ▲連歌の種類(「連歌及び史的研究」)福井久藏 ▲連歌の形態(「近古文學と時代精神」日本文學)高木市之助 ▲連歌史論稿(「國語と國文學」)荻原蘿月 ▲連歌の本質と特質(「國語と國文學」)志田義秀 ▲唱和の連歌の展開(「國語と國文學」)同 ▲くさり連歌(「國語と國文學」)志田義秀 ▲鎖連歌(「日本文學大辭典」) ▲いろは連歌・無心連歌と有心連歌(「連歌及連歌史」日本文學岩波講座)山田孝雄 ▲鎌倉連歌の長連歌(「連歌及連歌史」日本文學岩波講座)山田孝雄 ▲初期時代の連歌及び長連歌の發生(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲連歌形式の創立(「鎌倉室町時代日本文學史概説」日本文學岩波講座)齋藤清衞 ▲式目(「日本文學大辭典」) ▲式目の種類と懷紙(「連歌の史的研究」成美堂)福井久藏 ▲連歌の式目に就いて(「國語國文の研究」昭和四年三月)福井久藏 ▲連歌式目 (「宗祇を中心とした室町文學」日本文學講座第二)小島吉雄 ▲欽定の連歌法(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲二條良基公の著作(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲二條良基を中心とした連歌道の建立(「國語と國文學」)福井久藏 ▲連歌道の建立(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲連歌新式(「日本文學書目解説室町時代」)後藤丹治 ▲新式(「日本文學大辭典」) ▲連歌の式目に就いて(「國語國文の研究」第二十號)福井久藏 ▲連歌の法式(「宗祇を中心とした室町文學」日本文學講座第二)小島吉雄 ▲應安新式(「連歌の史的研究」) 福井久藏 ▲應安新式と建治新式との關聯(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲應安新式追加(「日本文學書目解説室町時代」)後藤丹治 ▲改訂應安新式(「鎌倉室町時代日本文學史概説」日本文學岩波講座) 齋藤清衞 ▲新式今案(「日本文學大辭典」) ▲新式今案(「日本文學書目解説室町時代」)後藤丹治 ▲式目提歌(「日本文學大辭典」) ▲百韻等の定形の連歌の發生(「日本文學」岩波講座)山田孝雄 ▲連歌會席二十五禁(「日本文學大辭典」)假尾宗祇 ▲北野會所式目宗砌(「鎌倉室町時代日本文學史概説」日本文學岩波講座)齋藤清衞 ▲式目と作物(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲連歌本式(「日本文學大辭典」)猪苗代兼載 ▲連歌と短歌の獨立性(「あらゝぎ」)竹尾忠吉

〔二〕連歌集及び連歌論

菟玖波集　文和五年三月成る。二條良基が救濟法師と共に撰集したものであるが、救濟法師が主として事に當る。部立を四季、神祇、釋教、戀、雜、羇旅、賀、雜體、發句に分ち上代よりの附句發句二千百七十九句を收めてゐる。

筑波問答　二條良基　應安二年述作　群書類從所收。

撃蒙句法　二條良基　「連歌の作法書」

知連抄　二條良基　應安七年成る。**連理祕抄**　二條良基　**三義五體**　二條良基　梵灯庵返答書袖下集とも(群書類從所收)

さゞめごと　二卷　北畠十住心權僧師心敬（群書類從連歌部所收)寛正二年成る。

▲心敬のさゞめごとの異本に就いて(「文學」昭和六年六月)佐佐木信綱　▲さゝめごとの成立年代の疑（「東京帝國大學新聞」昭和五年一月十三日)久松潛一

老のくりごと　心敬　群書類從連歌集にある。**庭訓抄**（心敬僧都庭訓とも)連歌詠上の注意書。**ひとり言**　一卷心敬僧都ひとりごととも。

新撰菟玖波集　二〇卷　宗祇撰　大内政弘の發議により、一條冬良の助力を得て、菟玖波集より百四十年後に撰したる連歌集で二千餘句、二百五十一人の作者より成る。三條西實隆の斡旋により撰勅に準ぜらる。

▲新撰菟玖波集成立考(「國語と國文學」昭和七年七月)宇野富介　▲新撰菟玖波集作者部類

竹林抄　十卷　宗祇撰　文明八年頃成る。竹林七賢に象つて七人の先輩の作句を集纂せるもの。**白髮集**　宗祇撰。

吾妻問答　宗祇撰　文明二年三月二十三日頃成る。自跋によれば武藏國隅田川近きあたりに宿りて人の問に答へたもの。宗砌高山の説に負ふところがある。

宗祇初學抄　宗祇

宗祇袖下　宗祇

下草　宗祇　續群書類從連歌部所收。一卷より九卷まで附合(春夏秋冬戀雜等)下卷發句。

壁草　續群書類從連歌部所收。宗祇の附句及發句の集。

萱草　宗祇　**老葉**　宗祇

老のすさみ　宗祇　文明十一年三月頃成る(群書類從連歌部所收)附句に對する意見を伺ふに足る。

連歌諸體祕傳抄　宗祇　**分葉**　宗祇

兼載雜談　一卷　猪苗代兼載(群書類從卷二九九和歌部所收)和歌連歌、故實逸話等二百六十四條に分ち、心敬、宗砌等のことを始め新菟玖波集の評、自讃、連歌の法度、連歌の稽古等記す。

若草山　一卷　猪苗代兼載。

薄花櫻　一卷　猪苗代兼載（續群書類從和歌部所收)明應元年仲秋、慈雲院の御所望によつて作る由奧書に見える。

園塵　三卷　續群書類從連歌部所收)文龜二年十二月頃既成。七月宗祇の死を悼み思ひ立つて撰したものと思はれる。毎卷四季戀雜の六部に部立して、外に發句をのせる。

連歌初學抄　一卷　一條兼良　享徳元年成る。

一條兼良と新式追加　福井久藏　連歌の略記である。

聯珠合璧集　一卷　南華老人(兼良)。群書類從四九八連歌部

◇匠材集　紹巴作　◇連歌教訓　紹巴作　◇連歌至寶抄　紹巴作　◇連歌新式抄　紹巴作

〔三〕後人研究

▲連俳の阿佛尼(「筑波」昭和五年九月)小川壽一　▲阿佛尼時代の古連歌　勝峰晉風　▲足利時代の連歌(「韻文學」)藤の舍　▲室町時代連歌の新材料(「文學に現はれたる我國民思想の研究」)津田左右吉　▲連歌時代の發句集(「石楠」)臼田亞浪　▲二條良基を中心とした連歌道の建立(「國語と國文學」昭和三年九月)福井久藏　▲二條良基薨後の連歌界、二條良基の著作(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲救濟時代の連歌(「連歌及連歌史」日本文學)山田孝雄　▲雲上の連歌(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲救濟(「日本文學大辭典」)　▲周阿(「日本文學大辭典」)　▲梵燈庵主と宗砌及び新式今案(「連歌及び連歌史」日本文學岩波講座)　山田孝雄　▲梵燈庵主以後七賢(「連歌及連歌史」)山田孝雄　▲宗砌(「日本文學大辭典」)　▲宗砌の著書(「日本文學大辭典」)　▲高山宗砌(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲宗砌心敬及び宗祇(「文學に現はれたる我が國民思想の研究」)津田左右吉　▲心敬の作風・史的地位(「日本文學界」)　▲心敬僧都の藝術境(「大谷學報」十卷四號)能勢朝次　▲正徹と心敬とのこと(「水甕」昭和八年六月)風巻景次郎　▲心敬連歌自註「心敬」　▲心敬雜談百首「心敬」　▲心敬(「連歌及連歌史」日本文學)山田孝雄　▲權大僧都心敬集「心敬」　▲心敬法印庭訓「筆載」　▲心敬時代の連歌(「連歌及び連歌史」日本文學岩波講座)山田孝雄　▲心敬僧都(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲宗祇の晩年(「文學研究」昭和八年三月)小島吉雄　▲宗祇法師(連歌師)宗祇法師(「藝文」五卷二、三、五)樋口功　▲宗祇とその生涯(「國語國文の研究」八、一四、一七)小島吉雄　▲宗砌、宗牧、守武、利清、伊勢小町等の逸話(「懸葵」昭和七年二月)藤井紫影　▲飯尾宗祇(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲宗祇を中心とした連歌史(「潮音」第九卷八號以下)樋口功　▲宗牧、宗養(「連歌及連歌史」)山田孝雄　▲宗祇宗養連歌祕抽抄「宗養」　▲宗祇と新撰菟玖波集(「連歌及連歌史」日本文學岩波講座)山田孝雄　▲宗祇終焉記(「日本文學講座第二」)柴屋軒宗長　▲宗祇法師の生涯宗祇を中心とした室町文學(「日本文學講座第十二」)小島吉雄　▲宗祇(「鎌倉室町時代日本文學史概説」日本文學岩波)齋藤清衛　▲宗祇の門弟(「鎌倉室町時代日本文學史概説」日本文學岩波)齋藤清衛　▲宗祇の老葉について(「松井博士古稀記念論文集」目黒書店)潁原退藏　▲宗祇の萱草、老葉、下草(「松井博士古稀記念論文集」目黒書店)潁原退藏　▲宗祇法師の傳記(「日本文學書目解説室町時代」)後藤丹治　▲宗祇の研究　(「新潮社日本文學講座國語國文の研究」)小島吉雄　▲宗祇の姓氏生地(「連歌及び連歌史」)山田孝雄　▲清巖和尚の千句(「連歌の史的研究」)福井久藏　▲宗祇

の連歌(「宗祇を中心とした室町文學」日本文學講座第二)小島吉雄 ▲自然齋發句(宗祇)(「連歌及連歌史」日本文學)山田孝雄 ▲宗祇を中心とした室町文學(「日本文學講座第十七」)小島吉雄 ▲兼載(「鎌倉室町時代日本文學史解說」日本文學岩波)齋藤淸衞 ▲載公獨吟千句「猪苗代兼載」 ▲猪苗代兼載(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲宗長の殘日殘地(「東炎」昭和八年五月)志田素琴 ▲宗長日記、宗長、柴屋軒(「黄橙」昭和八年五月)勝峰晋風 ▲宗長、同著書「日本文學大辭典」 ▲宗長居士傳「黑川道祐」 ▲宗長(「鎌倉室町時代日本文學史解說」日本文學岩波講座)齋藤淸衞 ▲牡丹花肖柏(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲肖柏口傳谷宗牧 ▲蜷川智蘊及宗伊、能阿、行助專順(「連歌の史的研究」)福井久藏 ▲宗養の著作(「日本文學大辭典」) ▲山崎宗鑑(「日本文學大辭典」)松尾明德 ▲宗鑑傳と宗因傳とに關する疑(「國語教育」昭和七年九月)各務虎雄 ▲宗鑑の俳諧書(「日本文學大辭典」) ▲山崎宗鑑(「鎌倉室町時代日本文學解說」日本文學岩波講座)齋藤淸衞 ▲紹巴の著作(「連歌及連歌史」日本文學)山田孝雄

第三章　日記・隨筆・紀行

日記・紀行・隨筆の三種類を一括的に取扱ふ事は、嚴密なる意味から言へば粗雜な方策といはれるであらうが、これ等は一面に相通ずる所があるのである。日記と紀行とについていへば、共に日々の自己の經驗を記すといふ點に於て一致して居り、紀行が日記と分たれる性質は、それが旅行中の日記であるといふ素材の點の相違にある。又日記と隨筆をとつて見るに、日記は、自己と周圍とのその日その日の交渉を中心として、作者の内面生活外面生活を語るものであるに對して、隨筆は、主として日々作者の心頭を往來する事件なり思考なりを錄して、こゝに自己の内面生活の消息を語るものである。廣い立場から見れば、日記の中に總括しても良いものであるが、たゞその觀點の相違と素材の相違と從つて又作者の抱く興味の焦點の相違が、これ等の分化的發展をなさしめたものである。土佐日記・十六夜日記が、日記の名を持ちながら、内容は紀行に類するものであることなど、這般の消息を明に傳へるものと思ふ。

日記の種類は前代からの系統をつたへて、漢文を以て記した公卿や僧侶の日記の一系列と、國文を以て記したものとの兩方面がある。前者は政務その他故實等、主として公的生活に於ける備忘錄であつて、それはやがて子孫に傳へられて、子孫の公的生活の教科書の如き役目を果すべく書かれたものである。從つて歴史研究の好資料を供給するものであるが、日記作者の情意生活の僞らざる告白はまづ絕無に近い。但し、兼實の玉葉や定家の明月記には、やゝその分子が多く見られて、彼等の生活に於ける情意的體驗をうかゞひ得る所がある。これに比して、和文の日記は、主眼とする點は事實の記載の裏に動く筆者の情意生活の消息である。國文學の立場として見れば、後者の優越性は論ずるまでもない。所謂自照文字とまでは言ひ難いが、作者の心的體驗の反省が隨所にうかゞひ得られるのである。而して、漢文體日記が、日々の筆錄であるに比して、和文體のものは、或る特殊の事件の經過の後、それを追憶して記すといふ懷舊的な情趣をたゝえてゐる所にも一の特色がある。

紀行は日記に比して、日々に續つてゆく旅次の風光や、名所舊蹟に對する懷古の念や、それ等によつて、旅行く者の心の中に誘起せられる感慨などが、その表面に浮き上つて居る。そしてすべてはその主觀の色あひによつて染められて、作者の個性をはつきりと認識させる。殊に日記中には和歌や發句などが點綴せられるのが常體であつて、そこに作者の情意の高潮した姿を見せる。すべてが新鮮味に生きて居る。沈思的な陰影よりも、高揚せられた精神のかゞやきが多く目につく。旅に死んだ多くの行脚人が、風雲の情に誘はれて、魂の故郷を求めた氣持もうかゞはれるやうに思ふ。紀行文といふものは、たしかに日本人の心持の純たる表現の場所であるやうに思はれる。かゝる文の解釋はよほどの深い用意が必要である。身を以て、實踐を以て、この解釋に當る。さうした實例を、西行宗祇の跡を慕つた芭蕉に於て我々は見るのである。この一事實を念頭に置き、正眼に見据えてかゝれば、紀行文の理解に關して、多く

の示唆を得るであらう。

隨筆の性質は、時代によつて大分と色合が變る。後代になればなるほど、その内容は知識的學問的備忘錄の傾向を持つ。江戸時代後期の隨筆はその良き見本である。しかし中世の二大隨筆と見るべき方丈記や徒然草は、作者が自己に言つて聞かせるさゝめ言の色彩が濃い。心にうつりゆくよしなし言を、そこはかとなく書きつゞける所に、どこまでも自己をいとほしむ心と深まり行く心の姿が見られるやうに思はれる。その底を探る時、我々は個性以上の深い人間自體の姿を往々にして示されるのである。この作者の心にふれ直實の人間性にふれるといふ點では、小說よりも劇よりも隨筆がすぐれたスタイルを持つ。この立場で隨筆は理會すべきものであると私は考へてゐる。以下項目に從つて、先人の研究を紹介しよう。

◇中世の日記紀行隨筆一般に對する研究。

▲鎌倉時代の日記文學(「日本文學講座」)佐々木信綱 ▲鎌倉時代隨筆日記紀行(「國文學史新講上」)次田潤 ▲宮廷女流日記文學 池田龜鑑 ▲紀行、隨筆、鎌倉時代文學概論(「日本文學講座」)沼澤龍雄 ▲紀行文學(「日本文學大辭典」)千葉龜雄 ▲日記紀行文學概說(「日本文學」昭和七年一月)宮田和一郎 ▲隨筆文學概說(「日本文學」昭和七年一月)島田退藏 ▲道行文の源流(「文學」昭和八年五月)西岡虎之助 ▲擬古文學、新興文學(「增補鎌倉時代文學新論」)野村八良

〔一〕日記類

たまきはる 一卷 宮内省圖書寮藏本、建春門院中納言(俊成の女、定家の姉)が、宮廷奉仕の頃を追慕して記した敍事的日記で、仁安三年より建保七年までを記してある。作者六十三歳の時に成つたらしい。

▲鎌倉時代の日記紀行(「日本文學」岩波講座同上十四頁)土井幸助 ▲國文學史新講上(「鎌倉時代」四四五頁)次田潤

うたたねの記 一卷(群書類從所收)阿佛尼 阿佛尼の若い頃の抒情的日記と紀行で、若い頃深く契つた男に忘れられ出家し、その間病氣をし、回復後北山の家に歸り、父に伴はれて濱松に下り、乳母の病に都に上るまで。

▲鎌倉時代(「國文學史新講上」四四四頁)次田潤 ▲鎌倉時代文學新論」(二三頁)野村八良 ▲鎌倉時代の日記(「日本文學」

岩波講座)玉井幸助

嵯峨のかよひぢ　一册　飛鳥井雅有（新古今の撰者飛鳥井雅經の孫）定家の子爲家七十二歳の時、嵯峨の山荘に通つて伊勢物語、源氏物語、古今集等の傳授を受けた次第を記述してある。時に文永六年雅有は年二十九歳頃のこと。

▲鎌倉時代の日記文學（「日本文學講座第二卷」）佐々木信綱

▲鎌倉時代の日記（「日本文學」岩波講座）玉井幸助

春のみ山路　飛鳥井雅有（群書類從日記部所收）伏見天皇の東宮時代（御年十六歳）蹴鞠、和歌等の御師範申上げた時及鎌倉下向の紀行文である。

▲鎌倉時代の日記（「日本文學」岩波講座）玉井幸助　▲鎌倉時代（「國文學史新講上」）次田潤

中務内侍日記　一卷　宮内卿永經の女中務内侍の作。龜山、後宇多の兩朝を經て伏見天皇の正應五年までの間、禁中のこと、御幸の樣、伏見天皇の御卽位の大禮等を巧なる和文にて歌を混じて記したるもの。（群書類從三二四日記部）

▲中務内侍日記（「史學界第三卷第一號」）高木倘介

辨内侍日記　辨内侍寛元記とも二卷　寛元四年（一九〇六）正月二十九日富小路殿にて御讓位ありしことを壽ぐ歌より始まり建長四年までの和文の日記。記錄されたものは多く禁庭の行事。内侍が記錄しようとする執心の如何が分り、歌日記の體裁を持つてゐるものである。記事簡潔。（群書類從三二三）

竹むきの記　上下二卷　日野資名の女、西園守公宗の妻。上卷元德元年より正慶二年、下卷建武四年十二月貞和五年迄、（國書刊行會史籍雜纂第一所收）

▲竹むきの記について（「史學雜誌」二十二卷六號）和田英松

漢文體日記

漢文體の日記は、公卿日記、武家日記、僧侶日記、それぞれに非常な數に上るが、今は活版に附せられて居るものの中、極めて著名なるもののみ數種をあげることにする。尙此方面の記錄探索は、史料綜覽（史料編纂所發行）によつて見るが便利である。

玉葉　玉海とも、六八卷（國書刊行會第一期）藤原兼實　二條天皇の長寛二年十月十七日（一八二四）兼實が内大臣に任ぜられしより、土御門天皇の正治二年八月に至るまでの三十七年間の日記。

勘中記　十六卷　廣橋兼仲　後宇多天皇建治元年より伏見天皇の永仁二年に到るまでの日記。（史料通覽所載）

明月記　九六卷（國書刊行會第二期）藤原定家　高倉天皇の治承四年より四條天皇の文曆二年まで五十六年間の記錄、當時の社會人物の行蹟を知るに重要な書。

▲明月記脫漏（七卷）　▲明月記和歌部類　▲定家卿自筆明月記を視る上、下、（「國學院雜誌」昭和五年十一月）中里龍雄

吾妻鏡　五二卷　治承四年から文永三年に至る八十七年間、鎌倉幕府の右筆が記錄したる日記で、當時武家社會の通用文である往來體の漢文で、敍述は簡潔に要領を得てゐる。後世東四

十五巻を欠き五十一巻現存してゐる。

▲吾妻鏡古寫本考（「史學雜誌」二十三巻一〇號）和田美松 ▲東鑑考「林道春」評していふ「東鑑文章、雖レ減ニ古之書紀實錄一、然其事篤レ有レ實乎。校之源平盛衰記、平家物語一而後此眞僞亦可見矣」と ▲吾妻鏡考（「史學雜誌」一巻一號）星野恒 其の評に「此の書叙事確實、質にして野ならず簡にして能く盡す。賴朝の天下經營の方略、北條の政權攘竊の心曲等指實して其の顛末を具備せり。たゞ賴家變死の一事は曲筆を免れずと雖、其の餘は皆直書して諱まず（賴朝の傍婦、政子の妬悍の類、隱避する所なきを以ても之れを知るべし）彼の平家物語、源平盛衰記等の專ら潤飾を事とするものと、素より日を同じくして語るべきにあらず云々」 ▲吾妻鏡の性質及其の史料としての價値（「史學雜誌」九巻五號六號）原勝郎 ▲吾妻鏡集解 二巻 高桑駒吉、依田喜一郎、成川春一郎纂輯 ▲吾妻鏡備考 二巻 高桑駒吉、依田喜一郎、成川春一郎纂輯 ▲故八代博士と吾妻鏡（「國學院雜誌」三十一巻三號）曾根研三 ▲吾妻鏡の女性（「國語教育」十一巻一號二號）玉井幸助 ▲吾妻鏡の文章（「戰記物語の研究日本文學岩波講座」）五十嵐力 ▲吾妻鏡に於ける阿津賀志戰（「史學界」六巻一（一號）青山正 ▲此の他、東鑑異本考「榊原長俊」一册（寫）、東鑑集要二巻、東鑑莊名一巻（寫）、東鑑脱漏一册、東鑑脱漏抽纂一册、東鑑不審問答「伊勢貞丈」（寫本）一巻、東鑑末「林恕」（寫本）一巻、吾妻鑑類標（寫）二巻、東鑑曆算改補 一巻 安藤有彥等

花園院御記（宸筆曆記とも）三巻 花園天皇 延慶、文保を經て元應三年までの御略日記、（列聖全集所收）

言繼卿記 卅四巻 山科言繼 後奈良天皇大永七年より正親町天皇の天正四年に至る日記。詳細なる日記で參考資料として價値大である。（國書刊行會）

實隆公記 七十六巻 三條西實隆 正親町天皇の文明六年より後奈良天皇天文二年に到る日記 參考に資すべき所頗る多い。（目下刊行中）

蔭涼軒日錄 六十一巻 相國寺僧叔英、季瓊、龜泉の三人相次で錄したる日記、永享七年より十二年迄、嘉吉元年より寛正六年迄、文正元年より延德二年までの記錄。（大日本佛教全書所收）

滿濟准后日記 僧滿濟 應永十八年正月より永享七年四月までの漢文體の日記で、此の間二十餘年の幕府、皇室、醍醐寺他の諸社寺等の關係及び當時の學問、音樂、藝術等の狀勢を知るに貴重なる日記である。（續群書類從八百七十及補遺）足利義滿の猶子で、應永二十年二月醍醐寺座主となる。

看聞御記 後崇光院御記 應永廿三年より同三十二年、正長二年、永享元年より永享十三年、嘉吉元年より嘉吉三年、文安四年より文安五年まで二十八年間の漢文體御記、後崇光院は多趣味で、各種藝道を御愛護なされ、當時の宮廷と院の御所と、幕府と朝廷と、社寺との各般の關係を知るに樞要な日記である。（續群書類從補遺）

〔二〕隨筆類

方丈記　一卷　鴨長明　方丈記の內容は說明する必要はないと思ふ。作者を長明とすることも異論はない。たゞ流布本、大福光寺本、略本等の異本については、學者の所見の異るものがあるが、大福光寺本のやうなものを、長明が作つたといふことは認むべきだと思ふ。この書、組織整然として居て、所謂隨筆の無系統的な書きぶりと異つて居るが、自然文學といふ一面から隨筆の部に加へてよいものと思ふ。

▲方丈記首書(一卷)山岡元隣　▲方丈記泗說(二卷)加藤磐齋　▲方丈記諺解(二卷)作者不詳　▲方丈記流水抄(二卷)槇島昭武　▲首書方丈記(一卷)鈴木弘恭校　▲方丈記講義(一卷)今泉定介　▲標註方丈記(一卷)上田胤比古　▲冠註傍訓方丈記(一卷)星野忠恒　▲方丈記講義(一卷)中島幹事　▲方丈記評釋(一卷)竹園主人　▲方丈記析義(一卷)島井忱　▲方丈記詳解(一卷)城戸茂穗　▲方丈記新釋(一卷)竹野長次　▲方丈記評釋(一卷)內海弘藏　▲方丈記新釋(一卷)佐野保太郞　▲新譯方丈記(一卷)藤井乙男、鈴鹿三七　▲方丈記精解(一卷)吉川秀雄　▲校定方丈記評釋(一卷)吉川秀雄　▲方丈記新解(一卷)德本正俊　▲方丈記新釋(一卷)小松倘　▲精解方丈記(一卷)鈴木作良雄　▲講本方丈記(一卷)玉井幸助　▲新解方丈記(一卷)塚本哲三　▲方丈記私見(「帝國文學第廿五卷第九號」)野村八良　▲方丈記備見(「國學院雜誌」第廿九卷第三號)長尾素枝　▲方丈記評論(「國語と國文學」第三卷第三號)田中健三　▲方丈論研究(「日本文學講座」)後藤丹治　▲方丈記再論(「藝文」第十五卷第五號)後藤丹治　▲方丈記管見(「藝文」第十五卷第七號)野村八良　▲大福光寺本方丈記について(「國語と國文學」第二卷第七號)野村八良　▲方丈記とその人生觀(「心の花」九卷六號)樋口秀雄　▲方丈記鑑賞(「日本文學講座」)正宗白鳥　▲維摩經と方丈記(「國語と國文學」第六卷第二號)豐田八千代　▲方丈記刊行史(「鴨長明研究」昭和八年三月)小川壽一　▲方丈記の影響文學(「鴨長明研究」昭和八年四月)小川壽一

鴨長明に「發心集」の作があるが、佛教文學の部に述べることにする。

◇兼好法師と徒然草とについて

▲兼好法師　民友社發行　▲兼好法師の傳(「日本之文華」一卷一號)　▲兼好法師考(「國の花」昭和七年十一月)田中光雄　▲兼好法師(「史論」三〇號)岡田軸雲　▲兼好法師(「文海」一卷八號)　▲兼好法師傳記考證　大國隆正　▲兼好一代記(「帝國文庫珍本全集」下卷)自笑、其碩　▲兼好素描(「國語と國文學」九卷の八號)筑土鈴寬　▲徒然草の著者兼好法師傳(「歷史と地理」一卷)中村直勝　▲徒然草の著作の人格(「文章世界」五卷十四號)水野葉舟　▲人及び宗教家としての兼好法師(「國語教育」川上清吉)川上清吉　▲兼好法師の人生觀(「わか竹」五卷三號)武島羽衣　▲徒然草の研究(「日本文學講座室町時

代」)中村直勝　徒然草製作當時の世想、兼好の周圍と其の時代、徒然草と園太暦等　▲兼好法師とその時代（「史潮」昭和八年三月)志賀剛　▲鎌倉嫌ひの兼好(「三田文學」一卷八號)波多野承五郎　▲兼好法師小論(「國語と國文學」昭和六年六月)長島俊三郎　▲兼好法師論(「國語國文の研究」昭和七年十一月、十二月)宮脇善志　▲兼好に對する一考察(「大東文化」二卷十一號)豐田大誓　▲徒然草研究史(「國語と國文學」昭和四年五月、六月、七月)重松信弘　▲徒然草研究參考書目(「丘」昭和六年十二月)川瀨一馬　▲正徹本徒然草攷(「國文學誌」昭和六年六月)川瀨一馬　▲徒然草正徹本について(「國文學誌」昭和六年六月)石井庄司　▲正徹奥書本以前の徒然草(「文學」昭和七年七月)松尾聰　▲徒然壽命院抄攷(壽命院抄はこの書の最古の註釋本)(「國文學誌」昭和六年五月)川瀨一馬　▲徒然草異版攷(「國文學誌」昭和六年六月)川瀨一馬　▲徒然草壽命院抄の原稿本の發見(「京わらべ」第一號昭和七年二月)小川壽一　▲つれ〴〵草の研究について(「觀想」昭和三年五月)藤島春三　▲徒然草解題(「史學界」五卷六號)ますのやあるじ　▲徒然草鑑賞(「日本文學講座」)生田春月　▲徒然草著述年代について(「國史と國文學」昭和六年一月)橋純一　▲兼好法師の美的觀(「鹿兒島日本文學」昭和六年九月)原田芳記　▲兼好法師の趣味論としての徒然草(「國學院雜誌」十七卷十二號)内海弘藏　▲道念を中心として見たる徒然草(「國文教育」昭和三年十一月)西尾實　▲徒然草の作者――の概說、徒然草の思想解說(「日本文學聯講第二期中世期」一三五頁)佐藤幹二　▲つれづれの心(「文學序說」一四六頁)土居光知　▲徒然草の思想を論ず(「東亞の光」一ノ六)齋藤勇　▲道念を中心として見た徒然草(「國文教育」昭和三年十一月)西尾實　▲兼好に於ける「道」の存在論的意味―特にその現實形態について―(「丘」昭和七年十一月)[illegible]田隆　▲徒然草と枕草子(「國漢研究」)荒木良雄　▲徒然草と老子(「信濃教育」昭和七年一月)津田茂麿　▲徒然草の言(「東亞の光」二二卷九號)兒山信一　▲徒然草聯想集(「日本文學」昭和七年二月)[illegible]田貞之助　▲徒然草をよんで得た事(「ほとゝぎす」三〇卷六號)[illegible]野八呂　▲徒然草を讀む(「俳味」四卷四號五號)長尾素枝　▲徒然草に題く(「國語と國文學」昭和五年十月)[illegible]　▲徒然草のところどころ(「コトバ」昭和八年四月)[illegible]　▲兼好法師の[illegible](「國漢」七號)高木武　▲徒然草[illegible](思想内容を論ず)(「國學院雜誌」九卷十一、十二號十卷一號、三號、十二號)河野省三　▲つれ〴〵草のきほ[illegible](「むさしの」五卷一號)下田歌子　▲徒然草抄(一卷)立安法師　▲徒然草野槌(一三卷)林道春　▲徒然草鐵槌(二卷)青木宗固　▲徒然草鐵槌增補(六卷)山岡元隣　▲徒然草慰草(八卷)松永貞德　▲徒然草長頭丸抄(二卷)松永貞德　▲徒然草金槌(一二卷)西道智　▲徒然草古今抄(八卷)大和田氣求　▲徒然草抄(一三卷)加藤磐齋　▲徒然草句解(七卷)高橋梅[illegible]　▲徒然草分段抄(八卷)北村季吟　▲徒然草諸解(五卷)南部宗壽　▲徒然草新註(四卷)清水春流　▲徒然草

大全(十三卷)高田宗賢 ▲徒然草隱解(十七卷)井村信成 ▲徒然草直解(一〇卷)岡西惟中 ▲徒然草集說(十五卷)隱者閑壽 ▲徒然草參考(八卷)備憲空 ▲徒然草諸抄大成(二〇卷)淺香久敬(壽命院の「徒然草大全」、「徒然草參考」に至る數抄の總括したもの) ▲徒然草明汗稿(二卷)高屋近文 ▲徒然草要草(七卷)厭求上人 ▲徒然草奥儀抄(六卷)高屋近文 ▲徒然草考證(八卷)岸本由豆流 ▲つれ〴〵の讃(七卷)各務支考 ▲徒然草古今大意(二卷)作者不詳 ▲徒然草諸家鬪書(三卷)作者不詳 ▲徒然草吟和抄(五卷)作者不詳 ▲寂莫草貫首五卷作者不詳 ▲徒然草片玉秘事(一卷)作者不詳 ▲標註徒然草新釋(一册)渡邊弘人 ▲訂正增補徒然草文段抄(三卷)鈴木弘恭 ▲徒然草講義(一册)井上賴文 ▲挿圖徒然草講義(二卷)伊藤平章 ▲徒然草詳解(一册)内海弘藏 ▲徒然草評釋(一册)内海弘藏 ▲合評徒然草新解(一册)池邊義象、武島羽衣等 ▲徒然草精義(一册)藤田豪之助 ▲徒然草講話(一册)沼波瓊音 ▲沼波氏の徒然草講話について(「あさみどり」八卷三號)宮脇義臣 ▲徒然草解釋(一册)塚本哲三 ▲徒然草講義 佐野保太郎 ▲增註校訂徒然草諸抄大成 吉澤義則撰 ▲異本徒然草(正徹本による)吉澤義則校訂 ▲徒然草講義 佐藤繁作 ▲つれづれ種正徹本(「現存徒然草最古の寫本」永享三年正徹自筆本)垣内松三・川瀨一馬訂

〔三〕紀行類

伊勢記 蓮胤伊勢記とも。一卷 鴨長明 神宮文庫に鴨長明伊勢記抜書ありといふ。完本なし、逸文は夫木和歌抄卷十一にあつて、此れによつて建久元年の秋伊勢參宮を主としたる名所見物の旅行をなしたことを察することが出來る。

▲鎌倉時代の日記紀行(六頁)(「日本文學」岩波講座)玉井幸助

▲鎌倉時代文學新論(十七頁)野村八良

信生法師日記 一卷(寫)下野國鹽谷城主鹽谷朝業 實朝の寵遇をうけた朝業が、實朝の歿後出家し嘉祿元年から冬へかけて一年間の生活を記したる旅日記。

▲鎌倉時代「國文學新講」上(四五一頁)次田潤 ▲鎌倉時代の日記文學(七頁)「日本文學講座」佐々木信綱 ▲鎌倉時代の日記紀行(三五頁)(「日本文學」岩波講座)玉井幸助

海道記 一卷 作者を鴨長明とする說は非、源光行、源親行かとする說もあるが紛はし。後堀河天皇の貞應二年四月上旬に京都を出立し、東海道を下り同月十七日に鎌倉に着し、五月始めに京都に立ちかへつたまでの紀行。

▲海道記の證本と其の成立(文章著者に關して)(「國語國文の研究」四卷五號)後藤丹治 ▲海道記東關紀行、宿泊地考(「國語と國文學」昭和六年十二月)鵜田忠雄 ▲海道記の本文を混亂せしめたる「附註」(「文學」昭和八年六月)加藤惣一 ▲海道記と藤原秀能(一)(二)(「歷史と國文學」昭和七年四月、昭和八年一月)野呂匡

東關紀行 一卷 源光行の子親行か。近來は此を疑ふ。海道記より約二十年後、仁治三年八月京を發し、鎌倉に至り十月二

十三日歸京の途につく間の滯留見聞記。和漢の故事を引き文章流麗、海道記に比し佛語、漢語は少い、比較的和文調ではあるが實感に薄く、平板なる和歌は生氣なく當時歌調の臭を帶びてゐる。後世の文に影響することが多い。

▲註釋東關紀行（一卷）畠中繼之助、辻橋大吉　▲標註東關紀行（一卷）大町桂月　▲新譯東關紀行精解（一卷）吉川秀雄　▲新譯東關紀行（一卷）須田正雄　▲東關紀行新釋（一卷）笠松彬雄　▲東關紀行詳解（一卷）島野幸次　▲東關紀行の作者について（「國學院雜誌」七卷十號）島野幸次　▲東關紀行私見（「藝文」十六卷二號三號）後藤丹治　▲東關紀行につきて（「歷史地理」十二卷六號）荻野懷之　▲東關紀行に見えたる鎌倉大佛の記事について（「學燈」十三卷一號」平子鐸嶺

阿佛尼と十六夜日記　藤原爲家の後妻となつた阿佛尼は爲家の歿後遺言によつて爲相（時に十三）の有に歸すべき細川莊を長子爲氏（五十四歲）と爭ひて女の身を以つて鎌倉に下つて訴訟を構え（その結末は三十六年後爲相の勝訴となり、阿佛尼の死後三十年のことである。）又、我が子の爲に爲家の歌道を傳へた。爲相が藤谷家の歌道を樹立したのも此母阿佛尼の力に外ならない。

▲阿佛尼（「國語と國文學」昭和四年八月）市村平　▲阿佛と爲家（「國語教育」十一卷十二號）玉井幸助　▲舊蹟と遺物とから見た阿佛尼の一生（「歷史と國文學」昭和六年六月）小川壽一　▲阿佛尼の文學（「國語と國文學」六卷十號）風卷景次郎　▲阿佛尼傳に關する疑と補遺（「わか竹」七卷六號、七號）櫻井秀

十六夜日記　一卷　阿佛尼が前述の訴訟のために十月十六日の夜京都を立つて鎌倉に下つた紀行で爲家の歿した翌々年卽ち建治三年の事である。爲氏を恨み、幼き兒との別れを悲しみ、道中の風物を記し、鎌倉滯居の有樣都の舊知との消息、贈答等を載す、文章優麗簡潔、土佐日記、更級日記の流をつぐ紀行日記でその中の歌は味ふに足る。後世に愛讀せられたものである。

▲十六夜日記の原形（「國語と國文學」七卷六號）玉井幸助　▲十六夜日記の本文批評（「國語教育」昭和五年五月）玉井幸助　▲十六夜日記の成立に關する考證（「教育と國文學」）玉井幸助　▲十六夜日記の成立に關する考證（「日本文學」岩波講座「鎌倉時代の日記紀行」四五頁）玉井幸助　▲十六夜日記の文章　風卷景次郎　▲十六夜日記成立の機緣たる細河庄の訴訟に就いて（「國語と國文學」昭和七年十一月）松井簡治　▲十六夜日記殘月抄（三卷）小山田與清、北條時隣、萬治二年洛陽林和泉板流布本を本とし、諸古寫本を以つて對校して頭註、傍註し、語釋を直書す。▲十六夜日記殘月抄總論所見（北條時隣の考證）▲新譯十六夜日記精解　吉川秀雄　▲十六夜日記詳解　城戸茂種　▲口譯新解十六夜日記　關根正直、本田龍作監修　▲十六夜日記新釋　佐野保太郎　▲十六夜日記の一節（國文評釋）（「わか竹」一卷三號、四號）眞島昇衣　▲評釋十六夜日記（一冊）鈴木梅三郎　▲十六夜日記講義（一卷）三木五百枝　▲參考標註十六夜日記（一卷）鈴木弘恭　▲十六夜日記講義（一

巻）平田盛胤　▲十六夜日記新釋（一冊）德本正俊　▲十六夜日記標註（一巻）佐々木信綱　▲十六夜日記に見えたる細川荘の訴訟（「歴史地理」第五巻五號）奚疑庵　▲纂註十六夜日記校本（一巻）齋藤普春　▲「阿佛吾妻下り」は「十六夜日記」と異り別個のもの、宮内省圖書寮藏。

蒲生氏鄉紀行　一巻　蒲生氏鄉　天正二十年豐臣秀吉、征韓の折、陸奥を發して京に着くまでの紀行（群書類從三三八）

宗牧東國紀行　一巻　谷宗牧。

紹巴富士見紀行　一巻　里村紹巴。

都のつと　一巻　宗久　崇光天皇觀應の頃、諸國を巡歴して東國より奥州に下るまでの紀行文。（群書類從三百三十二巻、帝國文庫の續々紀行文集所收）貞治六年二條良基の跋文がある。

高野日記　寫一巻　頓阿　高野山參詣紀行文（群書類從五二三）末にいろは四十八字を冠におきて四十八首をよむ。

善光寺紀行　一巻　僧堯恵　寛正六年の善光寺參詣の雅文體の紀行。（群書類從三三六紀行部）

藤河の記　關の藤河（蔗軒日錄）、美濃の紀行、關の藤河日記（尋尊大僧正記）後成恩寺道の記、東行記とも二巻　一條兼良應仁の亂を避けて奈良にあるころ（文明五年から後遠からざる頃）の美濃の旅行記（群書類從（三三六）國文大觀、續帝國文庫續續紀行文集）

小島の口ずさみ　小島筆占（なじまふでのすさみ）とも一巻二條良基（群書類從三三三）南朝の軍兵京都に入り、主上美濃國小島の行宮に御幸し給ひ文和二年七月廿五日良基お伴をして京都出發、同年九月還幸までの紀行。

富士紀行　飛鳥井雅世　永享四年九月將軍義教富士御覽の時供奉の紀行（群書類從三三五）

伊勢紀行　一巻　僧堯孝　永享五年將軍義教に供奉し伊勢參宮記。（群書類從三三四）

覽富士記　堯孝　永享四年。

道行ぶり　今川貞世　稍古雅な和文體であるが、九州探題として建德元年四十六歳であつた。趣味的土俗的紀行である。

嚴島詣日記　今川貞世（了俊と號す）康應元年三月、將軍義滿一行宮島參詣、貞世六十四歳。

なぐさめ草　僧正徹　應永二十五年三月伊勢詣に出立し、歸京後御堂にまゐりしにつけ光源氏の事どもなぐさめ草になつたことなど記してある紀行（群書類從三三四）

心敬紀行　一巻　心敬僧都　應仁の亂を避けて關東へ下向、品川に着き、鎌倉に滯留すること等を記す。老のくり言と同本なり。

耕雲紀行　花山院長親　應永廿六年伊勢參宮の記、日本文學書目解題、室町時代、後藤丹治（七九頁）

高野參詣日記　一巻　三條西實隆　年四月十九日天王寺から高野山にかけての旅行記で五月三日歸洛してゐる。（群書類從三三八）

白川紀行　一巻　飯尾宗祇（續群書類從五二四）宗祇應仁二年

の紀行である。京都の亂を避けて東國に漂泊の旅を送りし頃の作だ、瀧谷より那須を過ぎ白河の關に到つて、懷舊の情切なる所にて筆をとゞめてゐる。終に白河にての連歌一卷を添ふ。

筑紫道記 一卷 宗祇(群書類從三三八)文明十二年七月より十月まで、周防國山口に下りてから、長門國赤間關、豐前門司に出で筑前の國を巡歴し十月に山口に歸るまでの紀行。

▲宗祇を中心とした日本文學(「日本文學講座」)小島吉雄

廻國雜記 道興准后 文明十八年六月京を出て北國に入り、關東より奧州に下りたる紀行雜記(群書類從紀行部三三七)(橫紀行文集、有朋堂文庫)和歌、俳諧歌、俳諧、連歌、發句の混在は當時歌壇の動向を窺ふ資料となる。

廻國雜記標註 二卷 岡岡野淵良 文政六年自序に曰く、「此の記をよまんには行囊鈔(江岡氏觀海集)義經記、宴曲集、北關紀行、東路のつと、梅花無盡藏、私案鈔(武藏深大寺僧長辨著)顧門物語(高田氏藏)官鏡武鑑(夏目定房所撰)日川故事考などによりて、その地理から加へることおほし、證に引たれども、路のついで、前後のわたり、長きは引がたくてもらせり、くはしくは本書をひらき見るべし。」

宗長手記 一卷 柴屋軒宗長 大永二年五月より、同七年十二月に至る。連歌師宗長の日記、東國の形勢を見るに足るもの多し。(群書類從三三六)

東路のつと 一卷 宗長(群書類從三三九)永正六年七月駿河を立ち出で、武藏、下野の各地をめぐり十二月鎌倉につくまでの紀行である。

富士御覽記 一卷 柴屋軒宗長の作といはれる。永享四年足利將軍義教が富士に赴いた時隨伴した紀行。

九州道の記 一卷 細川幽齋(細川藤孝) 豐臣秀吉天正十五年五月九州[illegible]の時[illegible]を出で、[illegible]九州に入り、南路歸陣し七月下旬大阪に着くまでの紀行(群書類從三三八)

東國陣道記 細川幽齋 天正十八年小田原[illegible]の記(群書類從三三九)

第四章　戰記文學

軍記物語の解釋に關しては、先づその本質を把握する必要があると思ふ。平安朝の物語も、平家物語も、同一立場から眺めるやうでは、到底生きた理會は困難である。

先づ第一に、多くの軍記物語に共通な現象として、異本の頗る多い事である。平家物語などは百に近いほどの數に

上る。この事實の我々に語る處は、これ等軍記物語は、特定の作者一人の創作した記述ではなくして、當時の國民の集團的創造による發展に俟つ所の多いものであるといふ事實である。從つて、時代の底を流れる國民的感情が、これ等の文學の中に充分に感知せられるのである。

軍記物語はその主題を戰爭に取つて居る。又英雄に取つて居る。そして描く所は動的で刺戟的で表面的類型的である。かうした特色は、一言にして言へば大衆的である。事實の深い觀照や心理分析はないが、一般民衆の何人にも應ずるだけの興味を備へて居る。事實の個性的な描寫はないが、美的に洗錬せられた類型的表現を持つて居る。これ等は、何れも軍記物が國民的集團的構想の產物であることゝ深い連りをもつて居るのである。

軍記物は鬪爭を描く。力のはげしい葛藤を描く。しかしそれのみではなくて、その所々に物のあはれや人間愛慾の姿を點綴する。平安朝の浪曼的な優雅さの世界が類型化されて、その間に流れる。こゝに又軍記物の一般民衆によびかける魅力が存する。

更に軍記物は、これ等の鬪爭愛慾の各種の場面の集團を、時代を包む一種の精神的潮流によつて統一づけてゐる特色を持つ。それは前代より浸潤した佛教の無常觀である。厭離穢土欣求淨土の精神である。祇園精舍の鐘の聲に始まつて、女院の六道輪廻に終る平家物語はその典型である。後代に及んでは更にこれに儒教的精神が濃厚に加はつて來て、所謂武士道精神が軍記物語全體を包む。こゝに民衆は愛慾鬪爭の世界を通じて、一つの精神的昂揚に高められるのである。

以上述べたやうな特色を持つ軍記物語の本質を考へる時、我々は貴族階級以外の民衆のさながらの姿を見るのである。この點からして、これ等の軍記物語が、後代文學例へば謠曲幸若・淨瑠璃・歌舞伎等の、大衆的文藝に無盡の素

材を提供した事實を充分に理解出來ると思ふのである。

以下一々の作品について、その研究的方面の紹介を試みるであらう。

〔一〕**戰記文學一般に關する研究**

▲文學に現はれたる我國民思想の研究(武士文學時代)津田左右吉 (戰記文學の由來、戰記文學の政治的道德的意義、弘安の役と國民的自尊心、戰記文學と儒教、戰記文學と佛教、戰鬪の與へる訓練等) ▲歷史物語と戰記物語(「國文學史新講」上卷)次田潤 ▲戰記物語と武士道(「わか竹」七卷一號) 高木武 ▲戰記文學概說(「日本文學」昭和七年一月)阪口玄章 ▲戰記物語と武士道(「わか竹」七卷一號)高木武 ▲戰記文について(「國學院雜誌」十卷三號)島野幸次 ▲戰記物語の時代環境について—(作者の製作心理の解剖)(「國語と國文學」三卷十號)齋藤清衞 ▲西敎徒の管見に入つた戰記文(「國語と國文學」三卷十號)新村出 ▲史學上より觀たる戰記物語の稱歎(「國學院雜誌」昭和三年三月)高木武 ▲軍記物語の性質(軍記物語を生む精神—の意味)(「日本文學聯講」二期」)久松潛一 ▲戰記物語の書名と作者(「日本文學講座」室町時代太平記研究二頁)黑澄惣五郎 ▲戰記物語研究 (「日本文學講座」)高木武 ▲軍記物語の研究…軍記のもつ要素…(「日本文學」岩波講座)五十嵐力 ▲軍記物語雜考(「鹿兒島日本文學」昭和七年三月)濱田佐賀衞 ▲軍記物の諸樣相(「日本文學」岩波講座近古文學と時代精神) 高木市之助 ▲軍記物語に現はれたる武士階級のイデオロギー(「思想」昭和六年六月)西田集 ▲軍記物語に現はれたる佛教(「國語と國文學」三卷十號)久澤泰穩 ▲軍記物の本質(「國語と國文學」三卷十號)高木市之助 ▲軍記物語と謠曲物語(「國語と國文學」三卷十號)志田義秀 ▲軍記物語(「信濃教育」昭和七年十一月)池田忠 ▲戰記物語に現はれた清盛と重盛(「わか竹」七卷七號より十二號)高木武 ▲軍記中の女性(「國語と國文學」二卷四號) ▲戰記物語その性質(「日本文學大辭典」) ▲鎌倉時代の軍記物の文章の歷史的成立(「國語と國文學」昭和七年一月)高島俊一

保元物語 三卷 三十七段 作者未詳 保元元年七月鳥羽院崩御から元曆元年四月保元亂戰場の白河殿の址に崇德院を齋ひ祀るまで、二十八年間の實記で、作者として葉室時長、中原師梁、源喩信正等が當られてゐるが、分明せずただ嶽山に關係ある人と見るのは正當であるらしい。平家物語と保元物語、平治物語の製作年代の前後が問題であるが、保元、平治物語が前に作られたと見る說の方が正しいらしい。

▲參考保元物語(三卷九册)德川光圀の命によつて今井弘濟、内藤貞顯との編纂、流布本を基とし他の寫本と對校せし文學書四十九部參照、遊行考訂のもの ▲諸本の特色(一二一六頁)(「增補鎌倉時代文學新論」)野村八良 ▲國文學史新講上 次

田潤 ▲保元物語人物、作者、結構、卷篇の分割等(「戰記物語の研究」日本文學講座十四頁) 高木武 ▲保元物語の文章(「史學界」一卷二號) 內海弘藏 ▲保元物語に於ける鎭西八郎爲朝(「史學界」一卷一號) ▲保元物語の形式內容(「戰記物語の研究」(十頁)日本文學、岩波講座)五十嵐力 ▲保元物語考(「史學叢說」第一集)星野恒 ▲保元物語異本の一考察(「國漢會誌」昭和六年十二月)高橋貞一 ▲保元物語異本の研究(「書誌學」第 號昭和八年 月)高橋貞一 ▲たざさの露(「國學院雜誌」九卷五號)宮西惟助 ▲講本保元物語(一册)玉井幸助 ▲保元物語講義(二卷)三木五百枝 ▲保元平治物語合本類標(一卷)作者不詳 ▲保元物語大全 作者不詳 ▲參訂保元物語註釋(三卷)內藤耻叟、平井賴吉 ▲保元物語評釋(一册)鳥野幸次 ▲保元物語新釋(一册)吉村重德 ▲頭書保元物語(一卷)

平治物語 作者未詳、保元物語と同一作者であるといはれて居る。保元三年八月白河天皇御讓位より正治元年正月賴朝の歿するまで四十一年間の戰記物語。

▲平治物語(「國文學界」一號より五號まで)今泉定介 ▲鎌倉時代文學新論 野村八良 ▲國文學史新講上(鎌倉時代)四〇六頁 次田潤 ▲保元平治物語考史(「史學會雜誌」一卷三號)星野恒 ▲保元平治物語の書史學的一考察(「國語と國文學」三卷十號)高木武 ▲保元平治物語の一研究(「國語・國文」昭和八年六月)土橋寬 ▲保元平治に現はれたる女性(「日本文學」(昭和六年八月)千代延尙壽 ▲保元平治物語(「文學」)津田左右吉 ▲頭書平治物語(一卷)中根淑 ▲平治物語武器談(一册)伊勢貞丈 ▲參考平治物語(一卷)今井弘濟、內藤貞顯(德川光圀の命により諸書對校異同註) ▲平治物語講義(二卷)今泉定介 ▲保元平治物語解釋(一册)今泉定介 ▲參訂平治物語註釋(三卷)內藤耻叟、平井賴吉 ▲平治物語考(一卷)岡本保孝 ▲校註保元平治物語(一册)鳥野幸次

平家物語

▲平家物語序說(上下)(「皇學」昭和七年十二月、昭和八年三月)後藤丹治 ▲平家物語の著者(「文學序說」一六六頁)土居光知 ▲平家物語の作者(「鎌倉時代」國文學史新講上四一〇頁)次田潤 ▲平家物語の作者及び作成年代と定說の再吟味(「國語・國文」昭和七年十二月)後藤丹治 ▲平家物語の製作年代について(「日本文學講座」戰記物語の研究)高木武 ▲平家物語の成立、卷篇の分割(「日本文學」岩波講座戰記物語の研究二〇頁)五十嵐力 ▲平家物語史論(一册)館山漸之進 ▲平家物語の特質(「國文學史新講」上鎌倉時代)次田潤 ▲平家物語の文學としての特色(「日本文學聯講」、一期)沼澤龍雄 ▲平家物語につきての研究(「國語調查委員會編纂」)山田孝雄擔當 前篇平家物語考(二册)明治四十四年十二月刊 後篇平家物語の語法(二册)大正三年十二月刊 ▲平家物語(上下二卷)山田孝雄校訂 ▲平家物語(流布本、異本)(「增補鎌倉時代文學新論」一三五頁) 野村八良 ▲平家物語の新研究(「早稻田文學」大正九年)五十嵐力 ▲平家物語の研究について(「日本文學」

昭和六年八月）後藤丹治 ▲平家物語の背景をなす日本文化の二要素（「文學序説」一六三頁）土居光知 ▲平家物語と時代精神（「國語と國文學」三卷一〇號）沼澤龍雄 ▲平家物語と悲觀思想（「日本演劇の起源」二一四頁）吳文炳 ▲平家物語の思想（「增補鎌倉時代文學新論」一六六頁）野村八良 ▲平家物語の時代性と表現について（「國語と國文學」昭和六年十月）時下米太郎 ▲平家の作者が見た過渡時代のあはれ（「わか竹」七卷十號）内海月杖 ▲平家物語の結構（「日本文學」講座戰記物語の研究五八頁）高木武 ▲平家物語作者の構想の動機（「日本文學」岩波講座戰記物語の研究）五十嵐力 ▲平家物語作者の人生觀（「日本文學」岩波講座戰記物語の研究）五十嵐力 ▲平家物語の作者神道的信仰に就いて（「國語と國文學」昭和四年十二月）御巫清勇 ▲平家物語に於ける發心と修行（「丘」昭和八年一月）新名登 ▲平家物語文學的價値（「增補鎌倉時代文學新論」一七四頁）野村八良 ▲平家物語に現たる女性の一考察（「國語教育」十三卷四號）峯尾格 ▲平家物語に關係ある傳說（「東亞の光」十三卷六號）志田義秀 ▲平家物語の典據ありと思はるる文に就て（「國語と國文學」三卷一〇號）御橋悳言 ▲平家物語著述の資料に就て（「藝文」一四卷四號六號）後藤丹治 ▲平家物語の資料（「增訂鎌倉時代文學新論」一五四頁）野村八良 ▲平家物語文章（「增訂鎌倉時代文學新論」一六七頁）野村八良 ▲平家物語詞曲談（「新小說」十三卷三號）梅澤和軒 ▲平家特有の敍事法（「文章世界」三卷九月）内海月杖 ▲平家物語出典の研究（「國語國文の研究」昭和四年二月、三月、六月）後藤丹治 ▲平家物語の典據ある語句について（「日本文學」昭和六年八月）後藤丹治 ▲平家の註釋及研究（「國語と國文學」三卷一〇號）後藤丹治 ▲平家物語解題（「史學界」一卷五號） ▲平家物語詞章研究 （「國語國文の研究」一、二、五、八、一〇、一四、一六、二九號）潁原退藏 ▲平家物語講義（「國文學界」三〇號） 今泉定介 ▲平家物語評釋（「文章界」一卷一號より五號）今井彥三郎 ▲平家物語難語考（「國語國文の研究」廿一號、廿八號、廿九號）後藤丹治 ▲亡族史平家物語を讀む（「中央美術雜誌」一卷五號）菊池謙讓 ▲敍事詩としての「平家物語」（「文章世界」五卷十四號）岩野泡鳴 ▲諸書に引かれたる平家物語に就て（「藝文」十二卷一號）後藤丹治 ▲平家物語の斷簡（「藝文」十三卷四號）中村直勝 ▲平家物語と太平記との關係（「わか竹」八卷四、五、六、八、九、一〇） 高木武 ▲平家物語灌頂卷と寶物抄（「國語國文學」三卷一〇號）橋本進吉 ▲平家物語と源平盛衰記との關係（「史學雜誌」二十六卷七號）津田左右吉 ▲平家物語流布本と盛衰記との先後（「增補鎌倉時代文學新論」一五一頁）野村八良 ▲平家物語延慶本長門本源平盛衰記の關係について（「東亞の光」十二卷八號）高木武 ▲平家物語源平盛衰記に異同多し（「史學雜誌」九卷二號）星野恒 ▲平家物語源平盛衰記考（「史學雜誌」一卷五號）星野恒 ▲平家と太平記との關係（「わか竹」八卷二號より六號まで）高木武 ▲根來本平家物語と他書との關係（「史學雜誌」二六卷四

號)野村八良 ▲平家物語と方丈記との關係(「日本文學」岩波講座戰記物語の研究十八頁)五十嵐力 ▲源氏平家物語と謠曲との關係(「能樂」七卷六號)久米邦武 ▲平家物語と方丈記との關係(「日本文學」岩波講座戰記物語の研究十八頁)五十嵐力

▲長門本平家と盛衰記との關係(「藝文」十五卷十二號)後藤丹治 ▲忠度集と平家物語(「東亞の光」十四卷三、五、七、八號)志田義秀 ▲平家物語に見ゆる和歌(「國語と國文學」昭和七年十一月)時下米太郎 ▲慈圓僧正と平家物語(「國文教育」六卷三號) 中島悅次 ▲平家物語は劇の脚本として日本演劇の基本を成すもの(「日本演劇の起源」二〇五頁)吳文炳

◇歌謠としての平家物語に關して

▲平家物語の歌謠的分子(「日本文學」岩波講座戰記物語の研究三〇頁(五十嵐力 ▲平家物語の作者、作成時代、價値(「日本歌謠史」三九九頁)高野辰之 ▲平曲盛行時代、平曲の由來、平曲發生時代 ▲平家 (藤田德太郎校訂「歌曲考」二六頁) 山崎美成 ▲瞽者の平家を語る事(「歌舞音曲略史」)小中村清矩

▲平家琵琶(傳來、唱法、譜詞、樂譜、祕曲)(「日本音樂概論」四三二頁) 伊庭孝 ▲平曲(瞽盲法師の歌謠)(「日本文學」岩波講座日本歌謠の展開六一頁)藤田德太郎 ▲平家琵琶(「增訂鎌倉時代文學新論」一七四頁)野村八良 ▲平家勘文錄 (平家相傳之大綱、家、物、語者、卷數、傳統等)(「續群書類從」五六〇) ▲平家音樂史(一冊)館山漸之進 ▲新註平家物語 石村貞吉 ▲石村貞吉氏著新註平家物語(「國語と國文學」昭和七年三月)岩淵悅太郎 ▲平家物語新釋(上下)中村孝也序、溝口駒造著 ▲天草本平家物語抄(「藝文」十七卷九號より十二號まで十八卷一號より十二號まで) 龜井高幸 ▲天草本平家物語 新村出序並閱、龜井高幸飜字 ▲長門本平家物語の原本に就いて(「國學院雜誌」昭和六年一月)中島正國 ▲南部本平家物語考(「藝文」四卷六號)友枝照雄 ▲平家物語拾遺(「國文學界」三號) 天因居士 ▲平家物語講義(六卷)今泉定介

▲平家物語評釋(一冊)內海弘藏 ▲平家物語略解(一冊)御橋悳言 ▲平家物語通釋 (一冊) 赤堀又次郎 ▲平家物語標註(一八卷)平道樹 ▲平家物語評判秘傳抄 作者不詳 ▲平家物語考(一卷)岡本保孝 ▲平義器談(一卷)伊勢貞丈(「平家物語及義經記の中の兵具の解」) ▲平家物語考證(一二卷)野々宮定基 ▲評釋平家物語(一冊)梅澤和軒 ▲新譯平家物語(一冊) 高木武 ▲平家物語詳解(二冊)松本龍之助 ▲新體平家物語(二冊)引平矢貞三 ▲平家物語評釋(一冊)坂口玄章

源平盛衰記 作者未詳 林道春「葉室時長平家物語作者唯一也ト公卿補任ニアリソレハ四十八卷ノ盛衰記ナルベシ」(野槌)山田孝雄「平家物語考」に「玄惠法印若し平家物語を編せしならばそは源平盛衰記を以つてこれに擬すべきはむしろ當れるものといはざるべからず」とある。

▲源平盛衰記(「文學に現はれたる我が國民思想の研究」武士文學時代)津田左右吉 ▲參考源平盛衰記 今井孝濟考訂、內藤貞顯重校(德川光圀の命によりて諸書對校して異同を註す)

▲源平盛衰記問答　國文註釋全書　▲源平盛衰記補闕　國史叢書　▲源平盛衰記人名　三十幅　▲源平盛衰記刪書（安齋叢書）伊勢貞丈　▲源平盛衰記解題（「史學界」一卷五號）▲源平盛衰記武器談（國文註釋全書）伊勢貞丈　▲源平盛衰記精釋（「國學院雜誌」六卷一〇、一一號七卷八、一一、八卷一號）松井簡治　▲平家物語源平盛衰記考（「史學雜誌」第一卷五號）星野恒　▲屋島合戰緣起に就て（源平盛衰記との先後考證しあり）（「藝文」十六卷十號）後藤丹治

義經記　八卷　源義經一代の傳記である。作者、製作年代未詳。

▲義經記の構成と史實（「日本文學」岩波講座義經記二九頁）島津久基▲義經記の性質（同前）島津久基　▲義經記と義經物語（「日本文學」岩波講座義經記二九頁）島津久基　▲義經記と義經傳說の成長（「日本文學」岩波講座義經記四二頁）島津久基　▲義經記と義經傳說の展開（「日本文學聯講」第二期中世期一四七頁）島津久基　▲義經記の古活字本について（「史學雜誌」三八卷三號）野村八良　▲義經記成長の時代（「中央公論」四一卷一〇號）柳田國男　▲義經傳說の淵叢としての義經記（「國語と國文學」三卷十號軍記物語號）島津久基　▲義經に關する謠曲（「能樂」六卷八號）鈴木暢幸　▲義經入夷傳說考（「東亞の光」九卷六號、八號「アイヌの研究」）金田一京助　▲義經記大全（十一卷）義經記評判とも義經記にのる主從の傳說につき其實否を辯論して評註を加ふ　▲義經記判注（十二卷）馬場信意義經が一生の軍事最後の島渡の事實を考證して評註を加へたもの　▲義經記に現はれたる地理（「歷史地理」第三四卷第三號）岡部精一　▲義經記講義　藏田國秀　▲標註義經記　生田目經德　▲義經記と曾我物語の語法について（「國文教育」昭和二年號）小山朝丸

曾我物語　十卷　作者不詳　大石寺本の作者は大石寺の僧か。〔以上山岸德平氏說〕。假字本の作者は僧か。公卿か。眞字本の作者は叡山の僧か。河津三郎が赤澤山の遊獵にて工藤祐經に射殺されてから、その子曾我十郎祐成、五郎時致が苦心の末父の仇を殺し、本望をとげ、大磯の遊女虎が尼となつて兄弟の菩提を弔ふまで。

▲曾我物語（物語の梗概と本文の種類、本門寺本の筆者、日義と妙本寺の日我との關係諸本本文の異同、諸本の系統と作者）（「日本文學聯講」第二期中世期）山岸德平　▲曾我物語に就いて（「國語と國文學」三卷十號　江波熙　▲曾我物語の著作年代（「藝文」第十卷六號、七號）佐成謙太郎　▲曾我物語の傳本（「日本文學」岩波講座室町時代日本文學書目解題（四〇十頁）後藤丹治　▲曾我物語の成立、諸本（「日本文學大辭典」）　▲曾我物語の展望（「國語と國文學」昭和八年四月）高木武　▲暗黑時代の一文學（曾我物語について）（「帝國文學」二五卷の二號）幸田露伴　▲流布本曾我物語に原據あることを論じて物語の典據ある詞句を擧ぐ（「國語と國文學」昭和八年四月）御橋悳言　▲曾我物語私考（「國漢研究」昭和八年六月）北村公佐　▲曾我

物語の語法について(「國文教育」昭和二年)小山朝丸 ▲曾我物語に於ける史實檢討(「國語と國文學」昭和八年四月)後藤丹治 ▲曾我物語と史實(「明星」七卷五號)正宗敦夫 ▲曾我物語と佛教文學(「國語と國文學」昭和五年六月)小川壽一 ▲曾我物語と義經記(「國語と國文學」三卷十號)佐成謙太郎 ▲曾我物語の影響(謠曲、舞の本、古淨瑠璃、淨瑠璃、草子類等)(「日本文學大辭典」) ▲日本古典全集曾我物語の解題 ▲異本曾我物語 鹿驪總吉 ▲標註異本曾我物語(一册)生田目經德 ▲參訂曾我物語註釋(二册)内藤耻叟、平井賴吉 ▲義經記と曾我物語の語法について(「國文教育」昭和二年號)小山朝丸 ▲曾我物語の註釋及び研究(「歷史と國文學」昭和七年六月、七月)小川壽一

太平記 室町時代作品中に太平記を凌駕して衆人に愛讀せられ、研究せられる程の戰記物は出なかつた。平家物語が琵琶法師によつて語られた如く、太平記は物語僧によつて衆人の前で讀まれたものである。四〇卷の作者に異論があり、太平記として作成されたものに增補追加されて四〇卷が成立したと論ぜられる樣に成立年代と作者とにまだ解決されない問題を有してゐる。茲に想定された作者の二三人を擧ぐれば小島法師、兒島高德、山法師である。洞院公定日次記の應安七年五月三日の條には、

「傳聞去廿八九日之間、小島法師圓寂云々、是近日翫二天下一太平記作者也、凡雖レ爲二卑賤之器一有二名匠聞一可レ謂二無念一…」

とある。星野恒博士は備後三郎說をなし、菅政友は山法師說をとる。

▲太平記概說(「國語と國文學」軍記物語號三卷十號)野村八良 ▲太平記について(「月刊日本文學」昭和六年九月)龜田純一郎 ▲太平記研究(「日本文學講座」室町時代)魚澄惣五郎 ▲太平記(「日本文學」岩波講座日本文學史概說鎌倉室町時代三八頁)齋藤淸衞 ▲太平記に就いて(「國民講座」一二)尾上八郎 ▲太平記物語(「わか竹」五卷五、六、七號)高木武 ▲太平記「文學に現はれたる我が國民思想の研究武士文學時代」)津田左右吉 ▲太平記作者年代(應安七年以前に行はれたること(公定日記による)高野辰之博士は興國(貞和)年代作成さると九條家舊藏本を以つて考察す」(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代十四頁)後藤丹治 ▲太平記の題名(安危由來記、國家治亂記、國家太平記、天下太平記、太平記」(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代十四頁)後藤丹治 ▲太平記の名義及作者の研究(「國語教育」九卷六號)靑木辰治 ▲太平記の製作年代に就きて(「帝國文學」二一卷九號)高木武 ▲太平記と吉野時代の武士の總括(「日本文學聯講」第二期中世期一二〇頁)高木武 ▲太平記作成年代考(「史學雜誌」四一卷二號)高野辰之 ▲太平記は勅撰書なりといふも不可なきものの如し(「明治會叢誌」三七號)宮地嚴夫 ▲太平記の成立と惠鎭上人(「國語と國文學」昭和八年三月)荒木良雄 ▲參考太平記(四〇卷四一册)元祿二年完成、元祿三年刊(德川光圀の

命にて、今井弘濟、內藤貞顯が編纂九種の本を對照し百四部の史書文學書を參照す。」(國書刊行會本所收) ▲太平記傳本、刊本(西源院本、神田本、前田家本、吉川本、毛利家本、今川家本、北條家本、南都本、島津家本、今出川家本、天正本、九條家藏本、帝國圖書館本」(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代十五頁、十六頁)後藤丹治 ▲太平記と流布本(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代十三頁)後藤丹治 ▲太平記の異本(「日本文學講座」第二太平記研究八頁)魚澄惣五郎 ▲太平記古寫本(「史學雜誌」十編一號)重野安繹 ▲太平記諸本に關する研究(「國語教育」一四卷三號)青木長治 ▲太平記と吉野時代の武士(家庭方面よりの觀察…庭訓、女性に對する觀察)(「日本文學聯講」二期九七頁)高木武 ▲自殺の態度に現はれたる武士的精神(自殺と自意識、自殺の手段、殉死)(日本文學聯講」二期九三頁太平記と吉野時代の武士)高木武 ▲禪と太平記(「想苑」二ノ三)豐田八十代 ▲太平記にあらはれたる復古思想、道德思想、政治論、戀愛觀、世相觀、佛法の靈驗、神祇思想、尊皇思想(「日本文學講座」室町時代太平記研究)魚澄惣五郎 ▲太平記の主想(「日本文學論纂」)尾上八郎 ▲太平記の詩的價值(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代)後藤丹治 ▲太平記は史學に益なし(「史學雜誌」二卷一七、一八、二〇、二一、二二號)久米邦武 ▲太平記と南朝の遺跡(「文章世界」五卷一四號)田山花袋 ▲太平記と新田義貞(「國學院雜誌」一〇卷五號)本四生 ▲太平記より見たる新田義貞公(「國學院雜誌」昭和八年五月)藤澤親雄 ▲太平記と高時天狗舞の傳說(「日本演劇の起源」一四八頁)吳文炳 ▲太平記「阿新殿の事」中循房傳說に就いて(「史苑」一卷四號)[illegible] ▲難太平記(「群書類從」合戰部所收) 今川了俊 ▲現存太平記は圖本か(「東亞の光」一一卷七號)高木武 ▲太平記の[illegible]遺漏多き事を[illegible]す(「史學會雜誌」一卷三號四號)菅政友 ▲太平記は小說家の作にあらざる說(「文」一卷二二號)內藤耻叟 ▲太平記云々の內藤耻叟の說を辨す(「文」一卷廿四號)星野恒 ▲讀太平記非小說家說(「文」一卷二五號、「文」二卷四號)畢山外史 ▲太平記註釋補說(「太平記正解」所載) 萩野由之校補、國文學會編 ▲太平記は小說か非なるか(「史海」二一九號)鈴木成章 ▲太平記評論 鈴木忠次郎 ▲太平記の書法について(「國學と國文學」三卷一〇號)小山朝丸 ▲太平記の讀者圈(「日本文學講座」太平記研究七頁)魚澄惣五郎 ▲後世に於ける太平記の愛讀者(「日本文學講座」太平記研究一三頁)魚澄惣五郎 ▲太平記の後の文學に及ぼす力—謠曲、幸若舞—(「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代一七頁)後藤丹治 ▲太平記の影響(謠曲、舞の本、淨瑠璃、お伽草子、浮世草子、八文字屋本、草子類等」(「日本文學大辭典」) ▲太平記の出典(庭訓往來、太平記、寶物集、法然上人行狀圖會)(「日本文學」岩波講座日本文學書目解題室町時代二〇頁)後藤丹治 ▲太平記註釋書(「日本文學」岩波講座日本文學書目解題室町時代二〇頁)後藤丹治

▲太平記鈔（四〇卷）〔慶長頃要法寺板の一として古活字を以つて刊行〕世雄房日性（「國文註釋全書」所收）▲太平記解題（「史學界」一卷四號）▲太平記賢愚抄〔天文十二年十月完成、慶長十二年頃印行江洲の住僧乾三、太平記鈔と共に類書中秀でてゐる。〕（「國文註釋全書」所收）▲太平記解題〔太平記註釋〕上卷（「國文學會編」）▲太平記綱要參考（四〇卷）內閣文庫圖書目錄による。▲太平記理盡抄（十卷）▲太平記評判秘傳理盡抄（四〇卷）▲太平記評判私要理盡無極鈔（五〇卷）和田助則 ▲太平記年表（四卷）（「國文註釋全書」所收）河原貞賴 ▲太平記大全（五〇卷）西道智 ▲太平記解題（「日本文學大系」第十七卷所收）尾上八郎 ▲太平記考（「日本文學論纂」）高木武 ▲太平記圖經（五卷）▲太平記詳解 三木五百枝、大塚彥太郎 ▲太平記註釋（「國文學會編」）、萩野由之 ▲太平記新釋 石田吉貞 ▲太平紀綱目 原友幹 ▲太平記頭書（四一卷）▲太平記系圖（「國文註釋全書」所收）▲太平記聞書（四〇卷）▲太平記讀について（「國語教育」六卷六號）青木辰治 ▲太平記讀本に關する研究（「國語教育」昭和四年四月）靑木辰治 ▲中世文學の一觀點〔太平記讀について考察あり〕（歷史と國文學」四卷五號）藤田德太郎 ▲太平記讀について（「國語と國文學」中世文學號八卷十號）龜田純一郎 ▲太平記の談義僧、物語僧（「日本文學」岩波講座日本文學書目解說室町時代一七頁）後藤丹治 ▲講談の變遷（「慧星」、四卷一〇號）江山有助

第五章　物語・說話・お伽草子

中世に於て、平安朝物語の系統を追うて創作せられた物語は、その構想に於て、大體平安朝式貴族の社會を取扱つて居るが、その中に武家時代の風尙も無意識に取入れられ、又それが主要契機とさへなつて居るものがある。畢竟、王朝文學の模倣を志しはするものゝ、作者の環境や世態が既に王朝のそれでないために、たゞ前代作品の筋や文章技巧の模倣となつたもので、作品としては高い評價に堪えるものは無い。殊に讀者層が下流に向つて廣がつてゆく時代である爲に、文章の技巧も、構想も、一段と平凡化し通俗化しようとする傾向のあるのは、自然の勢である。我々はこれ等の一群の作品を擬古物語としてながめて、王朝物語と比較對照して、中世物語の特色を看取すべきであらう。

又室町時代に到ると、所謂お伽草子と稱せられる作品が多く出現した。讀者は、新興庶民階級や武家階級での文學愛好者であり、作者は多くは不明である。これは繪卷物文學の系統のものより發達したものらしく、多くの古寫本は皆美しい挿畫を多く入れたものである。從つて、文章は、諸本大ていは多少の相違があつて、異同を校合する事は不可能といふ狀態である。このお伽草子は、室町文學の一特色を示すものとして、大いに研究する價値がある。以上の二系統の諸書について、先づ一般的な參考書をあげて、然る後、個々の作品について述べよう。

◇一般的參考書

▲古物語類字抄　黑川春村　▲古物語目錄　神宮文庫　▲物語文學批評の黎明時代（「國語國文の研究」昭和四年三月、四月）荒木良雄　▲物語書名寄　做帝雜誌　▲物語書目備考　伴直方　▲古物語名寄類韻（帝國圖書館藏）横山由清　▲古物語（一部に物語草子あり）畠山健　▲古代小說史　長谷川福平　▲鎌倉時代　擬古物語の性質、擬古文學と實生活（「文學に現はれたる我が國民思想の研究」武士文學時代）津田左右吉　▲鎌倉時代の擬古物語（日本文學史概說鎌倉室町時代）（「日本文學」）齋藤清衞　▲近古小說新纂（第一輯）島津久基　▲鎌倉時代の小說（「日本文學」）野村八良　▲鎌倉時代物語の特性（七夕物語）（「國文學史」昭和六年八月）藤田徳太郎　▲擬古物語（「鎌倉時代國文學史新講」上）次田潤　▲室町時代小說集　平出鏗二郎　▲近古小說解題　平出鏗二郎　▲物語の文學に於ける效力及び口上演說（「能樂」七卷七號）久米邦武　▲室町小說に於ける形態的諸相、本地物、傳說物、兒物語、女物語、遁世物等（「日本文學」岩波講座日本小說の展開）鈴木敏也　▲お伽草子研究（「日本文學講座」—研究概說、傳記小說、戀愛小說、靈驗小說、童話小說）佐成謙太郎　▲御伽草子の世界と其理念（「鹿兒島日本文學」昭和八年二月）原田芳起　▲御伽草子（「日本文學大辭典」）　▲お伽草子の一考察（「古代研究」國文學篇）折口信夫　▲お伽草紙の語法（附、室町時代短篇小說）（「國語國文の研究」三十三號、三十四號）小山朝丸　▲御伽草子篇考（「國語と國文學」中世文學號）島津久基　▲御伽草子の本地型について（「國語研究」昭和八年三月）北村公佐　▲室町時代（「日本文學書目解說」（「日本文學」）後藤丹治　▲お伽草子解題（「國文大系」第十九卷）尾上八郎　▲下行横流の時代（「日本小說の展開」日本文學岩波文庫）鈴木敏也

◇物語文學

住吉物語　一卷　類型的な繼子いぢめ物語で、落窪物語の摸倣と見られる。枕草子、源氏物語螢の卷、今物語、八雲御抄等に出てゐる住吉物語と室町時代の住吉物語とは異るらしい。流

布本の代表は、群書類從物語部に收められたもので、他に日本文學全書、有朋堂文庫、校註日本文學大系、國文叢書、國文大觀古典全集等にも大抵流布本が收められてゐる。異本にくわしい記述のものと、簡單なものがあり、其の數も多く、隨つて作成年代も容易に決定されないが、黑川春村の說を大體野村八良氏も肯定して承久頃と見てゐる。御伽草子の形態を有するものもある恩賜京都博物館藏の卷子本三卷のすみよし物語（岩崎家藏本國華三二〇號所載）はそれである。擬古の物語の作風を摸し乍らも主從關係を重んじ、勸善懲惡、念佛信仰等の新彩があつて、時代精神の現れを見出し得るのであるが、室町時代になつて「秋月物語」は明らかに此の書の影響を受けた作品だといふことが出來よう。

▲住吉物語の一異本（「流布本との比較研究」）（「藝文」第十六卷六號）野村八良　▲住吉物語（「鎌倉時代文學新論」三四頁）野村八良　▲住吉物語の研究（「月刊日本文學」昭和七年五月）新名登　▲住吉物語の話（「心のはな」）井上通泰　▲住吉物語に關する研究（「藝文」第廿二年第一號、第二號）淸水泰　▲住吉物語の形態に關する研究（「日本文學」岩波講座）西下經一　▲住吉物語（「日本文學大辭典」）　▲住吉物語通釋　宮崎博道　▲住吉物語詳解　淺井峯治　▲住吉物語の古本について　土居光知

松浦宮物語　一卷　續群書類從物語部（五百二一卷）構想にひどくこみ入つた所はなく、性格描寫といふ點などにも力が入つてゐない。文章は平明である。此等から考へても平安朝の物語の構想から一步も出ることが出來なかつたのは、短篇小說發生初期の創作の大勢が停頓してゐた時をあらはしてゐる。

石淸水物語　正三位物語とも、岩淸水とも。續々群書類從歌文部、日本文學大系所收。作成年代は文永八年以前（風葉集にこの物語中の歌がある故に撰集出來上り以前）であらう。恐らく寬治元年以後（これ以後大番の任期三月となる）二十五年間の作成であつたであらう。概して擬古的な古雅な文でそれに新語、佛語が混入して居り、源氏物語の明石の卷や若紫に、又更級日記も構想の上で宇都保物語の繪のことも關係あるものと連想される故、物語に通じた縉紳の筆で作つたのであらう。

山路の露　一卷　續群書類從物語部五百十卷に收められてゐる。この物語は、その冒頭に「これはかの光源氏の御末の子に、かほる大將ときこえし御あたりのことなれば、そのつづきめいたることそ、いとかたはらいたうつゝましけれど、ゆめ〳〵さには侍らず…。」とある如く源氏物語の結尾「夢の浮橋」の卷を承けついで後人が書いたものである。作者は藤原伊行と傳へられて居るが、風葉集に一首の歌も見えないところから、其作成年代が文永八年以後と推察されてゐるのである。然れば作者は伊行であり得ぬことになる。而して源氏小鏡（花山院長親）に此の物語の名が出てゐるので、吉野朝以前の作であることも考へられる。文章は、優麗で中古文に接するやうな感じがする。

小夜ごろも　室町時代の作と見られてゐる。不自然な結婚生

活に、榮譽を覗ふ異母の虐待と、道ならぬ戀を遂げようとする僕のたくらみに、相對するに貞淑を以つて姫に仕ふる僕の妻の庇護を以てし、遂に地位を忘れて契つた初戀の二人（兵部郷宮と山里の姫君）が結婚して家運繁榮するさまを描き出してゐる。

取りかへばや物語　四卷　「日本文學全書」第四編、國文大觀所收、風葉集、無名草子に「とりかへばや」及び「今とりかへばや」の二種の名がある。今の物語は二者の何れであるかが問題であるが山岡浚明は「今とりかへばや」だといひ、黒川春村は賛成せず、舊新二つの物語の相混交したものであると見る。

風につれなき物語　一卷　續々群書類從歌文部に收められた風につれなき物語が現存の物語の全部であるが、黒川春村の古物語類字鈔に、「按に、此物語古鈔本一卷、新宮侯所藏本、近曾刻成て、丹鶴叢書中に收められたり。卷中の歌廿四首あるを、風葉に合せみるに、其あふものは只五首なり。此に據て考ふるに、全部十卷ばかりなりしが、第一卷のみ殘れるものと見えたり」とある。十卷といふ分量は何を據としたのかはつきりと考へられぬが、現存の筋だけではその發展は分らないのである。語法から見て作成年代が鎌倉期の物と見られてゐる。作者は何人か分らないが古文學に造詣の深い人らしいとは察せられるのである。

無名草子　一卷　八十三歳の老尼がある家に宿つて隣に集つた女房と源氏物語その他の物語、勅撰集、家集、女流作者等を品定めしたものである。作者は、俊成の女京極局の筆か、京極局の作に托して俊成が作つたものか明かにされない。又作年代も藤岡作太郎は鎌倉時代初期の作と見てゐるが、山岸徳平氏は建久の末年か遅くも正治の初代になつたと見てゐるが、應永頃になつたと大田潤氏は國文學史新講上で述べて居る。

▲無名草紙考「國語國文の研究」第三十五號—第三十八號　杉山穀一郎

秋津島物語　一卷　歴史物語。

▲私が最近に見た秋津島物語「藝文」十七卷六號　後藤丹治

唐鏡　一卷　作者未詳。大和物語の系統の唐物語と、歴史物語の代表大鏡との兩者の影響を受けて出來たものである。

唐物語　一卷又は二卷　作者未詳　支那説話を翻譯したもので、二十七篇より成る。

小夜の寢覺　一卷　一條兼良作。

つるぎのまき　三卷　由來小説。

中書王物語　一卷　傳一條兼良作、歴史小説、後醍醐天皇の一宮尊良親王と御息所今出川公顯の女との物語、幸若舞曲「新曲」と同材である。

松帆浦物語　兒物語。作成年代は室町幕府時代中頃のもの。

轉寢草紙　一卷　戀物語、室町中期の作、一位局の自作か。

まんじゆのまへ　三卷三册　甲子立身説話、[illegible]、武勇傳説、勸懲小説、室町末期の作。

つきみつの草子　繼子物語、[illegible]物語　[illegible]卷　室町末期作。

かくれざと 童話的寓話譚、擬軍記物、異類物、福神物、祝儀物、單純なお伽草子系のもの。平和な福神の戰爭。天正十四年以後作成。

笹子落の草子 お伽草子風の物語、作者不詳、年代不詳。

ほうらい物語 二卷 綺詞風の祝儀物の祝言文學、浦島式神仙譚、漂流譚說話、仙鄕淹留說話。

梵天國 英雄說話。

寶滿長者 佛教に關する物語。

蓴露々の草子 佛教に關する物語。

賴朝の最後 一卷 慶長頃の作と思はれる。

牛若みやこばなし (おにいち法眼とも) 御伽草子風の文體であつて、淨瑠璃十二段草子の影響をここに見出す。作成年代は室町中期とすべきである。

ふせやの物語 落窪、住吉、朝顏の露の宮の如き繼子物型戀愛譚、住吉明神靈驗譚、如無僧都型傳說。落窪物語の後を承けた此の物語は美人くらべに影響し更らに朝顏の露の宮、秋月物語、花より姬等にそれぞれ多大な影響を與へてゐる。

▲ふせやの物語について(「國學院雜誌」昭和四年四月號)桑田忠親

松風村雨 三卷 謠曲の松風と同樣の內容を持つ物語。

◇說話文學

宇治拾遺物語 十五卷 宇治大納言隆國が編錄したものとの說もあつたが誤りと見るべきで、今昔物語を摸して說話を集錄したもので、百九十六段の中八十餘段は既に今昔物語の說話の重複であり、文體も相似通ふたものがある。恐らくは鎌倉時代の人の作と見るのが正しく、建保年間に成るものと佐藤誠實氏は宇治拾遺物語考(史學雜誌一二卷第二號)に述べてゐる。

▲宇治拾遺物語新釋(一冊)中島悅治 ▲宇治大納言物語に就て(「日本文學講座」七)藤田德太郎 ▲宇治拾遺物語(「增補鎌倉時代文學新論」)野村八良 ▲宇治拾遺物語書誌的硏究(「國史と國文學」昭和七年十月)小川壽一

古事談 六卷 源顯兼 建曆二年以後建保三年以前に成る。佛教關係の超自然な說話及滑稽な說話を多分に持つてゐる。その內容を見ると王道、后宮篇、臣節篇、僧行篇、勇士篇、神社、佛事篇、亭宅、諸道篇等である。而して其の記事の時代は平安時代から鎌倉初期に屬してゐる。

▲古事談及び續古事談(「鎌倉時代文學新論」)野村八良 ▲古事談(「鎌倉時代國文學史新講」上)次田潤 ▲古事談考證 岸本由豆流 ▲古事談攷證 岡本保孝 ▲古事談(「日本演劇の起源」)吳文炳 ▲古事談・續古事談(「日本小說の展開」日本文學)鈴木敏也 ▲古事談略述(「日本文學講座」第二) 沼澤龍雄

續古事談 六卷 著者未詳(「群書類從」所收)王道后宮篇、臣節篇、神社佛寺篇、諸道篇、漢朝篇。建保七年卯月に記す由の卷末の文で其以前の製作であることが分る。

▲續古事談(「鎌倉時代國文學史新講」上)次田潤 ▲續古事談

(「日本文學講座」第二)沼澤龍雄

今物語　一卷　藤原信實著、貞永延應以後の作とされてゐる。(群書類從所收)仁和寺書目では二十七卷あつたらしいが現在は一卷存するばかり。賴政、忠度、實定。定家、家隆、西行等歌人の逸話五十條を集めたもので他集に比し實錄に近い。文章は宇治拾遺に似て流暢。

▲今物語(「鎌倉時代國文學史新講」上)次田潤　▲今物語(「鎌倉時代文學新講」)野村八良　▲今物語(「日本小說の展開」日本文學)鈴木敏也　▲今物語(「日本文學講座」第二)沼澤龍雄

古今著聞集　三十篇二十卷　橘成季　建長六年成る。今昔物語、江談抄に倣ひて我國古今の實話街談を錄しこれを神祇より魚蟲、禽獸に至る三十部門に分ち、教訓の資とする由の自序によつて作成動機と其の内容を知り得る。

▲古今著聞集(「鎌倉時代文學新講」)野村八良　▲古今著聞集(「鎌倉時代國文學史新講」上)次田潤　▲古今著聞集(「日本文學講座」第二)沼澤龍雄　▲古今著聞集、「日本小說の展開」日本文學)橘成季　▲古今著聞集類標　著者不明

十訓抄　三卷　建長四年頃成る。作者は隆國といはれ、橘成季といはれ、菅原爲長といはれ、六波羅二﨟左衞門ともいはれてゐる。その内二﨟左衞門を作者と見るのは屋代弘賢、藤岡繼平等である。題號十箇條の綱目によつて舊談古說で教訓になるべきものを分類載錄してゐる。蓋し教訓書の嚆矢であらう。

▲十訓抄(「日本文學講座」第二)沼澤龍雄　▲十訓集に表れた る藝術と教養(「國漢研究」昭和八年二月)大内義郞　▲十訓抄(「鎌倉時代文學新講」)野村八良　▲十訓抄典故考　岡本保孝　▲十訓抄考　藤岡繼平

唐物語　上下二卷　作者未詳。王子猷以下廿七條の著明なる故事を和文化せるものなり。

▲唐物語(「增補鎌倉時代文化學新論」)野村八良

▲**お伽草子**

お伽草子の刊本等、◇續群書類從本　◇史籍集覽本　◇藤井乙男校訂お伽草子(「有朋堂文庫本」)　◇今泉定介新編お伽草子　◇日本文學大系　第十九卷所、尾上八郎解題　◇吉野由之編新編御伽草子　◇名著文庫通撰お伽草子　関根正直編

秋月物語　一卷　お伽草子　作者不詳　繼子物、戀愛物、作は室町中世。異本として京極大納言物語がある。(文鳳堂雜纂卷一一六雜記)

小式部　一卷　作者不詳　歌物語系統の御伽草子、鬼神感動の歌德說話、室町中期の作であらう。

三人法師　二卷、三人懺悔冊子、荒五郞發心記ともいはる。遁世物、懺悔物、室町中期の作と推定され、此の時代の物語り文學の白眉であるといはれる。

四十二の物爭　一卷(和歌ものあらがひ、たけくらべともいふ。作者不詳。しかし作は、室町中期即ち文正、應仁時代より下つた作品ではなからうといはれる。

▲四十二の物爭考證(一卷)山本明清著、文政九年十二月稿、

翌春刊行。

精進魚類物語（魚鳥平家とも）　御伽草子、異類物、擬軍記物、特に平家物語に倣つて精進物と魚類との合戰を戯作したものである。作者は鴉鷺合戰物語と同じく一條兼良作（辨疑書目錄）といはれてゐるが、一説には二條良基か（類聚名物考）といはれてゐるが明かでない。作成年代は鴉鷺合戰物語に「先年精進魚類合戰云々」とある故に鴉鷺合戰物語より以前のものであることが分る。影響としては、鴉鷺合戰をはじめ、草木太平記、鶏鼠物語、かくれざと、河海物語、蟲太平記、魚太平記、草木軍談、賤爪木から德川時代の黃表紙の「竈將軍肝略卷」等まで一の系統をなしてゐる。

鴉鷺合戰物語　別名鴉鷺物語、鴉鷺記、鴉鷺問答　二卷（普通本）、三卷（辨疑書目錄による）作者は一條兼良と傳はる、精進魚類物語と同一作者と見るべきである。作年代は室町時代の享德より文明までの作品と見られてゐる。お伽草子に屬するもので異類物の擬軍記物であるが應仁亂がこの物語構成の重要分子をなしてゐて文中よく世相を見ることが出來る。

辨の草紙　お伽草子、戀愛物の稚兒物語、道與淮后の西國雜記中の歌がある故に文明十八年以後の作と見られてゐる。

▲辨草紙考（「歷史地理」三十七卷一號）平泉澄

天狗の內裏　二卷　お伽草子　英雄譚地獄極樂遍歷說話、室町時代中期以後の作と見、又末期卽ち戰國時代前後の作と思はれる。作者は不詳。蓋し西方極樂主としての大日の信仰などから見て密教系の人の作と見え、又血の池地獄の女人、血盆經の教などからも曹洞派の禪家に關係ある人の手に成つたものと想像されてゐる。

大佛供養物語　お伽草子、佛教法談物、室町時代文明十七年以前の作品、法然上人の高德を讃嘆した物語、作者不明。

幻夢物語　お伽草子　戀愛物、兒物語、復讐譚、平出鏗次郎の藏本によれば、文明十八年四月二日の日附があるので作はそれ以前のこと。作者未詳、たゞ佛道修行者の手になつたものであらう。

狐の草子　お伽草子、（物語草子）、異類物、靈驗譚、怪婚說話、作者未詳。

あきみち（あきみち物語）　お伽草子、復讐譚、復讐精神が如何に極端に形式化し、義務化したかがこの譚で分る。室町中期以後德川期以前の作と見なさる。

富士の人穴草子　お伽草子、英雄譚、地獄極樂遍歷物語、大永七年以前の作には間違ひないが、作者は不明である。

はもち中將　武勇說、勸懲小說、復讐譚、室町末期の作。

大悅物語　お伽草子、祝儀物、孝行話、室町時代末期の作か。

櫻中將（櫻中將物語、小伏見物語、櫻町中將殿物語とも）戀愛遁世物、鎌倉時代の小說の姿形を承け佛教化が著しく、忍音物語、若草物語等と類似な構想をもつてゐるが、室町末世の作と見らるべきもの。

佐伯　お伽草子、觀音、彌勒、勢至の本地物、清水觀音の利

生類譚、遁世物語、嫉妬物語、作者未詳、室町末期の作か。

さよひめ　お伽草子、辨財天の本地物、孝行譚式人身御供說話、梅若型人買說話、法力說話等の型が交へられて居る。作者未詳、作成年代は室町中期以後の作として見てよからう。

小落窪（落窪草子）　お伽草子、繼子物、觀音靈驗談、作者未詳、室町末期作、落窪物語に摸して作つたもの。

今宵の少將物語　お伽草子、戀愛物、異性愛の說話、作者未詳。

小町草紙　お伽草子、歌物語、本地物、佛教に關する物語、室町末期の作。

こほろぎ草子（こほろぎとも）　お伽草子、異類物語、歌物語、室町末期、蟲十五番歌合の原型と思はれる。

あめわかひこ物語（あめわかみこ、たなばたとも）　お伽草子、怪異談、神婚說話で、戀愛談、七夕に關する物語、前半は人身御供、怪婚說話で、後半は遍歷說話を含む求婚神話の異形から成る七夕の由來傳說である。室町末期の作。

◇天稚彥物語の本源（「帝國文學」十六卷十號）野々口精一

玉蟲の草紙　お伽草子、戀愛物の型をとつた異類物語、作成年代は天正十年以前の作だといはれてゐる。

靑葉の笛（仁明天皇物語とも）　お伽草子、音樂（名器說話）で、法華靈驗談、業平物、稚兒物語、神佛譚である。作は室町時代で天正十五年以前と見られてゐる。

柄木櫻　お伽草子、嫉妬物語、遁世物語、石童丸型の哀話で、謠曲「土車」の構想に酷似し、元亨釋書の[illegible]常觀吉野譚の條にも類してゐる。室町季世の作である。

木曾義高物語（志水冠者とも清水物語とも）　お伽草子、英雄譚、武人傳說、室町末期以後の作と見られるもの。

梅津長者物語　二卷　お伽草子、祝儀物、作成年代は室町末期か、德川初期かと兩說に推定されてゐる。

おもかげ物語　お伽草子、繼子物で、童話味を有つた佛教說話物語、戀愛遍歷說話、又本地物として、[illegible]財天女と愛宕明王とを併せての本地物語である。室町末期の作と見られてゐる。

文正草子　お伽草子、出世物語、往時は正月書初の次に草子の讀初にこの草子を讀んだものであつた。

▲文正物語に就いて（「文學」昭和七年四月號）野村八良　▲明暦版「ぶんしやうのさうし」に就いて（「文學」昭和七年六月號）野村八良　▲文正草子の版本に就いて（「書物の趣味」昭和四年一月）[illegible]

付喪神（つくもがみ）　お伽草子、怪異譚、變化物、吉川家[illegible]行が非情草木成佛二卷と同一物としてゐるのを黑川春村も好古小錄で同意してゐる。

鶴の草子　お伽草子怪異譚、怪婚說話、[illegible]田作之助の分類によれば異類物としてある。室町時代の作。

十二段草子　（淨瑠璃十二段、淨瑠璃十二段草子、淨瑠璃姬物語とも）　お伽草子。作者は小野お通といふ說もあるが、誤で未だ明かでない。文安年中創作されたものとの說もあるが、

室町中期以後の作成と思はれる。幸若舞曲「烏帽子折」に淨瑠璃姫の傳說を加へてお伽草子風に綴つたものと思はれる。音樂、文藝を禮讃し、歌道を宗教視する解釋等は室町時代の好尙を示し、一曲が戀愛談でありながら、直截的な愛の感じられないのは室町時代の作品の一時性であらう。

▲十二段草子考（「歌舞音曲考說」二九九頁）高野辰之

猿源氏草子　お伽草子、歌物語、戀愛物。

四十二の物爭（たけくらべ）　奈良の帝東宮にみゆきあり春秋の優劣論のあとで四十二の物爭ひがあつた物語である。源氏物語の影響を多く受け、作成年代は文正應仁頃と見られてゐる。

▲「四十二物諍考證」　山本明淸　文政元年十二月編

十番の物あらそひ　お伽草子、擬歌合物、室町末期の作といはれる。四十二の物爭を模したものであらう。

田村の草紙　お伽草子、英雄譚、怪物退治說話、怪婚說話。室町時代の作品、作者不詳。

立烏帽子（鈴鹿の盜賊とも）　お伽草子。

俵藤太物語（俵藤太草子とも）　お伽草子、武勇物語、怪物退治說話、中に龍女、彌勒の功德が說いてある。作者は未詳、作成年代は室町時代と見られてゐる。

▲唱導文藝の發生と巫覡の生活―俵藤太物語を中心として―（「國學院雜誌」昭和七年四月―十月）高崎正秀

酒顚童子　お伽草子、怪物退治の武勇傳說、住吉、八幡、熊野三社の利生を著しく書いた靈驗物語とも見られる。古今著聞集の卷九に鬼同丸の傳說が出てゐるが、支那の說話の白猿傳が本據であらうと櫻陰腐談上に出てゐる。謠曲「大江山」と同村料で作成年代は室町時代といはれてゐる。

▲酒顚童子傳說の大江山に就いて（「鄕土研究」昭和七年十一月號）淺井正男　▲酒呑童子の生國（「能樂」四卷十號）東軒主人　▲御伽草子鑑賞（酒顚童子に就いて）（「國漢研究」昭和八年三月）原田芳起

さゞれ石　御伽草子、佛教物、藥師の功德を誇張的にしるしてゐる。作者未詳、作成室町時代。

さゝやき竹草子　御伽草子、地名說明說話で、鞍馬僧正ヶ谷鞍馬天狗の由來傳說を書いたもの、作は室町時代。

小敦盛　御伽草子、法談物、釋教物、謠曲「生田敦盛」と同村で、軍記物語の後日譚に孝行物語の混じたもの。室町時代で古淨瑠璃、黃表紙の「こあつもり」、說教節の蓮生物語の段の本據をなすものである。

柿本の系圖　御伽草子、異類物、精進魚類物語の類の一異種のもの。秘事尊重、系圖競べの意識の濃厚な時代を反映してゐる點からでも室町時代の作と思はれる。

木幡ぎつね　御伽草子、怪異譚、怪婚說話、即ち異類中心の戀愛物語。平安時代から存する人間と動物との結婚說話の系統である。

唐糸草紙　御伽草子、孝行譚、靈驗物語、頌德說話。

音なし草紙　御伽草子。

御曹子島わたり　御伽草子、遍歴物語、本地物、千島の國に行つた義經は宮の王女と相通じ、(勇者求婚說話の型)大日の兵法を見る(兵法傳授說話の型)

かざしの姫君　御伽草子、異類戀愛物、草木の精靈(菊花の精)と人間との怪婚說話。

雨やどり(しぐれの緣、しぐれの草紙、しぐれ物語とも)三卷　御伽草子、戀物語、失戀遁世物、清水靈驗譚。

朝顏の露の宮　御伽草子、草花の擬人戀物語で異類物、戀愛物、繼子物型戀愛譚である。

相模川　二卷　御伽草子、作者未詳、作成室町末期か德川初世のもの、謠曲「相模川」と同。

福富草子　御伽草子、童話、滑稽物語。

調度歌合　御伽草子、異類物、擬人歌合物、道具類の十番歌合で、歌道尊信の傾向に伴つて遊戲的の現象である。「魚歌合」「蟲鳥の歌合」と同種であり、他面「化物草紙」及び「付喪神」の器の說話で聯絡がある。

あしびき　五卷　兒物語、大體、佛教に關した說話で如何にして出家の道を辿り、往生を遂げるかを說いた物語である。室町時代初期の作品である。

岩屋の草紙　御伽草子、繼子物、嫁いぢめ物語、戀愛物語。室町末期の作と見られてゐる。落窪、住吉系統のもの、ふせやの物語、秋月物語と同種同系、鉢かつぎ、花よの姬と同巧、嫁合の條は鉢かつぎに似てゐる。

狹衣(さごろものさうしとも)　御伽草子或は鎌倉時代末の作かと見られてゐるが、恐らくは室町時代の作であらう。

阿漕の草子　一卷　御伽草子風の物語、緣起物語、歌物語、貧事譚、兵部少輔俊宗が明德二年阿漕に遊んで里人由內彌次から聞いた所を錄したものである。

判官みやこばなし(鬼一法眼とも)　兵法傳授說話の一つの異つた型で、英雄傳、武人傳說、勇者求婚說話、遁走說話を含んでゐる。室町時代の作成と見るべきである。

物臭太郎　御伽草子、童話、本地物、歌物語、祝儀物、室町時代の作成。

一寸法師　御伽草子、童話、世界的通有說話で拇指太郎型の話である。住吉明神の申子として生れた一寸法師が京に出て鬼ヶ島に至り、鬼退治をすることは遍歴物語であり、出世する間は祝儀物である。室町時代の作成。

和泉式部　御伽草子、歌物語。室町時代の作成。

橫笛草紙　御伽草子、戀愛物。

鞍馬物語　御伽草子、英雄傳、武人傳說。

寶滿長者　御伽草子、佛教法話物。

法妙童子　御伽草子、孝行譚。

佛鬼軍　御伽草子、異類物、擬軍記物、僧一休の作とも傳へられてゐる。

ふくろふ　御伽草子、異類物、戀愛物。

美人くらべ　御伽草子、繼子物、嫁いぢめ物語、岩屋草子と

轍を一にしてゐる。

毘沙門の本地　御伽草子、本地物。遍歴說話、英雄說話、室町時代の作。

秀衡入　御伽草子、英雄譚、武人傳說。

蛤の草紙(蛤はたおりひめとも)　御伽草子、孝行談。

鉢かつぎ　御伽草子、繼子物語、嫁いぢめ物語。

▲お伽草子「鉢かつぎ」の古版について(「國語と國文學」昭和七年十二月號)野村八良

花みつ　御伽草子、繼子物、嫁いぢめ物。

土蜘草子　御伽草子、怪異譚、變化物。

鳥部山物語　御伽草子、戀愛物、兒物語。古物語類字抄では應永から應仁の間の頃の作成であらうと云つてゐる。

七草草子　御伽草子、祝儀物。

二十四孝　御伽草子、孝行談。

猫の草子　御伽草子、寓話、異類物。

のせ猿草子　御伽草子、異類物、戀愛物。

橋姫物語　御伽草子、歌物語。

濱出草紙　御伽草子、祝儀、鎌倉幕府の繁榮と音樂との微妙さを語る短篇である。この筋は幸若舞草子三十六番の一になつて居て蓬萊山と呼ばれて居た。

化物草紙　御伽草子、異類物、怪異譚。

てこぐるま物語　御伽草子、復讐譚。

玉水物語　御伽草子、異類物、(狐、後に化けて姫君に仕へて玉水の前と呼ばる)戀愛物語。

玉蟲の草紙　御伽草紙、異類物、歌物語、擬人の戀愛物語。

硯破　御伽草子、遁世物、發心譚、出典は今昔物語卷十九「依$_{ニ}$小兒$_{一}$破硯侍出家語第九」として出てゐる、此の物語は硯破雙紙又硯碎締詞といふ別名で締詞になつてゐるものがある。

胡蝶　御伽草子、佛教法談物。

浦島太郎　御伽草子、浦島傳說、異類物語、浦島夫婦の天神の本地物語、古傳說の童話化したものである。室町時代の作。

熊野の本地　御伽草子、本地物。

月日の本地　御伽草子、本地物。

貴船の本地　御伽草子、本地物、貴船大明神の緣起、一種の怪婚說話、英雄求婚神話の佛教化した一異性、節分の追儺、五節供の由來の說明が附せられ、地上及地下での遍歷說話を含む。室町末期作。

かざしの姫君　御伽草子、怪異譚、怪婚說話。

伊香物語　御伽草子、歌物語、難題說話、石山觀音の靈驗物語、此の物語の出典は今昔物語「石山觀音爲利$_{レ}$人、付$_{ニ}$和歌末$_{一}$語。」

靈佛一如　御伽草子、寓話、佛敎に關する物語。

梵天國　御伽草子本地物語なかれた遍歷物語、浪漫的の匂ひの高い作品である。

梅津長者物語　御伽草子、祝儀物。

第六章　猿樂・狂言

猿樂は、現在、能樂といはれてゐるが、徳川末迄は猿樂と呼ばれ、幕府がこれを式樂として重んじ、關係者に祿を與へて精進せしめたので、新しい内容なり、發展なりはなかつたが、その技術即ち質の練熟と妙味とは大いに加つて來て、後世、一指も加へることが出來ない迄に結晶して燦たる藝術となつた。徳川以前は、狂言も、田樂も延年も、傀儡も、同じく猿樂の名を以つてよばれてゐたことは、看聞御記・蔭凉軒日録・大乘院寺社雜事記・實隆公記・後法興院日記等を檢べると明らかである。

猿樂は世阿彌自身の言ふところによると、「夫れ申樂延年の事態、其源を尋ぬるに、或は佛在所より起り、或は神代より傳はるといへども、時移り代隔たりぬれば、其風を學ぶ力及びがたし。近頃萬人の玩ぶ所は、推古天皇の御宇に、聖徳太子秦河勝に仰せて、且は天下安全の爲、且は諸人快樂の爲、六十六番の遊宴を成して、申樂と號せしより此方、代々の人、風月の景を假りて、この遊の媒とせり。云々」で、この道を神聖視し、この道を以てすれば神慮も慰められるものと認めてゐる。この道の起源を我國神話時代、高天ヶ原の天岩戸の前で、天鈿女命の舞踊に發するとすれば、神樂は即ち猿樂の源泉である。このやうにみると平安時代のある年、内侍所臨時御神樂に抱腹絶倒の笑を催した猿樂の存在は、神事に明朗さが伴つてゐる國民性であることに思ひあたる。藤原明衡の新猿樂記は平安末期の猿樂一般を知ることが出來る。而して猿樂は、明衡の言を以つてすれば烏滸之技で、大衆の抱腹絶倒が望み得る最大の賞讃であつた。

さて、鎌倉の頃は、咒師猿樂、答舞猿樂があつたが、室町時代義滿の寵遇を得た世阿彌が、その藝術的天才を發揮

して、從來の延年の猿樂、田樂の猿樂、風流、曲舞、小歌、平家、朗詠、等の取るべきを採つて、これに幽玄味を求め乍ら集大成したのである。その父觀阿彌の天稟の才を以て絶妙の技を演じたことは、世阿彌が辭を極めて讃歎したのでも分る。その創作曲數は約三十で(尤もこの調査は、觀阿彌の作といはれる曲數の概數を以つてす)、世阿彌が百八十餘曲、金春禪竹は四十有餘曲。この數を見ても、その質の優れたのを見ても、世阿彌が如何に猿樂の名手であつたかが分る。世阿彌の前に名作なく、世阿彌の後に名作なく、古今獨歩といつても過言ではない。世阿彌の猿樂道に關する著書、所謂世阿彌十六部集を見ると、彼の藝術眼が如何に高く、幽玄の理念が如何に嚴然たる實在であるかを明かに知ることが出來る。

今若し「滑稽味」を含んでゐるか否かを標準として猿樂を見るならば、平安朝期の藤原明衡の著新猿樂記に寫し出された猿樂の傳統は觀阿彌・世阿彌の大成した幽玄の猿樂に繼承されなくて、現在狂言といはれてゐる一團の滑稽を豐富に含んだ藝術に繼承されてゐるといひたい。元來、狂言は猿樂に違ひない。室町時代の文獻を徵すれば明瞭に狂言を猿樂と稱してゐるところを見出す。同一藝能を猿樂といひ狂言といつて、混用したのは室町中期にまで及んでゐる。しかし又この混用の他に、專門家に於ては、この二者は歷然と區別されてゐた。卽ち、世阿彌の申樂談儀によれば、「狂言には大つち、新座のきく上花に入りし者なり」といつて猿樂とはその本質を異にしたものと見てゐる世阿彌の判斷が察せられる。その上、「狂言すべきは、常住にそれになるべし。乾として俄に狂言にならば、思做し大事なるべし。」(同書)といつてゐるのは、明らかに猿樂師が兼ねて狂言を演じてゐることが分り、その頃旣に幽玄の猿樂と滑稽猿樂とが二分されてゐたことも明らかに察しられる。

◇猿樂

▲能樂起源論、能樂の先行藝術、諸社寺の神事について、邦劇の起原、猿樂の先行者伎樂、猿樂は伎樂の末葉、昔猿樂、咒師の猿樂、曲舞（「日本歌謠史」）高野辰之　▲新猿樂記　藤原明衡　▲咒師猿樂物登始事　江談抄第二雜事（群書類從四八六）　▲咒師猿樂考（「國文學誌」昭和八年一月）能勢朝次　▲薪能、開口猿樂、猿樂、散樂、白拍子（「日本文學大辭典」）　▲散更　江次第第八　▲能樂の源流、能樂の生成（遊事、答辯猿樂、開口猿樂、猿樂座と田樂、猿樂藝の展開、新伎散樂等）（「謠曲大觀」）佐成謙太郎　▲謠曲の起源（「謠曲研究」）野々村戒三　▲猿樂傳記（「燕石十種」の內）　▲申樂聞書（「續群書類從」十九遊戲部）　▲猿樂沿革考（「燕石十種」の內）　▲田樂能と猿樂發達概說―並びに狂言發生私見　（「國漢研究」）富田且　▲春日祭の能、白拍子、風流（大風流）の出典（「日本演劇の展開」日本文學、岩波講座）高野辰之　▲風流（「謠曲大觀」）佐成謙太郎　▲風流（「日本歌謠展開」日本文學、岩波講座）藤田德太郎　▲曲舞、猿樂は伎樂の末流か、猿樂座の確立、猿樂と神事、猿樂の隆興等（「日本音樂概論」）伊庭孝　▲曲舞（「日本歌謠展開」日本文學、岩波講座）藤田德太郎　▲曲舞（「日本演劇の展開」日本文學、岩波講座）高野辰之　▲能と曲舞との關係について（「國語と國文學」昭和八年二月）小場瀬新一　▲謠曲と曲舞（「能樂」六卷九號）鈴木暢幸　▲曲舞沿疑（「歌舞音曲考說」）高野辰之　▲謠曲蘭曲三曲讀物につきて（「謠曲研究」日本文學講座）野々村戒三　▲舞正語磨（萬治元年版）　▲散樂の諸藝、村上天皇の御散樂、散樂得業生、猿樂と散樂、能樂發達の經路等、（「日本演劇の起源」）　吳文炳　▲奈良朝の唐散樂（「謠曲界」十八、十九）佐成謙太郎　▲散樂又猿樂の事、白拍子其他舞の事（「歐米音曲樂略史」）小中村清矩　▲能樂に於ける物眞似の藝風（「演劇史研究」演劇史學會編）戸田松三郎　▲日本歌舞の展開、法隆寺緣起白拍子（「日本文學」岩波講座）藤田德太郎　▲白拍子と曲舞（「國語・國文」昭和六年十二月、一月）能勢朝次　▲法隆寺緣起白拍子詞（「宴曲全集」）吉田東伍編　▲平安朝末期の白拍子（「國學院雜誌」昭和八年一月）木内一夫　▲多武峯所傳の延年（「日本歌謠集成」卷五近古篇）　▲伊勢猿樂三座考（「國語國文」昭和八年三月）　伊藤令雄　▲案諸の起源（「能樂古今記」）野々村戒三　▲能樂の源流を尚す（「藝文」第三年）支枝照雄　▲能樂の源流及變遷一斑（「能樂」三卷三號）吉田東伍　▲能の起源（「謠曲評釋」）大和田建樹　▲能と謠の根源　池田信勝

◇「謠曲の[illegible]、曲想」

▲謠曲の曲名（「謠曲研究」日本文學講座）野々村戒三　▲謠曲（「國語國文の研究」同刊號以後）能勢朝次、市川寬　▲謠曲の研究　瀬尾眞太郎　▲謠曲（「歐曲考」）山崎美成　▲謠曲の設（「日本大衆文學」五卷五號）小中村清矩　▲道行の展開（「月刊日本文學」）志田延義　▲道行のみちゆき（「謠曲界」十五卷五號）金澤又次郎　▲室町時代の謠曲（「文學講座」日本文學、岩波

講座)土居光知　▲室町文學の謠曲(「室町文學概說」日本文學
講座)篠川種郞　▲謠曲の構造と敍述(「日本演劇の展開」日本
文學、岩波講座)高野辰之　▲謠曲細說（次第、道行、序段の
歌、クセ、序段の歌、一聲、ロンギ、ワカ、破段、キリ(「謠
曲大觀」)佐成謙太郞　▲謠曲の研究法(「國語と國文學」第六
十二號)佐成謙太郞　▲謠本の符號、題目の異同(「謠曲評釋」)
大和田建樹　▲謠曲作者の技巧に就いて(「謠曲界」十二卷二
號)野々村戒三　▲謠曲を組織したる文段の標準(「能樂」六卷
一號)久米邦武　▲謠曲次第の研究(「謠曲界」十五卷ノ一) 佐
成謙太郞　▲謠曲と小歌(「彗星」一ノ一)野々村戒三　▲謠曲
の詞と謠と歌(「能樂」四卷十一號、十二號)久米邦武　▲謠曲の
構造、謠曲の文章、謠曲の詩材(「日本歌謠史」)高野辰之　▲
序破急の理論、能の主役一人主義(「能の研究と發見」)野上豐
一郞　▲次第は序歌(「能樂」四卷七號)久米邦武　▲序段とそ
の歌(「謠曲界」十五卷五號)佐成謙太郞　▲能の次第、名乘、
道行、着ゼリフ、序段破、一段破、二段、急段、ロンギ、クセ、
サシ、一聲、待謠、舞とワカ、キリ、後ジテの出(「謠曲」日本
文學)佐成謙太郞　▲謠曲の女性(「國語と國文學」二卷四號)
佐成謙太郞　▲謠曲の鬼に就て(「能樂」六卷五號)松尾茂　▲
謠曲の修辭、謠曲の章節、謠曲の構造、謠曲の組織(「謠曲研
究」)野々村戒三　▲謠曲詞章の變遷(「日本歌謠の展開」日本
文學)藤田德太郞　▲謠曲の研究法(「國語と國文學」昭和四年
六月)佐成謙太郞　▲謠曲おしへ歌(「能樂」一卷十七號、二卷
一號)萩迺舍主人　▲謠曲の粉本としての源氏物語梗概(六卷
五號より七卷七號まで)生方敏郞　▲謠曲の出典、謠曲題材、
謠曲引歌考(「謠曲大觀」)佐成謙太郞　▲人身賣買について
(「謠曲界」十二卷五號)赤堀又次郞

〔戯曲としての考察〕

▲能の戯曲的傾向(「能の研究と發見」)野上豐一郞　▲能樂と
歌劇的要素(「日本演劇の起源」)吳文炳　▲能樂と希臘悲劇に
ついて(比較文學「日本文學」岩波講座)阿部次郞　▲謠曲文の
戯曲的解釋(「國文教育」第六卷四號)佐成謙太郞　▲劇藝術と
しての能樂(「日本文學聯講」第二期)佐成謙太郞　▲謠曲の脚
色(「謠曲大觀」) 佐成謙太郞　▲能樂の戯曲的展開 (「謠曲大
觀」)佐成謙太郞　▲元曲との關係(「謠曲大觀」)佐成謙太郞
▲謠曲と元曲 七里重惠　▲謠曲と支那文學(「能樂」六卷十二
號)古城貞吉　▲能樂は我が獨自の藝—元劇と關係なし—(「日
本演劇史の展開」日本文學、岩波講座)高野辰之　▲謠曲の戯
曲性(「近古文學と時代精神」日本文學、岩波講座)高木市之助
▲文致上及關色上より見たる謠曲文(「能樂」四卷一號)坪內逍
遙▲謠曲脚色に就ての一考察(「觀世」昭和五年九月)三品賴直
▲能樂の脚色(「能樂」十七卷八號)佐成謙太郞　▲翁の喜劇精
神(「能研究と發見」)野上豐一郞　附▲翁歌、翁の成立期、翁
の變遷(「日本歌謠史」)高野辰之　▲翁(「日本演劇の展開」日
本文學)高野辰之　▲翁の解(「能樂」一卷八號) 池內信嘉　▲
翁舞(「謠曲大觀」)佐成謙太郞　▲翁概說(「謠曲界」一八卷一

號）佐成謙太郎

〔鑑賞に關するもの〕

▲謠曲の鑑賞（「日本文學講座」）能勢朝次　▲能樂の鑑賞（「國文學誌」昭和六年五月）佐成謙太郎　▲集林子の愛好せし謠曲名文（「謠曲界」十七卷二號）飯田豐　▲謠曲と集林子（「明星」）山崎紫紅

〔宗教哲學方面の考察〕

▲能の遊狂精神（「能の研究と發見」）野上豐一郎　▲複式夢幻能の意義（「謠曲大觀」）佐成謙太郎　▲謠曲の作者は佛教の人生觀を有したるもそは時代の保護宗教たる禪宗の思想にては非ざりき（「日本演劇の起源」）吳文炳　▲謠曲の中心趣味と世阿彌の藝術觀（「早稻田文學」四四卷六二）五十嵐力　▲謠曲の思想（「謠曲研究」日本文學講座）野々村戒三　▲幽玄（「國文教育」五卷五號）佐成謙太郎　▲謠曲にあらはれた草木成佛（「國語と國文學」昭和八年五月）阪口玄章　▲歌道から發展した能樂の幽玄（「歌と評論」昭和七年七月）富田旦　▲歌道の幽玄と世阿彌の幽玄（「潮音」昭和四年十二月、三月）能勢朝次　▲謠曲に於ける神佛思想（「謠曲界」十五卷一號）鈴木暢幸　▲謠曲に於ける神佛混淆思想（「謠曲界」十七卷三號）野村袋川　▲謠曲の宗教趣味（「能樂」五卷一號—三號）久米邦武　▲謠曲の思想（「謠曲大觀」）佐成謙太郎

◇謠曲が及ぼしたる文學方面の影響は幸若舞曲、室町時代の小歌、淨瑠璃歌舞伎、俳諧、川柳、草子、和歌、詩文、俳文、戲文等にあらはれて居る。

▲謠曲と古淨瑠璃（「能樂」五卷九號）山內二郎　▲謠曲の影響（「謠曲大觀」）佐成謙太郎　▲謠曲と古川柳（「柳樽研究」昭和五年九月）佐方流矢　▲能樂と幸若舞（「日本演劇の起源」）吳文炳　▲能樂と俳諧（「筑波」昭和八年一月、三月）齋藤香村　▲謠曲と川柳　安藤、岡田共著

〔流儀〕

▲謠曲の作者、四座一流（「謠曲研究」日本文學講座）野々村戒三　▲四座役者目錄　濱野著、續忠觀世附錄　▲謠曲作者に對する疑義（「觀世」昭和八年三月）野々村戒三　▲猿樂作者、演出者（「日本演劇の展開」日本文學、岩波講座）高野辰之　▲謠の作者（「謠曲評釋」一冊）大和田建樹　▲能本作者注文　高砂增々抄附錄、禪竹集附錄　▲謠曲の作者—觀阿彌、世阿彌、觀世元雅、觀世小次郎、觀世彌次郎、音阿彌、金春禪竹、金春禪鳳、金春善德、外山又五郎吉廣、金剛彌五郎、宮增、日吉安清、近江能、江波左衛門、井阿彌、河上神主、龜阿彌、横尾光久、細川弘源寺、奧江元久、竹田法印宗盛、小田垣能登守、内藤左衛門、三條西實隆、晶叟等—佐成謙太郎　▲大和申樂四座（「謠曲大觀」）佐成謙太郎　▲能樂大和四座考（「日本演劇研究」）高野辰之　▲謠曲の大成者（「謠曲研究」日本文學講座）野々村戒三　▲猿樂の古錄（「日本演劇の展開」日本文學、岩波講座）高野辰之　▲大藝術家としての觀阿彌（「國漢研究」）富田旦　▲觀氏家譜　▲觀阿彌事蹟考　野々村戒三

▲觀阿彌の集成(「謠曲大觀」)佐成謙太郎 ▲觀阿彌、世阿彌事蹟考 野々村戒三 ▲觀世四代事蹟考 野々村戒三 ▲觀世三代考(「國語國文の研究」)市川寛 ▲世阿彌の大成(「謠曲大觀」)佐成謙太郎 ▲世阿彌の生涯、世阿彌の遺著、遺作、年譜(「世阿彌元淸」日本文學、岩波講座)西尾實 ▲世阿彌の事蹟(「能樂古今記」)野々村戒三 ▲觀世三代事蹟考(「文學思想研究」第四)野々村戒三 ▲世阿彌と時代、世阿彌の家系(「世阿彌元淸」)西尾實 ▲世阿彌の幽玄と藝態論(「國語と國文學」八巻八號、九號)西尾實 ▲世阿彌の藝術論に於ける大衆的傾向(「國語と國文學」一巻第六號)西尾實 ▲世阿彌の藝道教育論(「國文教育」第六巻二、三、四、五號) 西尾實 ▲世阿彌の物眞似論(「國語と國文學」昭和六年十月)小澤健雄 ▲世阿彌に於ける心の諸問題(「學藝」五號)能勢朝次 ▲世阿彌と云ふ人(「ほととぎす」十七巻五號—十一號)山崎楽堂 ▲世阿彌雜記(「國文教育」六巻三號、四號)西尾實 ▲謠曲文作者としての世阿彌元淸(「歷史地理」二十八巻五號)横井春野 ▲世阿彌の藝術觀(「新小說」二十六巻四號)安倍能成 ▲世阿彌の所謂花の美について(「歷史と國文學」昭和六年五月)岑岸義秋 ▲十郎元雅の事蹟(「能樂古今記」)野々村戒三 ▲觀世累葉履歷 結崎玄人 ▲音阿彌の事蹟(「能樂古今記」)野々村戒三 ▲音阿彌事蹟考(「觀世三代事蹟考」)野々村戒三 ▲下間少進仲孝の事蹟「(「能樂古今記」)野々村戒三 ▲金春禪竹と歌道(「潮音」一三巻七號一四巻一號、二號)能勢朝次 ▲金春四郎二郎、宇治彌太郎の作といひ傳へられた狂言七十八番(「狂言研究」日本文學研究)林若樹 ▲金春禪竹(「日本文學大辭典」) ▲金春と圓滿井と觀世の服部(「謠曲界」二巻三號)西村紫明 ▲金春禪竹に關する一考察(「國語國文の研究」第三八號)能勢朝次 ▲能樂盛衰記(上下)池内信嘉 ▲能樂史(「日本風俗史講座」)佐成謙太郎 ▲能樂書目「(明治大正出版」)横山楠人 ▲能樂今史 横井春野 ▲謠と能(一巻)大和田建樹 ▲謠曲物語 和田萬吉 ▲謠曲界(大正三年七月創刊) ▲謠增抄(刊一巻)加藤盤斎 ▲謠曲引歌考(「能樂」四巻八號)野村袋川 ▲謠狂言大全(寫本十二巻)松井鶴民 ▲謠秘傳之書 福王宗碩 ▲當流謠秘傳抄(刊一巻) ▲謠の秘書(刊一) ▲謠鈔雜考 齋藤香村 ▲謠古抄 著者不明 ▲謠抄 ▲當流觀世(謠指南抄)刊一巻 ▲謠抄の撰者に關する異說について(「國語と國文學」昭和四年十二月)筧五百里 ▲謠新古二鈔の存在と作者羅山說とを疑ふ「國語國文學」五巻五號、六號)筧五百里 ▲謠曲名所考(「能樂」)明石博高 ▲謠分國記 赤堀又次郎 ▲謠曲名寄いろは部類補遺(「能樂」七巻四號十巻十二號)横山楠人 ▲洋々集(寫三巻)梅若満壽 ▲謠曲拾葉抄(刊二〇) ▲謠曲物語 和田萬吉 ▲謠曲作者考(「日本文學」昭和六年六月)野々村戒三 ▲能樂蘊奥集(五巻)木下微賢 ▲能樂大辭典並附圖 ▲山姥聞抄 寺島潤館

世阿彌十六部集 年來稽古條々(第一編)、物學條々(第二編)、

問答條々（第三編）、神儀（第四編）、奥儀（第五編）、花修（第六編）、別紙口傳（第七編）九次々第、音曲聲出口傳、覺書條々、金島集、曲附書、至花道書、習道書、七十以後口傳、能作書、五音曲條々。

▲花修及五音に就いて（「松井博士古稀記念論文集」）能勢朝次 ▲五音の發見による收穫（「觀世」昭和七年九月）能勢朝次 ▲金島集地名考 ▲音曲玉淵集（五卷寛保三年頃著） ▲擧言集（刊二卷）觀世元賴 ▲音曲惡魔拂（上下合卷）喜多古能 ▲能のしなり（六册）大和田建樹

「前述の外の註釋書」

▲謠曲講義（「むさしの」五卷五號）大和田建樹 ▲謠曲の解釋に就いて（「國漢研究」昭和七年十一月）冨田且 ▲謠曲解釋闕目顯三 ▲謠曲通解（一卷）大和田建樹 ▲謠曲通釋（八卷）大和田建樹 ▲謠曲評解（九卷）（「謠曲通解の增補」）大和田建樹 ▲謠曲選釋（一卷）長連恒 ▲謠曲新釋 豐田八千代 ▲謠曲新評（二卷）（明治二十四年東京三河屋より出版）增田于信 ▲謠曲講義 鈴木暢幸 ▲謠曲文解（二卷）勝間勝一郎編 ▲要石謠曲詳解（一卷）前田夏蔭 ▲古今謠曲解題（一卷）丸岡桂 ▲能樂書目解題（謠抄等について）（「能樂」四卷一號八號）長連恒 ▲奈良土產（貞享四年）作者不詳 ▲奈良土產返答 明治三十六年京都にて檜飜刻。

〔能面について〕

▲能面と世阿彌（「國語と國文學」昭和六年一月）土田杏村 ▲能面創作の心理（「能の研究と發見」）野上豐一郎 ▲伎樂面、舞樂面及び能面 ▲能面（「謠曲大觀」）佐成謙太郎

◇狂言

▲猿樂の能並狂言の事（「歌舞音樂略史」）小中村清矩 ▲狂言（「謠曲大觀」）佐成謙太郎 ▲狂言（「日本音樂概論」）伊庭孝 ▲狂言（「日本演劇の展開」日本文學、岩波文庫）高野辰之 ▲能狂言につきて（「帝國文學」一卷二號、三號）芳賀矢一 ▲能樂と狂言（「解放」七卷四號）野上豐一郎 ▲謠曲狂言の本質（「國語國文學」第三十六號）佐成謙太郎 ▲能狂言の童話的性質（「能樂」七卷五號）吉村八良 ▲能の國語について（「日本文學講座」）佐成謙太郎 ▲同狂言抄（「謠曲界」）廣舟 ▲狂言の特質（「文學にあらはれたる國民思想の研究」）津田左右吉 ▲狂言の成立 石川欽一郎 ▲狂言の構造（「日本演劇史の展開」日本文學）高野辰之

「作者について」

▲玄惠法印作といはれる狂言五十九番（「狂言研究」日本文學）林若樹

「詞章について」

▲狂言記の敬讓の動詞と助動詞（「國語と國文學」昭和六年十月卅號）湯澤幸吉郎 ▲狂言に表はれた口語法（「日本文學」昭和六年六月）田中健三 ▲狂言の文章（「能樂」六卷四號）五十嵐力 ▲夫婦を主題とした狂言（「藝術殿」昭和七年三月）安東常次郎 ▲狂言の詩材（「日本演劇の展開」日本文學）高野辰之

▲狂言研究資料(「國文學誌」昭和六年十月)岩城準太郎 ▲狂言取材考(「藝術殿」昭和六年六月)野々村戒三 ▲狂言能形態論(「國語と國文學」昭和六年十月)笹野堅 ▲田樂申樂狂言能の史的定位に就いて(「演劇史研究」第一書房)瀧田英二 ▲狂言記に見えた文藝の境地(「國學院雜誌」昭和四年一月)市村平 ▲狂言に見えたる室町の風俗(「趣味」)中尾祭瀨 ▲狂言の世相(「日本文學聯講」第二期)野村八良 ▲狂言に反映したる社會(「日本文學文學論」岩波講座)土居光知 ▲狂言の言を巧にする戯(「日本演劇の起源」) 吳文炳 ▲鳴嚮(「日本演劇の起源」)吳文炳 ▲狂言の眞趣(「能樂」)蘆山法師 ▲狂言の趣味の源泉に關する一考(「謠曲界」)鈴木暢幸 ▲狂言の可笑味(「懸葵」)四明老人 ▲をかしくも痛ましき狂言(「國語と國文學」)小柴値一 ▲「をかし」といふ心境に就いて(「國學院雜誌」昭和六年五月)市村平 ▲狂言綺語の文學觀(「國語と國文學」昭和六年五月)坂口玄章 ▲狂言は佛教の悲觀思想を融和す(「日本演劇の起源」)吳文炳 ▲狂言の流派、日本演劇の展開(「日本文學」岩波講座) 高野辰之 ▲和泉流狂言の栞(「能樂」)山脇元清著述、池内信嘉評譯 ▲和泉流小舞謠(「日本文學大辭典」)山脇元清 ▲狂言不審紙(「日本文學大辭典」)大藏虎光 ▲狂言修業起請文(「狂言研究」日本文學講座)林若樹 ▲狂言不審紙(「日本文學大辭典」) ▲狂言記の含める謠物(「能樂」)野村袋川 ▲狂言小歌集(「日本歌謠集成」第五近古篇高野辰之 ▲狂言小歌(「日本歌謠の展開」日本文學岩波講座) 藤田德太郎 ▲狂言の小歌(「日本歌謠史」) 高野辰之 ▲狂言小舞全集(「日本文學大辭典」)野村萬齋 ▲小舞(「日本文學大辭典」) ▲狂言二百番案内(「能樂」)野村袋川 ▲狂言の全集以外の狂言(「能樂」)長谷川福平 ▲狂言拾遺(「能樂」)長谷川福平 ▲狂言評譯(「能樂」)かなぼうしくれがし ▲狂言記梗概「國文學」)水田瑞穗 ▲狂言梗概(「能樂」)くれがし ▲狂言雜記(「文學」第九號)青山唯一 ▲狂言五十番(富山房)上田萬年 ▲狂言研究(「狂言研究」日本文學講座室町時代)林若樹 ▲狂言刊本(「狂言研究」日本文學講座室町時代)林若樹 ▲狂言の寛文本(「狂言研究」日本文學講座)林若樹 ▲狂言元祿十二年版橫本正續拾遺十五册「狂言記」「狂言研究」 日本文學講座室町時代)林若樹 ▲狂言本の半紙本(「狂言研究」日本文學講座室町時代)林若樹 ▲狂言記の刊本 (「日本文學大辭典」) ▲狂言集成(春陽堂)野々村戒三、安藤常次郎 ▲鷺流の狂言本(「謠曲界」十七卷三號)佐成謙太郎 ▲謠曲狂言と室町時代(「月刊日本文學」昭和七年六月)安藤常次郎 ▲狂言に見えたる室町の風俗(「趣味」一卷一號)中尾祭瀨 ▲狂言中に見えたる玩具(「謠曲界」十五卷一號)林若樹 ▲狂言の竹生島詣(「謠曲界」十七卷一號)惡太郎 ▲壬生狂言(「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座)藤田德太郎 ▲壬生狂言源流考(「國語國文の研究」)吉澤義則 ▲壬生狂言の一瞥(「上方」 昭和七年六月)江馬務 ▲壬生狂言稿取の型(「上方」 昭和七年五月)小寺融吉 ▲壬生狂言の起源と發達 (「民俗藝術」昭和七年八

月）小寺融吉　▲初期かぶきと狂言の交渉について（「國語と國文學」昭和六年八月）瀧田英二　▲早歌と隆達小歌と狂言小歌との關係（「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座）藤田德太郎　▲三番叟（「日本文學大辭典」）

第七章　延年・幸若・田樂

延年は寺院の佛會の後、遊宴に際して催したもので、遐齡延年の略稱といはれてゐる。玉葉、明月記にその催された記事が見え、演技種目等は東大寺要錄、續要錄、三會定一記、園城寺傳記、圓光大師傳、東鑑、荒曆、春日御詣記東院每日雜々記、教言卿記、滿濟准后日記、大乘院寺社雜事記、實隆雜記等によつて知ることが出來、後世のものではあるが興福寺延年舞式（元文四年三月張行の次第、歌詞は康正年間使用のもの、日本歌謠集成卷五）によつて延年の式次第を知り、延年の歌曲の種類と性質をも之で知ることが出來る。延年は遊宴の歌舞として發展したもので、舞謠演劇として、田樂猿樂に影響した藝術として、充分の研究をとげらるべきものである。儀式として一定の形式にはまり後來はその形式のまゝを踏襲した形迹があるので、舞謠、演劇に用ひられたる歌謠、戲曲（これは延年では連事又は風流の形をもつてゐる）は、後の田樂の能、猿樂の能の如き花々しい自由な優秀な作品を出す如き發展はしなかつた。この爲に、田樂、猿樂にその勢力を奪はれて、室町時代永享の頃には、奈良一乘院からその道の僧侶を召出して演じさせなければ見られぬものになつて居た（大乘院寺社雜事記）。故に將軍の奈良下向の折には珍らしい遊宴の催物であつた。

延年の歌詞としては、康正年中興福寺の僧光胤の作である興福寺延年舞式の歌詞、天文十三年實暉の記錄した連事十三篇、開口篇、大風流廿四篇、小風流十五篇、三井寺所傳園城寺傳記開口十篇、正應四年より正安二年清暑閣伊の

作等がある(「日本歌謠集成」卷五、「日本歌謠の展開」藤田德太郎三七頁)。この開口なり・連事なり、風流なりの分量も謠曲、狂言に比すると、甚だ僅少で、且つその演ぜられた場所が、南都北嶺、多武峯などに大體限られたやうな觀を見、その衰滅の狀もそれらの社寺の記錄で分明するやうな氣がする。その外、仁平寺、中尊寺、嚴島、日光山等では江戶末期までは行はれたものである。

僧侶間に發達した歌謠は大體宗教的色彩を帶びてゐるが、教儀の拘束を脫して藝術的表現の自由を得た時に、思ひがけない美果を産することがある。前述の延年の劇もさるものながら、叡山にその源を發して武人に歡迎された幸若舞曲も確に、僧堂に生立つた異樣な花であつた。

創始者は桃井播磨守直常の孫直詮で、幼名が幸若丸であつたので斯樣に名づけられたといふのが通說である。

幸若舞は又舞舞といはれ、その詞曲は舞の本と呼ばれてゐる。その舞は素襖烏帽子の姿で簡單な舞働によつて演ぜられ、姿を見る藝術でなくて、語られる筋を味はふ藝術で、語り物としての重要性を多分に持つてゐると見るべきである。

田樂は、民間で農耕の際に祈豐穰又は遊樂のため取行はれた藝能であらう。堀河天皇永長の頃「不知所其起、初自閭里、及於公卿」とあつて、旣に平安朝の中期には之が京都で享樂の行事になり、上下相擧つて之に關係する盛大な有樣であつた。田舞、田歌とその發生點は同じく農耕の行事中にあるのである。初夏の田の植付が農家最大の行事であつたので、豐作を祈禱りつゝ、勞苦を慰め、作業をたのしむといふ動機から發して咒法、藝能の二部を相聯ねて發達してきたものと考へられる。宗教と藝術(音樂・歌謠・舞踊)と不離依存の關係をこの田樂の中に於ても見ることが出來る。

京都市中で行はれた田楽は、榮華物語御裳着の巻にもあるが、最もよく盛大な光景を知り得るものは洛陽田楽記である。高足、一足、腰鼓、銅鈸子、編木（ビンザサラ）を所持し、打鳴し、藝を見せ、又、頽女・田女等跳梁舞踊し、「日夜絶へることなく」「一城の人皆狂へるが如し」といふが如き喧騒の様を呈し、「其裝束善盡二美麗一、以二錦繍一爲レ衣、以二金銀一爲レ餝、富者傾二産業一」といふ狂氣振りであるが、公卿之に加はり、僧侶も出揃し、検非違使は市中の治安の任にあたり乍ら、この尋常ならぬ常規を逸した藝を制しないのみか、その行列の先頭をなしてゐる。その間に陵王、抜頭の舞があり、物眞似が演ぜられてゐる。

斯様な田楽は、鎌倉以後田楽師と稱する專門家の手に歸し、高足・一足・刀玉等の曲藝に加ふるに歌舞の要素をも演じ、更に進んでは戯曲的な田楽の能を生み出すに到つた。

室町時代には犬王、道阿、喜阿、増阿等の名手を出し、これが観阿、世阿によつて猿楽能にその精華を摂取せられて後に衰微はしたが、猿楽能大成は、進歩した田楽の藝能即ち歌劇が存在したことに據るのである。後花園天皇の文安年間住心院で行はれた盛大な本座の田楽は、往時の繁昌の面影とも見るべきもので、文安以前の新座本座田楽の隆盛を察することが出來る。

文學的に見るべきことは、田楽歌劇即ち田楽の能の詞章の發達で、當時流行の歌謡が取入れられ、やがては田楽の歌謡が固定して、その歌謡の流布が考へられるやうになつた。

室町末期　田楽僧が小歌の名手であつたことも、田楽が衰微して團體を結成して大きい演出をし得ず、わづかに餘喘を保つてゐる有様と見ることが出來る。

田楽能の詞章は後の猿楽・狂言の詞章と同巧のもので、勞日の春萌門の曲、さざ波の曲、北野物狂の曲、尺八の曲、

書寫の能、小野小町の能、あつもりの能、關原與一の能、菊水、合浦、二星、夜念佛能、源氏能等である。その中大部分は名前のみ存するものであるが、中には歌謠も猶存して吾々の考察の資料となるものもある。概して、謡曲に比して歌曲の構想は簡單であり、行文は單調、素樸で、清婉、幽玄の氣は遠く世阿彌の猿樂に及ばないものである。

〔一〕延年

▲延年、舞式、傳統等（「日本歌謠の展開」日本文學岩波講座三六頁）藤田德太郎　▲延年の名義、諸大寺と延年、遊君と延年、舞風、曲趣、延年舞の舞臺、延年舞曲、舞臺延年舞式、延年劇歌等（「日本歌謠史」）高野辰之　▲延年舞曆應の記事、延年の白拍子、延年の風流、延年舞の連事等（「日本演劇の展開」日本文學、岩波講座）高野辰之　▲延年舞の詞及び歌（「鎌倉時代文學新論」三八九頁）野村八良　▲延年の能と猿樂の猿（「歌舞音曲考說」一七五頁）高野辰之　▲延年と田樂、舞臺、伴奏等（「日本音樂概論」七〇二頁）伊庭孝　▲毛越寺の延年舞（「民俗藝術」昭和七年六月）北野、本田、西角井　▲延年舞と能樂、南北朝以後の延年、延年と露拂、延年の藝の種類等（「日本演劇の起源」）吳文炳▲延年次第註（「文學」昭和八年四月）高野辰之　▲延年舞考證　黑川春村

〔二〕幸若

▲幸若舞曲概說、傳統、能との關係と差異、曲節の種類、隆替、曲舞の亞流等（「日本歌謠史」五八三頁）高野辰之　▲幸若舞曲、幸若舞曲と先行藝との關係、隆替、創始者、幸若舞曲の文獻（「日本文學講座」幸若舞曲の研究）高野辰之　▲幸若舞曲（「歌舞音曲考說」一二三頁）高野辰之　▲日本演劇の研究、高野辰之　▲幸若（「歌舞音樂略史」日本音樂概論七六九頁）小中村清矩　▲幸若と舞々　伊庭孝　▲幸若舞曲考（「歷史地理」一ノ五）須藤求馬　▲幸若舞の由來と本質（「文學に表はれたる我國民思想の研究」武士文學時代）津田左右吉　▲幸若八郎九郎家系圖（「日本文學大辭典」）　▲幸若系圖　▲幸若の曾我物（「國語と國文學」昭和八年四月）島津久基　▲幸若舞曲の特有物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲の平治物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲の平曲物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲の判官物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲の曾我物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲の太平記物（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若の舞技と幸若の舞曲につきて（「日本文學講座」幸若舞曲研究）高野辰之　▲幸若舞曲歌謠（「日本歌謠集成」卷五近古篇）高野辰之編　▲近古小說新纂　島津久基　▲幸若の沿革を知

る文獻(「平家物語」太平記、[illegible]、[illegible]日記、[illegible]
商人物志、大日本史料、武林錄、兵家茶話卷十一、[illegible]記、
族術問答等)▲幸若辨疑(「謠曲界」大正十四年十一月號)西村
紫明 ▲幸若を見る聽く(「謠曲界」大正十四年十一月號)西村
紫明 ▲幸若舞曲(「國學院雜誌」大正十五年一月號)高野辰之
▲樂師の歌謠(「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座七六頁)
藤田德太郎 ▲幸若は音曲のみにして舞踊せしものにはあらざる
の辨(「歷史地理」十二卷五號)山田秋甫 ▲幸若の正本(「文學」
昭和七年一月)笹野堅 ▲幸若舞曲所載書 一、舞の本、上田
萬年校訂、二、新曲、新群書類從第八幸田露伴編纂、三、近
代日本文學大系、四、歌謠俳書選集、藤井乙男博士編纂 ▲
舞曲「山中常盤」と戸松(「龍谷大學論叢」昭和五年十二月)岡田
希雄 ▲幸若の「日本記」の所說について(「國語と國文學」昭
和七年六月)湯澤幸吉郎 ▲東勝寺鼠物語と幸若舞の曲名(「國
語國文の研究」二十一號)岡田希雄 ▲舞曲「[illegible]」につ
いて(「國語と國文學」五卷四九號)島津久基 ▲「入鹿」と「大織
冠」(「國語國文の研究」十五號) 長井素枝

〔三〕田樂

▲田樂法師之由來(「史籍集覽」)伊勢貞丈 ▲田樂、散樂、曲
目、種類、勸進田樂、現存田樂、王子田樂等(「日本文學大辭
典」) ▲能樂の生成・田樂(「謠曲大觀」)佐成謙太郎 ▲洛陽田
樂記(「群書類從」三百六十三卷)大江匡房 ▲文安田樂能記
(「群書類從」三百六十三卷)貫意大僧正 ▲田樂史、名義、起
源、種類、曲目、法派、神事と田樂、近世の田樂、現狀、等)
(「歌舞音曲考說」)高野辰之 ▲田樂の起源、番組、伊勢貞丈
の田樂考(「日本古劇の起源」)[illegible] ▲田樂、現存の田樂
田樂の歌詞(「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座)藤田德太
郎 ▲田樂法師、風流寺田樂歌謠(「日本歌謠集成」卷五近古
篇)高野辰之 ▲田樂法師、清水、一遍上人(「日本歌謠史」)高
野辰之 ▲田樂能の歌謠、田樂の種類、盛時、貞和の勸進田
樂、樂の立合、文和の四條の興、炭燒の能、文安の田樂能、
寶曆五年の調査、比擬開口、田樂の現狀等(「日本歌謠史」)高
野辰之 ▲田樂申樂猿樂の能の史的定位に就いて(「演劇史研
究」第一輯)岡田萬二 ▲田樂と田樂の能の事(「歌舞音樂略史」
岩波文庫一〇一頁)小中村清矩 ▲日本演劇の研究(第二輯)
高野辰之 ▲春日大宮若宮御祭禮圖 著者 ▲田樂の記事を
記載せる文獻、[illegible]文書、[illegible]、[illegible]の卷、枕草子、今
昔物語、榮華物語、洛陽田樂記、百練抄、[illegible]記、明月記、
文安田樂記、看聞、[illegible]日記、太平記、伊勢貞丈
田樂考、[illegible]記、[illegible]名所圖會、大内文書、大[illegible]社事
記、[illegible]、[illegible]原[illegible]書、[illegible]書、[illegible]日記、宗五大
草紙、[illegible]、[illegible]、[illegible]九代記 ▲田樂管見(「謠曲
界」大正五年十一月號―大正六年六月號)鈴木暢幸 ▲那智田
樂と王子田樂(「謠曲界」大正十五年十一月號)西村紫明

第八章　佛　教　文　學

佛教文學の範圍を大體定めて見よう。先づ佛教教理弘通の意志を以つて大衆の信仰を期待して現はれた法語、說話的法語はこの範圍の中核をなすものであり、韻文の姿となりて歌謠せられる和讃、伽陀、聲明等の類も中核に屬すべきものである。而してその大部分が佛教家によりて作成せられてゐるが、寶物集の如く佛教信者平康頼によつてなされてゐるものもある。次に日蓮や法然、親鸞などの消息が旣に法話であるものがあり、教理の解釋であるものがある故に、これも佛教文學の重要部を占むべきである。讃佛の和歌は當然この範圍に屬するものながら、五山文學中の詩文の如き些かも佛教教理に關係もないものを佛教文學の範圍に入れることは無理である。しかしてその作者が、當時重要な位地にある宗教家であるから、語錄に論說に、佛教教理を說いてゐる上は、一團の作品を二分して佛教文學の範圍から除外することは困難である。而して禪僧の行動なり、趣味なりは、宗教の一體現であると信じられてゐるからには、全く教理から離れた作品中に、離俗、洒脫の味を感じ得る。この點より佛教家の作品は教理弘通の底意を見出し得ずとも佛教文學てふ語の範圍を擴大して包擁すべきである。

鎌倉時代以來、新宗教が盛に流布されたが、禪宗は幕府、武家等の階級に尊信され、以心傳心教化別傳を以つて宗旨としたがために、俗世からは高踏して一般に教を說くこともなく、民衆に訴ふる類の作品も多く現はれなかつた。時宗、淨土宗、淨土眞宗、日蓮宗は、一遍上人、他阿上人、法然上人、親鸞上人、蓮如上人、日蓮上人等の弘法濟世を第一の事業とした人々の法語は、說話は、消息は、多く俗耳にも理解しやすい文體を以つて作成されてゐる。

大衆を動かす佛教文學の目覺しき展開は鎌倉時代より縷き出し、室町中期には既に新しい展開を見ない有樣になつたといへよう。禪林五山文學は、他の佛教文學と趣きを異にするところがあり、玆には項を別つことにした。

▲佛教文學(「鎌倉時代文學新論」内容、寶物集、撰集抄、發心集、閑居友、法然上人及び親鸞上人の法語、法然上人行狀畫圖の詞書、私聚百因緣集、日蓮上人の遺文、一遍上人及び他阿上人の法語、一遍聖繪の詞書、沙石集及雜談集、眞言傳、三部假名抄、一言芳談等)野村八良　▲佛教文學(「鎌倉時代文學概論」六九頁「日本文學講座」)沼澤龍雄　▲中世文學論に於ける宗教の影響(「國語と國文學」昭和五年三月)荒木良雄　▲鎌倉時代に於ける佛教說話(「國文學史新講」上四三五頁)次田潤　▲中世に於ける佛教的文學概論(「國學院雜誌」昭和四年五月)平岩十四郎　▲鎌倉時代の佛教文學(「日本文學講座」内容、新宗教の興起、法然上人の事業、念佛往生の體驗、親鸞上人の事業、眞宗體驗、道元禪師の事業、禪の内容、日蓮上人の事業、新法華宗の内容、鎌倉佛教文學の代表作品、等)松原致遠　▲鎌倉時代の寺院及び僧徒(「文學に現はれたる我が國民思想の研究」武士文學時代)津田左右吉　▲鎌倉室町時代の文學と宗教との關係(「文學序說」一五一頁)土居光知

◇說話

撰集抄　九卷　作者不詳、西行の作と傳へられてゐる。野村氏は承久以後の作と見る。嵯峨本、續群書類從本、慶安版本とに多少の異同があり、嵯峨本が初稿本と見られてゐる。而して現存本を以つて西行の作とし難きところ多く、後人の加筆が多くされてゐる。續群書類從本に從へば說話數百、道心者の因緣話を記し、後に作者が讚歎の語を附し、或は旅行中遭遇せる事を以つて說話としたる體裁である。群書類從九五三所收。

名著文庫　撰集鈔　芳賀矢一編

寶物集　七卷　平判官康頼入道抄(本朝書籍目錄假名の部に據る)　原作の面目は宮内省圖書寮所藏傳康頼自筆の卷子本(二軸)で窺ふことが出來る(「國文學史新講」上四三六頁次田潤)。この本は古典保存會複製本、續群書類從及大日本佛教全書にも收められてある(同前)。一卷本、二卷本、三卷本、七卷本とあつて野村八良氏はその異同を見てゐる(鎌倉室町文學新講同氏)。其の結構は大鏡風。嵯峨の釋迦堂で一人の聖に三寶、六道、十二門を說かしめることが作者の中心眼目であつて文は流暢ではない。素朴と評する人もある。康頼については東鑑(文治二年、文治四年)、平家物語、源平盛衰記、參考源平盛衰記等によりて知られる。

沙石集　十卷　無住法師著　鎌倉時代弘安六年に成る。その後に加筆した部分もある。全體が卑近な俚耳に入り易い說話を以て、佛教の勝義を說きあかさうと試みたものであつて、佛教文

學中でも最も色彩多様な好著である。京大の長享本　內閣文庫の天文本等古寫本の他に刊本もあり、江戸時代には普くよまれたものである。單行本としては藤井乙男氏校註本がある。

發心集　三卷　（本朝書籍目錄による）現存のもの八卷、鴨長明の作といはれて居るが、後人の增補があつて長明の發心集そのまゝではない。內容は高僧の行狀、遁世者の發心往生の事蹟說話、欣求淨土を敎へ、併せて文藝諸道のことも收めてある。著者發心後の見聞隨筆であるが、著者の中心思想は、「厭離穢土」であり、「欣求淨土」であつた。（大日本佛敎全書、史籍集覽に收む）

▲發心集の內容、發心集と他書との交涉、發心集の文章と語彙（「鎌倉時代文學新論」）野村八良　▲長明發心集考（上、下）（「國語と國文學」昭和八年六月）永積安明　▲鴨長明發心集に就いて（「藝文」昭和五年七月）岡田希雄

閑居友　二卷　作者不明　慈鎭作といふ說、慶政上人作とする說とあり。（續群書類從雜部一〇四所收）收むる話數三十餘項、「眞如親王天竺にわたり給ふ事」、「清海上人の發心の事」、「あやしの入道空也上人南無阿彌陀佛みかはの入道なむあみた佛ととなふる事」「うらみふかき女生ながら鬼になる事」等上卷は僧に關し下卷は凡俗女房等の發心を記してゐる。文章は撰集抄と相似たるもので名文といふ程のものではない。

一言芳談　二卷　作者不明　著作年代は沙石集以後と推定せられてゐる。法然上人、敬佛房、中蓮房、解脫上人等淨土宗高僧の法談要語の小篇を何の秩序もなく收錄したるもの。徒然草に引用せられたるものが數箇所ある故に、兼好も讀んだものであることが首肯せられる。

▲往生要集と中世文學－文學に現はれた淨土敎について－阪口玄章

眞言傳　七卷　僧榮海編　正保三年三浦勘兵衞開板。作成年代は鎌倉時代末葉正中二年六月、この跋文が出來たのだからそれ以前のものである。眞言の先祖の記、陀羅尼及仁王經と天竺、震旦、本朝の事蹟と混じて作つた傳記、傳敎、弘法をはじめ八家の列傳、役の優婆塞を始めとして多くの僧侶の天皇、皇太后等の傳記を列載せるもの、文體は今昔物語の體を取り、國文學史上謠曲「善界」「春日龍神」等の原據とも見做さるべき向があつて其の價値は佚すべからざるものがある。

◇法語

▲法語（「鎌倉時代文學概論」日本文學講座）沼澤龍雄　▲法語の本質（「國語と國文學」三六號）梁木鈴寬　▲鎌倉時代に於ける淨土思想に就いて（「歷史と國文學」昭和八年三月）正村誠道　▲法然上人の法語（「增補鎌倉時代文學概論」三一四頁）野村八良－語燈錄－　▲法然上人行狀畫圖の詞書（舜昌四八卷二三七段）▲法然上人の事業（「鎌倉時代の佛敎文學」八頁）松原致遠▲法然上人勅修御傳まで作る。

◇

○高祖親鸞上人傳　加藤玄智

▲愚禿親鸞(「太陽」一卷三號)大内青巒　▲愚禿親鸞(「大觀」四卷十一號)梅原眞龍　▲親鸞上人(承安三年四月一日京都に生れ、弘長二年十一月廿八日京都五條西洞院に歿す)眞宗開祖　▲親鸞上人の事業(「鎌倉時代の佛教文學」)松原致遠

淨土三經往生文類　一卷　親鸞　建長七年　**尊號眞像銘文**

一念多念證文　一卷　正嘉元年　**唯心抄文意**　一卷　親鸞　正嘉元年　**入出二門偈頌**　親鸞　漢讃七十四行　**淨土文類聚鈔**　一卷　親鸞　建長七年　**親鸞聖人御消息集**　一卷　親鸞が、弟子に與へた書狀　**親鸞聖人門弟交名牒**　**親鸞上人正明傳**　**親鸞上人御因緣祕傳集**　存覺　**親鸞上人繪傳**　覺如　**高田開山親鸞聖人正統傳**　**嘆異抄**

▲歎異鈔についての小さな考察(「層雲」十二卷七號)木戸夢郎

末燈抄　一卷　親鸞が其の門弟に送つた消息集　**愚禿鈔**　二卷　親鸞上人　建長七年　**拾遺古德傳繪詞**　覺如　**口傳鈔**　覺如　**慕歸繪詞**　十卷　慈俊の起草　覺如上人の平日の行狀を寫せるもの。

▲慕歸繪人物考(「眞言各集」所收)性海　▲慕歸繪詞と最須敬重繪詞(「六條學報」大正七年十一月)妻木直良

三寶繪詞　源爲憲　永觀二年仲冬　**父子相迎**　二卷(應永二十六年六月京都にて版行)向阿上人證賢　阿彌陀佛の慈父の救護を讃歎し法悦を記述したもの　**父子相迎要解**　的門　**歸命本朝鈔**　三卷　**西要抄**　二卷。

三部假名鈔　七卷　向阿上人證賢　前述の「父子相迎二卷」「歸命本朝抄三卷」「西要抄二卷」三部七卷を三部假名抄といふ。淨土宗の思想宣説の文としてよきもの、文章優美高尚で普通の假名法語と異つてゐる。伴蒿蹊の評に「凡諸宗の智識の假名法語といふものは、眞名をよまぬ人のために示されし者にて、詞たゞざらず耳ちかきをむねとせしさまにみゆるを、此抄はしからず、これは深きこころなども有ける事にこそなまじいに眞名の文章ならばこれほどの感情はすゝめざらまし、およそやまと人のためにはよきかなの文章ほど、その心をうごかすものはなしとおほえ侍り」「三部抄のうち[illegible]の意をやはらげとかれたるところ〳〵みな譯文の師たるべし。殊に父子相迎のうち[illegible]の偈を引て即譯せられたるところなど[illegible]より出でて[illegible]し」と。

▲三部假名鈔[illegible]　[illegible]　▲三部假名抄[illegible]　向阿證賢　▲六要鈔　存覺(親鸞上人の著書)　▲蓮如上人御文全集　先氏[illegible]　▲蓮如上人法語集(佛教史料叢書)龍谷大學發行　▲蓮如上人御文　[illegible]　龍谷大學發行　▲蓮如歌集　實悟師眞　▲蓮如上人の歌(「懸葵」十五卷十二號)橋川正　▲蓮如上人傳　佐々木芳雄　▲蓮如上人及實悟法師の歌文(「懸葵」十六卷十二號)橋川正　▲[illegible](第十三卷)蓮如上人篇　▲[illegible]より觀たる[illegible]の法語(「禪の研究」昭和五年六月)倉光諦文　▲[illegible]時代に於ける[illegible]と法華宗(「史學雜誌」三十八卷三號)淺野長武　▲日蓮上人の事業(「鎌倉時代の佛教文學」日本文學講座第二)松原致遠　▲日蓮上人の文

章—立正安國論、諸々御振舞書—（「鎌倉時代の佛教文學」日本文學講座第二）松原致遠　▲日蓮上人遺文の假名遺研究（「國語と國文學」昭和五年十二月）山上、泉　▲日蓮上人の遺文—聖愚問答鈔、身延山御書—（「鎌倉時代文學新論」三三一頁）野村八良　▲日蓮宗と眞言宗との關係（「加持世界」二卷一號）鷲津惠仁　▲日蓮の一生（「謠の友」四卷七號）大口禾田　▲日蓮（「文學に現はれたる我國民思想の研究」武士文學時代」津田左右吉　▲詩眼に映じた日蓮（「中央公論」三十六卷三號）高須梅溪　▲日蓮上人の傳記資料　野村八良　▲大日本百科辭典の文　姉崎正治氏執筆　▲法華經行者日蓮　姉崎正治氏執筆　▲日蓮上人註畫讃　沙門日澄　▲元祖蓮公薩埵傳　釋承慧　▲波木殿御書　自傳　▲日蓮上人と日本國（「太陽」八卷九號）高山樗牛

一遍上人の語錄　消息法語約八篇　語錄二卷　和讃、和歌、門人傳說

一遍聖繪　**一遍上人行狀**　**緇白往生傳**　卷上（一遍上人の傳あり）**本朝高僧傳**　卷十五　（一遍上人の傳あり）

▲一遍上人及び他阿上人の法語（「鎌倉時代文學新論」三三八頁）野村八良　▲他阿上人法語八卷—和讃、和歌、消息語百數十行—（「平易の語の中に決定往生の理義を談ず」安永七年刊行）他阿は、歌僧他阿彌陀佛を略しての稱呼で嘉禎三年京都に生れ、元應元年正月二十七日八十三に歿す　▲他阿上人の傳記（「鎌倉時代文學新論」三四〇頁）野村八良

第九章　歌謠（遊宴歌謠及び佛教神事の歌謠）

佛教の法會或は神事に關係して發生した宗教的色彩の濃い歌謠を除いて、遊宴に用ひられて人心を和かにし、遊樂を盛にするための歌謠が鎌倉室町時代に可なり現れた。今樣、早歌、宴曲、小歌、一聲、亂曲、田樂、謠曲、延年、歌曲、隆達節等がそれである。朗詠、催馬樂、東遊歌等は前代から引續いて、樂家・宮廷で盛に謠はれたものであるが、新作とてはなく、たゞ傳習したものをそのまゝ前代の雅趣を受けついで奏するのであるから、樂人・縉紳家間に口傳・祕傳のものとして流統を重んじ神聖視して來た。その爲にそれらは武家階級庶民階級の歌謠とならなかつた。この道を守る保守精神が反つて禍して室町時代には不慮の災害のため傳統を斷つて歌謠の傳はらなくなつたものも多い。樂

統を重んじ、樂曲の俗化流布を恐れ過ぎて、遂に傳統を果さず斷絶する悲運に遭遇したのは、雅樂のあるものと全く相似た運を辿つてゐるのである。このところでは、延年、田樂、猿樂、謠曲、亂曲等は別に考察することにする。

▲遊宴歌謠（「日本歌謠史」三一四頁）高野辰之　▲童言巷歌（「日本歌謠史」三一四頁）高野辰之　▲歌曲考　山崎美成　▲聲曲類纂　齋藤月岑　▲傳承歌謠の一二の變態と民俗（「旅と傳說」昭和七年一月）中山太郎　▲傳承歌謠の一二の變態に就いて（「歌と觀照」昭和七年四月）蒲池正紀　▲公卿の音樂に對する素養（「日本演劇の起源」）吳文炳　▲音樂的文學（「鎌倉時代文學新論」三七九頁）野村八良　▲歌謠叢書　湯朝竹山人　▲歌謠形態の發達（「國文教育」第六卷第五號）藤田德太郎　▲歌謠資料管見（「國學院雜誌」昭和七年三月）安田喜代門　▲巷謠篇（總論）　鹿持雅澄　▲庶民階級の歌謠（「日本歌謠展開」日本文學岩波講座）　藤田德太郎

一　**今樣**　前代から續いて宮廷、高貴の間では歌謠として、神樂歌があり、催馬樂があつたが、俗間に盛に行はれた歌謠は、今樣であつた。

平安時代末期　後白河院の御撰にかゝる梁塵祕抄二十卷は、惜しいことに卷二だけ一卷現存してゐるのであるが、同卷によつて法文歌二百二十首（佛歌二十四首、花嚴經一首、阿含經二首、方等經二首、般若經三首、無量義經一首、普賢經一首、法花經廿八品百十五首、懺法歌一首、涅槃歌三首、極樂歌六首、僧歌十首、雜法文五十首）四句神歌二百四首（神分三十六首、（實卅五首）、佛歌十二首（實十一首）、經歌八首（實七首）、僧歌十二首（實十一首）、靈驗所歌六首（實九首）、雜八十六首（實百二十首））、二句神歌四十九首、神社歌七十二首（「日本歌謠集成」第五卷近古篇所收による）合計五百四十五首を見ることが出來る。その中今樣體の歌謠が主として用ひられたことが分る。

▲改訂梁塵祕抄（明治書院）佐々木信綱　▲梁塵祕抄　國文東方佛教叢書所收（讚歎部、合讚）　▲梁塵祕抄口傳集卷十（「群書類從」三五二）後白河院御撰　▲梁塵後抄　佐々木信綱　▲梁塵祕抄と宴曲集との研究の必要　▲梁塵祕抄歌謠と社會生活に於ける佛教（「文學」昭和七年九月）志田延義　▲日本歌謠の展開（「日本文學」岩波講座）　藤田德太郎　▲日本歌謠集成卷二中古篇　高野辰之編　▲古詠考　伴信友

唯心房集　唯心房寂然の集で、保元の頃出家遁世して天台聲明の道場たる大原の里に隱栖したために、周圍の空氣に薫染されて信仰や冥想が發しては讃ふべき歌詞も今樣となつた。國文東方佛教叢書に收めてある。平安時代末期の本書を掲げる所以は、今樣が鎌倉時代に宗教方面に世間に流布してゐる故を以つてである。

▲今樣（「歌曲考」）（平安物語、東鑑、紫式部日記、續世繼卷六、卷八、古今著聞集卷八、十訓抄十一卷、義經記卷五、枕

玉集、梁塵祕抄口傳抄、布衣記、續古事談、平家物語考證、等引用）山崎美成　▲今樣歌（「日本歌謠史」）高野辰之　▲今樣譜（「日本歌謠集」卷二中古篇）高野辰之編　▲今樣（「日本音樂の概論」六七六頁）伊庭孝　▲今樣は七五調に非ず（「國語と國文學」昭和七年十月）高木市之助　▲新に知られた今樣歌抄に就て（「國語と國文學」第七卷第九號）佐々木信綱　▲今樣の音數律（「國語と國文學」昭和七年十月號）志田延義

中古雜唱集　伴信友が天保六年に編集したもので、平安時代以降室町幕府時代迄の雜唱の收錄である。その歌は祭歌、神歌、神樂歌、田植歌、延年唱歌、今樣、和讃、船歌、童謠、鳥追歌、萬歲祝詞等であるが、その今樣は曾我物語、源平盛衰記、平家物語、婦人養草、古事談、體源抄、梁塵口傳抄、十訓抄、古今著聞集、吾妻鏡、日吉山王利生記等に收められたるものである。

二　朗詠　平安時代から嬉しきにつけ、悲しきにつけ又遊興に際して、當時人心に親しかつた詩句を朗唱したことから源を發し、一つの謠物となつたものである。藤原公任が、當時の貴族官臣がもてはやした和漢古今の秀句を集め、諸家の詩文集中から吟詠に堪へ得るものを選んで上下二卷とした、和漢朗詠集が愛讀せられて以來、朗詠の曲節が固定する傾向をもつて來たと見るべきで、藤原基俊は、公任卿の朗詠集をならひて上下二卷、詩五四七首、和歌二百四首の新撰朗詠集を撰したがこれも朗詠されたものである。大鏡卷八、郢曲相承次第、朗詠由來歌舞品目卷七、源氏物語卷十二、枕草子卷八、古今著聞集卷四、增鏡卷五內野の雪、尺素往來、中右記寬治五年條等にその行はれた記事を見るが、鎌倉室町に入つて明月記承元二年、續世續卷六、源平盛衰記卷廿六、薩戒記應永三十三年、看聞御記、謠曲言繼卿記等の記事によつて御樂に又遊宴に盛に朗唱されたことが分る。

▲朗詠の起源　並にその曲譜（「和漢朗詠集」新釋附記、和漢朗詠集靡考五）金子元臣　▲朗詠（「日本音樂講話」）田邊尙雄　▲朗詠（「日本音樂概論」）伊庭孝　▲朗詠由來　▲郢曲相承次第　▲朗詠今樣催藝の事（「歌舞音樂略史」）小中村淸矩　▲朗詠百首（「群書類從」百七十五首）藤原家隆　▲體源抄　▲吉野樂書　▲和漢朗詠集註　▲朗詠九十首抄　▲朗詠要抄　▲朗詠要集（「以上日本歌謠集成」卷四中世篇）　▲朗詠の引用（「謠曲界」一七卷二號）野々村戒川

三　催馬樂　催馬樂は、平安時代の雅樂に民族的の潤ひと親しみとを持ち來した民間音樂の萃である。演奏形式の整つた雅樂にその位置を得た催馬樂は整つて來た。その名義、曲目、沿革、樂曲、樂統等については可なり多くの書物が出てゐる。

▲催馬樂考（賀茂眞淵）　▲催馬樂註祕抄一卷（「續群書類從」五三五）（一條兼良）　▲催馬樂入文（橘守部）　▲催馬樂略說（狩谷掖齋）　▲催馬樂新註（高田與淸）　▲催馬樂註釋（今井似閑）　▲催馬樂小說（村上眞隆）　▲催馬樂師傳相承〔源氏催馬樂師傳相承〕（「續群書類從」五三三）　▲催馬樂略註（小野

高潔）▲催馬樂註釋（天木香藏）▲催馬樂辯解（吉田藩教）▲歌舞音樂略史（小中村清矩）▲日本歌謠史（高野辰之）▲日本音樂概論（伊庭孝）▲日本文學大辭典（藤田德太郎）▲日本音樂講話（田邊尙雄）▲歌曲抄（山崎美成）▲郢曲相承次第（「續群書類從」管絃部所收）綾小路敦有 ▲郢曲抄 ▲糸管要抄、吉野吉水院樂書

其他枚擧に遑がないほどに研究書、參考書、關係書はあるがここには略す。室町時代に入つては後小松院は音樂に非常に御堪能で御樂の催、百白樂の御修業、祕傳のことなど屢々行はれたことは看聞御記の所々に見得ることで、宮廷に於ては後小松院は御在世時代が室町時代中最盛の時と見られる。この時に於て、不慮の出來事（頓死、燒失）等で樂の斷絕があつた、しかし、雅樂郢曲の方面には新作の增加といふことがなかつた。全く傳統の墨守に過ぎず、儀式的音樂に墮ちる嫌ひがないではなかつた。

▲朗詠と催馬樂との相違（「日本音樂講話」六七四頁）田邊尙雄

催馬樂の歌詞の新作を鎌倉室町時代に見ることは出來ないが、催馬樂歌謠が刺戟となつて謠曲大成の要素になつたことは考へられることである。

四　小歌　民間に流行した歌謠は小歌にまづ指を屈しなければならぬ。その形は長短さまざまにあつて、歌も安易さと、洒落さとを見せてゐる。この蒐集書が閑吟集であつて、當時の民謠を窺ふ唯一の資料である。この中に集められた三百餘首の小歌が狂言の中で重要要素となつて、其の脚本の面を潤はせてゐることは能狂言を見れば首肯されるのである。

閑吟集　（通世者或は僧侶の著か）本書收載書名、（「日本歌謠集成」卷五、續群書類從遊戲部、近世文藝叢書第十一、岩波文庫（校註閑吟集藤田德太郎）室町時代小歌集（笹野堅）、國歌大系）

▲室町時代の小歌（「冬柏」昭和六年五月—十一月まで）藤田德太郎 ▲室町時代の小歌（「歌舞音曲考說」）高野辰之 ▲室町時代小歌集に就いて（「室町時代小歌集」）笹野堅 ▲室町時代の小歌と閑吟集（「國語と國文學」十卷一號—五號）志田義秀 ▲閑吟集歌謠序說（「國語と國文學」中世文學號）志田義秀 ▲室町時代の小歌と小唄（「國語と國文學」昭和五年七月號）藤田德太郎 ▲室町時代小歌集（「國語・國文」昭和六年十二月）潁原退藏 ▲小歌（「歌曲考」）山崎美成 ▲小歌（「日本音樂講座」）伊庭孝 ▲室町閑吟集私見（「國民文學」昭和八年五月）松村英一 ▲閑吟集（「日本文學概說」）齋藤清衛 ▲閑吟集（「日本歌謠史」六二三頁）高野辰之 ▲しほりはぎにつき（「古石紳書」）▲閑吟集解題（「古典全集本」附載）志田延義

五　雜藝の歌　平安時代の政治機構が破れて、軍人階級の施政時代になると、以前の貴族階級の文學、趣味、遊樂は其の儘の狀勢を續けることが出來ず、此の關係方面の藝術家も生計の途を他に求めなければならなかつた。所謂、貴族藝術の凋落である。而してこれが社寺の保護に集まり、天王寺、春日神社、

比叡山、賀茂等の諸方の音樂をます〳〵盛にしたと考へられる。しからざるものは各地に離散し、流浪してその藝を賣つたと考へることが出來る。

さて、武家階級の趣味は別途の藝術を愛護することになつた。斯様にして小歌を生み、宴曲を生み、久世舞曲、謠曲を生み、幸若舞曲を生み、今様を生んだ。藝術は愛好者の地位と好尙によつてその進展の道がトせられるのであつた。

その庇護に與らずに庶民階級の間に生じた歌謠はいくつかあつた。歲旦物の萬歲、大黑舞、片下、早歌、鳥追歌（靑陽唱詁日本歌謠集成卷五近古篇）、白拍子、等であつた。

▲歲旦物（「日本演劇の研究」第二部歌謠篇」高野辰之 ▲叢藝（「日本文學大辭典」）▲門付歌（「日本歌謠の展開」日本文學岩波講座）藤田德太郎 ▲雜撰雜藝集 黑川春村 ▲雜藝（「日本歌謠史」）高野辰之 ▲鳥追、鳥名子（「歌曲考」）山崎美成 ▲中古雜唱集（「日本歌謠集成」卷五 近古篇近世文藝叢書第十一册の內）伴信友編一卷

◇

千秋萬歲　室町時代に禁裡及幕營で祝福を奏する一種の祈禱師であつて、咒終つて歌舞を演じたものである。其の禁裡出仕千秋萬歲を祝ふ記事は看聞御記を第一とし、次は古今著聞集、明月記、纖塵記、勘仲記、花山院御記、滿濟准后日記、實隆公記、蔭涼軒日錄、臥雲日件錄、謠曲、狂言、言繼卿記等である。

千秋萬歲は一名萬歲といひ、千才、千壽といひ、京都の北畠に本居があつたらしい。

臥雲日件錄所載の門付の萬歲は乞食と見てゐる。この種の萬歲と禁裡出仕の萬歲との間に可なり隔てがあるらしく思はれる。

萬歲に三河の萬歲があり、滑稽の仕種と、猿樂の藝能を演じ得たものなどがあつた。

千秋萬歲の祝詞は「禁中千秋萬歲歌」として日本歌謠集成卷五近古篇（三九八頁）に載せられてあるが、時代は分明せずとも、言立、富久舞、京の舞、濟出、都くし舞、桝舞の六種がある。此の祝詞によれば通俗的な巷間門付的の味でところ〴〵敬虔の氣がみえてゐる。

▲萬歲（「日本音樂概論」）伊庭孝 ▲萬歲（「歌舞音樂略史」下卷第十一）小中村淸矩 ▲千秋萬歲考 黑川春村 ▲萬歲集小寺王晃 ▲萬歲考 米田、岑石 ▲萬歲考 宇都宮俊治 ▲禁裡萬才の儀式 一話一言及び海錄所載 ▲中古雜唱集萬歲祝詞（「日本歌謠集成」卷五近古篇）高野辰之編

六　宴曲　宴曲は早歌であつて、水猿曲とも、水白拍子ともいはれるものである。早歌の文字が示す如くさら〳〵と淀みなく歌はれる曲節であつたらしい。

宴曲作品は宴曲集（五卷五十篇附一篇）、宴曲抄（三卷三十篇）眞曲抄（一卷十篇異說九篇）、究百集（一卷十篇附一篇）、拾菓集（二卷二十篇）、拾菓抄（一卷十一篇）、別紙追加曲（一卷十篇）、玉林苑（二卷二十篇）、撰要目錄（一卷異說四十八篇）、撰要兩曲

(一卷異說四十八篇)、外物(一卷十二篇)に收められ、總計十二部十九卷宴曲百七十三篇附曲二篇、兩曲(異說)五十七篇である。

撰者は明空が其の第一であり、月江、藤原助員等である。各篇の作者として知られてゐる二十餘名中書並べて見ると、明空、月江、藤三品、漸空上人、雲岩居士、藤原頼光、藤原親光、熊野左住、花山院右幕下家等であり、演出者としては、明空、月江以後は、藤原助員、飯尾善左衛門入道、坪和入道、田島清阿(政阿、盛阿、口阿(與阿)等があつた。製作年代は永仁頃が早期の作で、撰要兩曲、外物等は文保以後の作と見られてゐる。其の盛に行はれたのは文安の頃迄である。其の取材の方面を見ると、季節を扱へるもの最も多く、次に酒、琵琶、馬徳、硯の如き紀行、旅別、留餘波の如き別離、無常、老後述懷の如き哀傷。蹴鞠興、双六、霹樂興の如き遊樂。五節、年中行事の如き行事。源氏、伊勢物語、長歌の如き古典。祝言、嘉辰令月、不老不死の如き祝賀。名所戀、忍戀、曉別の如き戀。釋教、法華。善淨土の如き釋教。鹿山景、山寺、永福寺勝景の如き寺院。鹿島靈驗、山王威德の如き神祇、朋友、君臣父子道の如き人倫。その他道教の如き共の說くところ必ずしも叙景にあらず、抒情にあらず、教理の弘の爲でなく、物盡しの如く、願文の如く、文脈の一貫せざる寄木細工を見るが如き感のある文體である。一見無味、乾燥、文意飛躍は、謠曲を讀むよりも晦澁の感を懷かさす。恐らく、聞くべきもので讀むべきものでないよき例であらう。一般に當時の文學は佛教趣味を帶びて居るのに、宴曲は悲觀的色彩の少ない(百七十三篇中佛教に關するもの二十數篇)のも特色の一つである。

▲宴曲(集、作者、形式、内容、和讃との關係「國文學史新講」上卷三九五頁)次田潤　▲宴曲とは何ぞ(「宴曲全集」)吉田東伍　▲宴曲學者研究の披露に記事　▲宴曲の研究的復活　東儀季治　▲宴曲と謡曲との比較(「宴曲全集」五一頁吉田東伍編)東儀季治　▲鎌倉時代の宴曲(「日本文學史概說」鎌倉室町時代、日本文學、岩波講座十三頁)齋藤清衛　▲宴曲(起原、早歌、現傳世音義、理由有樂とも、諸本、曲節、作者、製作年代、名人等(「日本文學大辭典」)藤田德太郎　▲宴曲(「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座)藤田德太郎　▲宴曲の研究(宴曲の名稱、宴曲の源流、宴曲の大成、宴曲の書籍、宴曲の作者、宴曲の時代、宴曲の內容、宴曲の句法、宴曲の囃子詞、宴曲の沿革、宴曲の音樂、宴曲の價値)(「國語と國文學」第八卷十號中世文學號)藤田德太郎　▲宴曲の年代に就て(「國語國文の研究」二十三號)野間光辰　▲宴曲に關する二三の考察(「國語と國文學」四三號)　▲宴曲に見ゆる地理上の諸點(「歷史地理」二十二卷)吉田東伍　▲宴曲概說(名稱、起源、集、作者、曲節、題材、文章、體系、曲節、沿革等)(「日本歌謠史」)高野辰之　▲宴曲と平曲(「日本音樂概論」)伊庭孝　▲宴曲の研究(「國語國文の研究」)小山正　▲宴曲及び其の他の詞曲(「文學に現はれたる我國民思想の研究」武士文學時代)津田左右吉　▲宴曲と謡曲(「日本演劇の起源」)吳文炳　▲宴曲の敎め

たる書目　▲宴曲全集　吉田東伍編▲宴曲十七帖(「國書刊行會」)吉田東伍編▲宴曲(撰要目錄、眞曲抄、宴曲集、宴曲抄、究百集、拾菓抄、拾菓集、別紙追加曲、玉林苑、外物)(「日本歌謠集成」卷五近古篇)▲續群書類從卷五百五十四所收

佛教歌謠　鎌倉・室町時代は新宗教(禪宗・淨土宗・淨土眞宗・時宗・日蓮宗)の弘通せられる機運が開けて、その急激な信奉者の數を加へて、顯密二教に相並んで存するまでに至つた。否寧ろ開宗創始者の熱意と殉教精神が時代の要求に合致して、其の教の弘通性を有し時代に適切であつたことは爲政者が如何に壓抑を啄へて何の効果もなかつたことは歴史的事蹟を見ても明かである。

禪宗は特權階級卽ち肉體を以つて社會治安の維持に當つた武士階級の信奉を得て大に榮え、禪僧は幕府政治の樞機に當つて將軍の顧問として其の意見が施政の諸方面に具現せらるるに至つた。禪刹は、政治の中心地に壯大に建立せられるに至り、鎌倉・京都の五山の如く、地方大名の城下の宏壯なる堂塔の如きを見れば時代に尊奉せられた宗教であることを明示してゐるのである。

而して禪宗は支那よりの移入宗教であり、入宋した名僧たちが、多く支那を模範として言動したので、儒學・宋學・漢詩文が併せて旺盛であつたのは自然の結果である。

所が、淨土宗なり、眞宗なり、時宗・日蓮宗は我國民自體のために創始された新宗で、主として大衆の安心を謀りて俗耳に入りやすい思想と文辭を以つて宣傳と教導に當つた故に、その流布は大火の草原を拂ふが如く止まるところがなかつた。

而して佛教宣布の爲と、天台・眞言兩宗の例に倣つての歌謠として、法文歌・漢讃・梵讃・和讃を大に利用しその發達を見た。或は大衆の佛教的關心を舞踊の遊戯的分子と混合せしめたところに新時代新宗教として新生面が窺はれる。

聲明　佛教歌謠卽ち聲明は平安時代に入つて興隆し、此の時代に大成した。而して此は天台眞言二宗に行はれたもので、天台の聲明は慈覺に始まつて智證、南山、淨藏、慈慧、源信、兜率、懷空、寬誓を經て良忍に至つて大成し、大原は聲明梵唄の道場となる。眞言の聲明は弘法にはじまつて眞雅、眞然、源仁、益信、寬空を經て寬朝に至つて大成してゐる。上品蓮臺寺、大報恩寺(千本釋迦堂)、引接寺(千本閻魔堂)等に聲明の修業場があつた。

此の聲明も平安末期以後は、次の如く流派を生じた。
一、天台の大原二流　二、眞言の進流　三、醍醐院流　横笛の譜を以つて傳ふ、四、眞言の菩提院流(相應院流)　五、西方院流(新相應院流)　六、妙音院流(師長は箏の譜を以つて傳ふ)。

▲聲明(「歌曲考」上卷)山崎美成　▲聲明(聲明の由來、聲明の各派、聲明の誦句、聲明の作法、聲明の聲律、梵唄の種目、三禮、唄、錫杖、揚經題、讀經、佛名、教化、念佛、禮讃、和讃、講式、聲明に就ての觀察(「日本音樂概論」第八章聲明

六四一頁）伊庭孝　▲聲明（聲明の發達、類別（梵讃、漢讃、和讃））（「日本歌謠史」二二〇頁）高野辰之　▲聲明（名稱意義、聲明の傳來）（「日本文學大辭典」）　▲眞言宗の聲明（沿革、聲明集の名稱、多紀、聲明本の刊行、音階　▲天台宗の聲明（沿革、由聲、由程、博士、聲明諸流の曲、聲明帖、聲明と類似の音譜を附せる講式、天台聲明と同一博士による各宗聲明、博士系統は天台聲明なるも轉化せるもの、特殊なる博士を附せるもの、聲明の影響）（「日本文學大辭典」多紀）　▲高野山の聲明本（「書物の趣味」）水原堯榮　▲魚山目錄　宗快　▲聲明國文たる教化について（「現代佛教」大正十五年九月十月）志田義秀　▲聲明目錄　湛智　▲聲明用心集　湛智　▲聲明音律　知空　▲聲明尋北知東澄意　▲聲塵要抄　玄雲　▲音律祕要抄　桂運　▲音曲祕要抄　凝然　▲聲明源流記　凝然　▲音律事　西園寺實兼　▲諸聲明口傳隨聞及註　圓珠　▲彈僞褒眞抄　宰圓　▲聲明口傳　大原三千院文庫藏　▲後與隨筆　▲魚山蠆芥集　▲元亨釋書卷廿九　音藝志

和讃　和讃とは和語の讃文である。漢土に漢語を以て諸種の讃偈が存するが、これに對して和讃と云ふのである。又和は應和の義で、調聲の人が先に一句を唱ふれば大衆之に和して讃する故に和讃といふとの説もあるが、應和の義の當るものもあるが、さうでないものもあるので前説の方を適切と思ふ。覺如の子存覺の破邪顯正鈔の中に「和讃の事、上の如きの一文不知の族、經教の深理をも知らず、釋義の奥旨をも辨へ難きが故に、卿か彼の經釋の意を和らげて無知の徒に心得しめんが爲に、ときく〵念佛に加へて之を誦し用ゆるべきよし授け與へらるるものなり」と述べて、和を以って教義を和解するの意に見てゐる。蓋しそれも和の意義の轉化と見るべきである。

▲和讃（「鎌倉時代文學新論」三七九頁）野村八良　▲和讃（「日本音樂講座」）田邊尚雄　▲和讃（「歌謠字數考」）中根淑　▲和讃（「日本歌謠史」二二七頁）高野辰之　▲和讃（「鎌倉時代文學概論」日本文學講座七八頁）沼澤龍雄　▲僧徒の歌謠和讃（「日本歌謠の展開」日本文學岩波講座二二頁）藤田徳太郎　▲和讃（「日本歌謠集成」卷四一頁・一九一頁）高野辰之　▲日本民謠史　藤澤衞彦　▲修正作法の和讃（「心の花」二十七卷四號）佐々木信綱　▲源信僧都の作と傳へられる和讃の眞僞（「曆雲」昭和四年一月）多屋頼俊　▲淨土宗の和讃　法然和讃、善導大師和讃（「日本歌謠史」三八〇頁）高野辰之　▲太子和讃　日本歌謠史」五一頁）明惠上人　▲太子和讃（「心の花」二十七卷四號）高楠順次郎　▲地藏和讃（「日本歌謠集成」卷四五〇一頁）　▲彌陀如來和讃　覺超僧都（「日本歌謠集成」卷四一七頁）（「日本歌謠史」二五〇頁）高野辰之　▲二十五菩薩和讃　惠心僧都作（「日本歌謠史」一五頁）高野辰之　▲極樂彌陀和讃　千觀阿闍梨作（「日本歌謠史」六頁）高野辰之　▲觀音和讃　僧賢上人（「日本歌謠史」三八頁）高野辰之　▲山王和讃　惠心僧都（「日本歌謠集成」卷四一六頁）高野辰之　▲來迎讃　來迎和讃とも惠心僧都作（「日本歌謠史」二四八頁）　高野辰之　▲阿彌陀和讃（「日

本歌謠史」二四二頁）（「日本歌謠集成」卷四五〇九頁より）高野辰之 ▲善光寺如來和讃 火ぶせ祈禱讃、回向の讃、惣回向の文（「日本歌謠史」四三頁より、五〇五頁より）高野辰之 ▲涅槃和讃 源空上人（「日本歌謠史」三四頁より）高野辰之 ▲法華和讃 日蓮上人法華經禮讃の詠で、七五音の九十一句よりなる（「日本歌謠史」八五頁より）高野辰之 ▲智證大師和讃 藤原通憲作（「日本歌謠史」二一三六頁）高野辰之 ▲天台大師和讃 惠心僧都作（「日本歌謠史」二三五頁）高野辰之 ▲天台智者大師和讃（「日本歌謠集成」卷四一六三頁）荻原鈔 ▲舍利講式和讃（「日本歌謠史」二三五頁）高野辰之 ▲慈慧大師和讃（「日本歌謠史」二三八頁）高野辰之 ▲佛會歌謠梵讃 ▲佛會歌謠漢讃 梵唄、散華、梵音、錫杖、文珠讃 ▲法然上人の涅槃讃 全篇二百二十八句、釋尊入滅を語る、（天台霞標第四篇卷四所收）上人の眞作に非ず ▲慈慧大師和讃 寶池房澄眞（天台霞標所收） ▲眞言安心和讃 思圓上人 今樣體十二首の聯作、此の世では眞言陀羅尼の神咒南無大師遍照尊を唱へて卽身成佛するにしくはないことを詠ず ▲光明眞言和讃 思圓上人作 神咒の無涯の力を讃歎したる今樣體十二首の聯作 ▲舍利講式和讃 永觀律師作（四座講法則） ▲心行自然和讃 ▲親鸞上人の三帖和讃（「鎌倉時代文學新論」三八三頁）野村八良 ▲三帖和讃（淨土和讃、高僧和讃、正像末和讃）親鸞作、正像末和讃は八十五歲より八十六歲までに作るといふ（「鎌倉時代の佛教文學、日本文學講座」） ▲淨土和讃 寶治二年親鸞上人七十六歲の製作（冠頭二首和讃、讃阿彌陀佛偈和讃四十八首、大經和讃廿二首、觀經和讃九首、彌陀經和讃五首、諸經和讃九首、現世利益和讃十五首、勢至和讃八首、計百十八首）所依の經典の意を述べ所謂勸信誡疑の資とせるもの ▲高僧和讃 親鸞作（龍樹菩薩和讃十首、天親菩薩和讃十首、曇鸞和尙和讃卅四首、道綽禪師和讃七首、善導大師和讃廿六首、源信大師和讃十首、源空聖人和讃二十首、結尾一首、計百十八首 ▲正像末和讃 親鸞作正嘉二年八十六歲の製作 文應元年再治（夢想靈告和讃一首、正像末淨土和讃五十八首、疑惑罪過和讃廿三首、皇太子聖德奉讃十一首、悲歎述懷和讃十六首、善光寺如來和讃五首、計百十四首）（「日本歌謠集成」卷四七五頁所收）釋迦の遺敎たる聖道門は正像末三時を經て漸次頽廢したが彌陀の本願は末法の今大に興隆した。故に念佛門に歸依すべきだとの意を現はしてゐる。▲三帖和讃果して親鸞作か（「日本歌學史」三八三頁）高野辰之 ▲三帖和讃講義 柏原祐義 ▲疑惑和讃 二十三首は、佛智不思議の彌陀の本誓を疑惑する罪を說かうとしてゐる（今樣體） ▲皇太子聖德奉讃 親鸞作十一首（今樣體） ▲愚禿悲歎述懷親鸞作今樣體十六首聯作、當時の本寺本山の僧といふのも、法師といふのも、皆五濁邪惡にみち、小慈小悲の憂き身のものであることを悲歎したる述懷である。▲善光寺如來和讃 今樣體五首聯作、大連の守屋のことを詠ず。▲帖外和讃 今樣體九首聯作、彌陀の超世の悲願は凡夫を淨土に赴かしむるこ

とを詠じてゐる。▲百利口語　一遍上人作、今様體のところと、七五音二句にて小意きとするところとある。百九十句の聯作、彌陀本願にすがり頼むべからざる人欲の穢界を離脱すべきを解く。▲淨業和讃　惠心僧都撰　(イ)晨朝讃　今様體八首と大體七五音よりなる約四十句の二部、(ロ)日中讃　七五音二十三句と三十句とよりなる、(ハ)日沒讃　七五音の二部七十餘句よりなるを見る、(ニ)初夜讃　七五音五十餘句より成る、(ホ)中夜讃　七五音約五十句、(ヘ)後夜讃　七五音三十數句、又以上六部の各讃に可なり長い補接の讃がある、これも惠心僧都撰　▲淨業和讃　(イ)來迎讃　惠心僧都撰　(ロ)別願讃　一遍上人撰、(ハ)往生讃　他阿上人撰　(ニ)弘願讃三祖上人撰　(ホ)稱揚讃　三祖上人撰　(ヘ)六道讃　三祖上人撰　(ト)寶蓮讃　七祖上人撰　(チ)莊嚴讃　七祖上人撰　(リ)光陰讃　七祖上人撰　(ヌ)大利讃　七祖上人撰　(ル)二教讃　(ヲ)拾要讃　十四祖上人撰　(ワ)小經讃　▲淨業和讃(イ)恩德讃(二部)無常讃、滅罪讃、末法讃、釋迦讃、五緣讃、八相讃、涅槃讃、拾要讃、迎接讃、極樂讃(本)極樂讃(末)光明讃、心品讃、本願讃、懺悔讃、十四行偈の十八部より成り大體今様體の聯作である。▲時宗の和讃　別願讃、往生讃、三祖・七祖の作　▲無常讃と空也讃(「日本歌謠史」三八三頁、二三九頁)高野辰之　空也念佛は、天慶元年四月空也上人が京都に念佛を唱へ、諸國を敎化したのに始まるが、此は時宗の創始の狀態で、定盛なるもの、上人に歸依し其の敎によつて妻子を具し、髮を蓄へながら衣を着し(天台衣)瓢を敲いて上人の作つた和讃を諷ひ、寒中夜々市中を徘徊した。之が空也念佛の始である。俗に鉢敲といふ。

以上は、鎌倉、室町時代の重なる和讃を掲げたのであるが、日本歌謠集成卷四(高野辰之編)所收の和讃雜集には釋尊御誕生和讃をはじめ、八相和讃、鞍馬寺融通念佛和讃、二十五菩薩和讃、中將姫和讃、一の谷組打和讃、苅萱道心和讃、松蟲鈴蟲和讃等六十八が收めてある。成作年代不明であるから江戸時代になつたものゝ外、鎌倉、室町時代も混在してゐるかもしれぬ。如何に此種の讃歌が傳播流行されてゐたか想像することが出来る。

敎化　敎化は佛前で朗唱し衆生敎導する偈の文章であつて、散文であつたものが次に朗唱に莊嚴味を添ふる漢詩朗吟調になり長短錯綜すれど四句に分ちてよむべき作(曼荼羅供敎化)があり、今様調に近きもの(乞戒作法敎化)の形をとつたのもある。大體四句が基本であつて、四句のものを片句といひ、四句二聯のものを諸句といつてゐる。

▲羅漢供次第敎化　承元五年正月廿九日澄智　▲羅漢供敎化(勸請六種、羅漢供敎化六種)末尾に建久二年正月九日於大原勝西僧御房御本寫了とあるが鎌倉時代この敎化がいかに使用されたものとも思はれる。▲八祖銘ノ敎化　(龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏)▲[illegible]寺[illegible]二十二尊明儀所載敎化　▲常願表白集所載敎化(文和三年正月十四日[illegible]院

隆舜一周忌、理趣三昧供養法表白教化)(延文五年四月廿一日報恩院僧都一周忌、理趣三昧表白教化)(報恩院第三回理趣三昧供養法表白諷誦教化) ▲延文四年結緣灌頂記所載教化 ▲播州法華山所用初夜導師教化 (二日夜、三日夜、四日夜、五日夜、六日夜、七日夜の分もあり) ▲曼供誦經導師作法教化 ▲曼茶羅供教化 ▲夏始表教化 ▲乞戒作法教化 ▲乞戒作法教化 (畏、一行、惠果、弘法(於高野修之也))壽永元年八月、(醍醐成賢自筆文集所載もの) ▲弘法大師御影供表白教化 ▲同御影供 ▲上清瀧論匠教化 ▲仁和寺百部最勝經供養教化 ▲修正教化(三十二相句、後誓句、尺丈句)圓珠の作か 末尾に「修正教化 文永十一正十一用之」、「文保三年巳未正月廿七日於永興寺用之了但後誓教化不用之」、とあるから文保三年修正教化は永興寺で之を用ひたことが明らかである。▲太秦廣隆寺所用の教化「念佛ハ月ニ似タリ云々」 ▲諸大師供教化「齋會儀ヲ儼ニスル御勤メ云々」其の末尾に「本云、正應五年十二月一日、青蓮院故二品親王第三年ノ御忌ニ於庭田殿爲觀蓮房奉行被修諸大師供其時用之了 干時降雪滿稍寒嵐拂砌之也仍景氣用之了」「永仁三年十一月三日寫之了 魚山末流圓珠」とある。▲諸大師供教化 (傳教大師供教化、慈覺大師供教化、慈惠大師供教化) ▲山門大會佛名教化 (法印承藝七十六歳自筆寫之也) ▲聲明五音博士所載教化 ▲錫杖教化(後伏見院御宸筆聲明要略集) ▲大師講法則所載教化 ▲法隆寺々要日記所載教化 ▲三寶院舊記所載教化 ▲蓮華成院修正導師作法教化 ▲修正導師作法教化 同教化、同牛王導師教化 ▲結緣灌頂大阿聲明次第所載教化 ▲傳法灌頂誦經導師教化二十八種 ▲後奈良院一周聖忌經供養教化 (永祿元年作) ▲後奈良院三回聖忌經供養教化(大永七年作)

教化は佛前朗唱の文章で、大體四句の散文又は韻文によりて作成されてゐるのではあつて、佛會の威嚴を存しつゝ教化本來の使命である説法教導によつて衆生を聖化しようとしたものである。其の文章が朗唱に馴れやすきものであつても、彼の和讃が俗耳に浸透するの平易さと馴れ／＼しさ流布性の大いのには叶ふべくもない。而して又教化は文學として發展する道はとらなかつた。

訓伽陀 伽陀は、梵語で、頌又は諷頌とも譯されるもので、諸物となつてゐる五言又は七言四句の法文である。訓伽陀は伽陀を訓讀するの謂で、朗詠今樣の體をなした法文歌であるといひ得よう。あまり多く存しない所を見ても鎌倉室町時代盛に用ひられたものとも考へられぬ。

一、天台宗常用のもの、二、聲明要略集所收のもの、三、聲明口決所載のもの、四、法隆寺所用のもの、五、佛名會法則所載のもの、六、梁塵秘抄所收のもの。

佛會の聲明中和讃が其の主たる部分にあたるのであるが、試みに四座講法則(日本歌謠集成高野辰之編卷四古讃集)によつて見れば、各種聲明の行はれる様子が分明にならう。

即ち

「勸請、傳供、四智梵語、心略梵語、祭文、涅槃惣禮、如來唄、散華、釋迦、對揚、南無法界道場三密、梵音、三條錫杖、涅槃和讃、金剛界、四智漢語、心略漢語、佛語、文殊、吉慶漢語、合殺、哭佛讃、羅漢惣禮、羅漢和讃、釋迦念佛、遺跡伽陀、御前頌金、遺跡和讃、舍利伽陀、舍利和讃、舍利讃歎、舍利禮、泰送」

神事歌謠　神樂は平安時代から神社に行はれてゐる。その神樂歌には此の時代の作成に係はると思はれるものはない。しかし、祭禮の時に行はれる他の作法に附屬した歌謠には種々のものがある。田樂、猿樂の能藝に屬する歌謠は別として、神事のそれは新らしい發生を見ることが出來る。

▲山王七社權現船謠(「日本歌謠史」三二四頁、鎌倉時代の末の作か、日吉神社々僧作)高野辰之　▲日吉社船謠略解　日吉神社七社祭禮船謠(「日本歌謠集成」卷五近古篇一七三頁―一九八頁)　▲神事田植歌(「日本歌謠史」三二一頁)高野辰之　▲水谷神社の田植歌(「日本歌謠史」三二一頁)高野辰之　▲田植神事及び田歌(「皇典講究所講演集」)菅喜田和三郎　▲神事歌(「日本歌謠類聚」下卷)大和田建樹編　▲田歌　古事類苑舞樂部　▲御田植祭　御田、御田踊、御田植の神事、御田祭、田神祭、田遊祭(「日本文學大辭典所載」)小寺融吉　▲田植(春日神社)の神事式(「日本歌謠の展開」日本文學、岩波講座)藤田德太郎▲尾張田歌解　黑川春村　▲陸奥田歌解　黑川春村

田植が神事として行はれる田植祭の時の歌には、民間の田植歌に一脉の指南をなして居たであらう。即ち田植は船を濟ぐこと、臼を挽くことと共に國民一般の勞作であるから、その歌の種類と分布は廣いものであるべきだと思はれる。

▲田植草紙(「日本歌謠集成」卷五近古篇所載)は、田植歌を所載したものである。▲舞の本　伏見常磐にも五種の田植歌を見出すことが出來る。

第十章　五山文學

五山とは鎌倉禪寺の大なるもの五山を指して稱し、後に京都の禪刹に位次を定めた五大寺(南禪を最高とし、天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五寺)を定めた。即ち京都五山である。この五山の僧徒によつて作られた漢詩文學を五山文學と稱した。五山文學は南北朝時代から應仁前後までその隆盛を見せた。當時、漢學を勵み、漢詩文を作る力量のある者

は禪僧を措いて他に求むることが出來ぬ有樣であつたから、自然政治的、外交的問題にも關與することになり、社會上層の各般の事に禪僧は關係することになつた。斯くして禪僧は、宗教的執務や修業や研鑽等に意を注ぐといふよりも、趣味のために、政治、外交に關與したるが爲に多忙であつたといふ方がよい。

又、我國宋學の勃興は全く五山碩學の力で、中巖圓月、義堂周信、岐陽方秀、了菴桂悟、桂菴玄樹等はその傳播者の錚々たる者であつた。就中之を始めにしては岐陽之を後にしては桂菴の如きは、我儒學史上沒すべからざる功績があつた。

▲五山の起源並に沿革(「五山文學小史」一二頁)上村觀光 ▲五山文學研究(「日本文學講座」)笹川臨風 ▲五山文學に於ける學僧義堂と詩僧絶海(「帝國文學」五卷七號—十二號)北村香陽 ▲五山の詩人雪村(「帝國文學」十一卷二號)久保得二 ▲五山文學の典籍(「日本文學講座」五山文學研究)笹川種郎 ▲五山に關する文書(「史學界」一卷六號)忝峯 ▲五山文學と支那との交通(「日本文學講座」五山文學研究)笹川種郎 ▲五山文學研究の價値(「五山文學小史」長田偶得校一頁)上村觀光 ▲五山禪僧の文藻(「五山文學小史」長田偶得校二四頁)上村觀光 ▲五山文學の位地(「五山文學小史」長田偶得校九頁)上村觀光 ▲五山文學中重要なる日錄(「五山文學小史」長田偶得校三七頁)上村觀光 ▲史學提要抄 桂林德昌 ▲五山文學者列傳(「五山文學史」四三頁)上村觀光 ▲室町時代の五山文學につきて(「日本文學講座」室町時代文學概說七頁)笹川種郎 ▲室町時代に於ける禪僧の詩文集(「考古學」四卷四號)鷲尾順敬 ▲室町時代の擬古文學附所謂五山文學禪僧の漢文學(「文學に現はれたる我國民思想の研究」武士文學時代)津田左右吉 ▲五山文學(「日本文學」岩波講座、日本文學書目解說室町時代八七頁)▲五山文學參考書(「日本文學」岩波講座、日本文學書目解說室町時代八七頁)後藤丹治 ▲禪林文藝史譚 上村觀光 ▲五山文學小史 上村觀光 ▲五山詩僧傳 上村觀光 ▲日本漢文學史 芳賀矢一 ▲日本漢文學論 那波利貞 ▲室町時代に於ける禪僧の詩文集(「和融誌」考古界)鷲尾順敬 ▲五山小史瑣談(「五山文學史」一〇三頁)上村觀光 ▲日本禪林書目(「五山文學史」附一頁)上村觀光 ▲日本禪林諸師別稱並寶名(「五山文學史」附一一頁)上村觀光 ▲日本禪林諸師賜號(「五山文學史」附一一頁)上村觀光 ▲道元(「國文學新講」上四五七頁)次田潤 建長五年寂五十四、宋學傳來の關

係者、貞應二年二十四歳にて渡宋、安貞元年歸朝、山城興聖寺及越前永平寺創立、我國曹洞宗の始祖 ▲道元禪師の詩歌に對する一考察(「心の花」二十七卷七號)石橋鶉衣 ▲道元の生涯、禪師の事業、禪師の文章(「日本文學講座」鎌倉時代の佛教文學三一頁)松原致遠

詩文集の重なるもの

▲鈍鐵集一卷 建仁寺の鐵菴道生(本源禪師) ▲東歸集一卷 淨妙寺の天岸慧廣 元に在つた當時の作 ▲濟北集廿卷 東福寺、後に南禪寺の虎關師錬 能文の人で蘇東坡、黄山谷等の詩集を愛讀し、詩想縱横に走り、論評餘すことなき明澄さを持所收の各體は、賦、詩、偈、讃、記銘、序跋、辨、議、書、紀行、記、傳、表、疏、詩話、清言、祭文、論、通衡、蓋し詩話は此の書が始めてだといはれてゐる。師錬は元亨釋書三十卷の著者である。▲岷峨集二卷 建仁寺の雪村友梅 ▲天柱集一卷 南禪寺の竺仙梵仙 ▲南遊東歸集一卷 建仁寺の別源圓旨 ▲旱霖集二卷 東福寺の夢巖祖應 楚石に學んだところが多い ▲若木集一卷 建仁寺の此山妙在、此書は大部分支那人と往復の詩である。▲東海一漚集三卷 建仁寺の中巖圓月。詩文共に多し、▲随得集一卷 天龍寺の龍湫周澤、建仁寺、南禪寺等にもゐた。夢窓國師の弟子。▲閻孚集二卷 天龍寺の鐵舟德濟 百拙と號す、東陵の永興禪師其文を評して「其文燦然如夜光結緣、不覺使人心目開明云々」 ▲蕉堅稿二卷 天龍寺の中津絶海 所收の詩文五言律詩、七言律詩、五言絶句、四言絶句、七言絶句、疏、書、説、銘、祭文等で、雄渾、莊重の詩風、道俗は清婉、醇雅、性情の正を宣すと評して五山第一と激賞してゐる。▲空華集 義堂祖信空華集ともいひ、二〇卷、南禪寺の義堂周信、所收詩文の半は詩である。周信は絶海と共に五山文學中の白眉と稱せられ、天寧の埼公は「意はざりき日本に此郎あらんとは、人皆云ふ、疑ふらくは華の人其國に仕する者の作ならん歟」と、評してゐる。蓋し此の頌評たるや詩人の此の上もなき名譽であつた。▲惺窓浸稿一卷 建仁寺の仲芳圓伊 ▲不二遺稿三卷 東福寺の岐陽方秀 ▲草根集十卷 東福寺の清巖正徹 唯一の和歌集 ▲翠雲稿一卷 建仁寺の江西龍派 ▲臥雲稿一卷 相國寺瑞溪周鳳 蘇東坡の詩に精しく、外に著はすところ多く、蘇詩講を集めたる脞説二十五卷、補遺一卷、語錄一卷、刻楮集二百卷、入東記、溫泉行記各一卷、善隣國寶記三卷、夢語集一卷、臥雲日件錄六十餘卷等あり。▲狂雲集一卷 大德寺の一休宗純 所收續群書類從一休禪師一代の詩偈を所收せるもの、枯香、頌古、示衆、佛祖賛、自賛、婬坊、婬色人、美色傾城、婦人多欲、近侍美妾、以婬欲換詩文、等奇抜な題材を選び、或に色欲なまぐさくと寫して、裡に潔癖な保持してゐる。▲續狂雲集一卷 大德寺一休宗純附東海一休和尚年譜 ▲村菴稿三卷 南禪寺の希世靈彦 七言絶句、五言絶句、七言律詩、五言律詩、讃、賛、序、説等あり、▲臥雲稿一卷 建仁寺天隱龍澤 絶句集(「續群書類從」二四〇)

▲島陰漁唱文集三巻　建仁寺の桂菴玄樹　▲島陰雜著一巻　建仁寺の桂菴玄樹　▲京華集十三巻　相國寺の横川景之　應仁亂を避けて近江に滯留すること數年、後相國寺永德院に入る。京華別集一巻、同續集一巻、同新集一巻、同後集一巻、同外集一巻「東遊集一巻、同後集一巻、同續集一巻、薝蔔集一巻　▲翰林胡蘆集十七巻　相國寺景徐周麟、文龜三年二月幕命を受けて朝鮮に使し、明應四年三月相國寺に移り、同五年二月鹿苑寺の住持となり、後再び相國寺に入り九十二代の住持となつた。文章に秀で學識が高かつた、同一作者にかゝる詩文集に、宜竹殘稿一巻、湯山聯句一巻は同一作者。▲半陶稿六巻　相國寺の周興彥龍　横川和尚の弟子。藤原惺窩は「一代の偉人」と評す。▲竹居情事二巻　東福寺の慧鳳翱之（「續群書類從」三三〇）大部分文を集む。▲東海瓊華集四巻　南禪寺の得巖惟肖　法語、拈香等の文章を收錄す。他に漁菴小稿一巻　▲梅花無盡藏六巻　萬里周九　七言絕句、頌、雜體詩雜文を收む。（續群書類從）▲梅花無盡藏抄一巻　前書の詩文を文政十年抄出し著者周九の小傳を附したるもの。▲幻雲稿一巻　建仁寺の月舟壽桂　（續群書類從文筆部）、幻雲は別號、幻雲四六集ともいふ如く、四六聯句を收む。▲幻雲詩藁三巻　建仁寺の月舟壽桂（續群書類從文筆部所收）七言絕句千句を收む。▲幻雲文集三巻　建仁寺の月舟壽桂　表、記說、銘、贊、題書等の文を收む、（續群書類從所收）附加して北征集もある。▲角虎集一巻　建仁寺の龍崇常菴　同人の作に「崇常菴文集」「寅闇稿」がある。▲南游集一巻　天龍寺の周良策彥　詩集　他に城西聯句一巻あり。▲雞肋集一巻　古桂弘稽　▲花上集一巻　義堂編　▲運界一覽亭集一巻　夢窓以下百三十八師の詩文　▲叢林風月六々仙一巻　虎關以下三十六師の詩文　▲翰林五鳳集六十四巻　後陽成天皇の勅旨を以つて、以心崇傳等が五山叢林の諸禪僧虎關、乾峯、空華、蕉堅、惟肖、村菴、江西、瑞岩以下慶長元和の頃までの諸僧の詩を收錄したるもの、

以上の諸集は主として漢詩の集である。

次に日記に關する重なるものを擧ぐれば

▲蔭涼軒日錄六十一巻　相國寺の叔英宗播、季瓊眞蘂、龜泉集證が相次いで錄したる日記で、永享七年より同十二年まで、嘉吉元年、寬正二年より同六年まで、文正元年、長享三年より延德二年まで、僧侶の政治的活動、高僧の趣向、僧侶の生活、當時流行の音樂舞曲等を知るには重要なる材料である。

▲空華日工集四巻三冊　義堂周信（日工集とも、空華老師日用工夫略集ともいふ。）四巻物は初本四十八巻を抄略したもの一巻、正中二年より應安四年（四十七歲）まで、二巻應安五年（48）より永和五年（55歲）まで、三巻康暦二年（56歲）より同四年（60歲）まで、四巻　至德二年（61歲）より嘉慶二年（64歲）まで、嘉慶二年四月四日示寂、佛者であり乍ら、儒道を敎へ、宋學を尊び、經世濟民の實をあげようとした。異彩ある高僧である。▲臥雲日件錄　瑞溪周鳳　現在は臥雲日件錄拔尤と

いつて、續史籍集覽に收めた原本の一部分を抄錄した二卷がある。その文の首に、文安三年三月晦、予退二崇壽一移二壽星軒一退閑無レ事、記二日用事一名曰二日件錄一蓋取二諸永明壽禪師傳一所レ謂錄二其行事一曰二日件一也」。文安三年五十六歲より文明五年八十三歲五月三日までの記事。日記所載のことは學問文章より禪林の諸事に涉つてゐるので、空華日工集に次いで重要な日記である。▲善隣國寶記三卷　瑞溪周鳳　▲續善隣國寶記一卷　瑞溪周鳳　▲碧山日錄五卷　太極茂主の記錄か　▲戊子入明記一卷　建仁寺の天與淸啓　寬正六年足利義政の命を受けて入明したる時の紀行。▲壬申入明記一卷　了菴桂梧　永正九年將軍義稙の命を受けて入明した時の紀行及往復書類。▲初渡集四卷　策彥周良　▲再渡集一卷　天與淸啓　▲元亨釋書三十卷　虎關師錬　推古天皇より元亨年中に至る七百餘年間の我國佛敎の略史、僧侶の實傳及概評、外敎渡來の顚末等を漢文にて記す。元亨二年成つて後醍醐天皇の叡覽に供し奉る。三十卷を部類して傳智、慧解、淨禪、感進、忍行、明戒、檀興、方應、力遊、雜題、雜類、資治表、志略例、智通論等となす。僧侶の歷史の始祖である。(「國史大系」第十四卷所收) ▲元亨釋書便蒙　瑞巖　註釋書　▲元亨釋書和解二十三卷　僧慧空が和文に延譯せるもので、元和三年出版され、明治二年刊行の三册本あり。▲元亨釋書徵考三十卷八册　元和二年刊行、元祿正德の頃、京都書林淺野久兵衛、中野五郎左衛門共版のもの出づ。▲元亨釋書文辨一卷一册　僧淸　元祿正德の頃だつたか書店より發賣。

五山の僧は、注疏を見熱中した時代がある。參考のためその一斑を知ることが出來る。

▲史記鈔と周易鈔　桃源瑞仙　▲天下白（梅菴）　▲心華臆斷（心華元棣）腔說（「蘇東坡の詩解說」瑞溪周鳳）　▲天闇圖書樓記（杏塢良心）　▲理氣性情圖（雲章一慶）　▲一性五性例儒圖（雲章一慶）　▲莊子鬳齋口義鈔（得巖）　▲佛語心論（十八卷師錬通衡五卷）▲中正子（十卷中巖円月）　▲帳中香（山谷詩抄、膝柿萬里）▲東坡詩鈔（江西龍派）　大明譜　▲三體詩抄（義堂周信）　▲翰苑遺芳（前漢書抄）　▲太岳周崇　▲漢學紀源（俊芿）　▲古文眞寶抄（梅屋宗香）　▲家法和點（桂菴和尙）▲語錄の若干のものをあぐれば

寧一山語錄二卷（一山一寧）　禪儀外文、正修論、禪戒規（師錬）　淸拙日本錄四卷（淸拙正澄）　夢窓國師錄二卷（春屋妙葩）　月菴和尙錄二卷（月菴宗光）　義堂和尙語錄二卷（義堂周信）　本光國師錄一卷（以心崇傳）　周鳳の語錄（二卷）同語錄外集（四六一卷）

第十一章　繪卷物と文學

經典書寫に用ひられた卷物が、平安朝以來物語類の發達と繪畫の發達と相俟つて、物語と繪畫を連續して表現しようとする要求に促がされて發達したのが繪卷物であつた。

この繪卷物に描寫した事件なり景狀なりを觀者が既に知悉してゐるものである場合は、繪のみの連續で事濟むであらうが、物語の展開なり事件の內容なりを是非觀者に知らしめる必要がある場合は、文章をその繪畫の間に挿入してその足りないところを補はなければならない。換言すれば、物語の展開の間に繪畫が挿入せられるとその景狀の眞實性を增し、立體的な感興を與へ、複雜な描寫を直觀せしめる便がある。斯樣に有利な表現である繪卷物は貴族階級の愛玩物の域から、更に平民化されて行く新宗教の普及宣傳の方便物にと轉じ、又神社佛閣の緣起說明書となり、庶民階級の文學愛好熱に適合する繪入小說に延長した。後に發展した御伽草子は繪卷物の形態に適した短篇小說として特に發達したものである。御伽草子は別項に述べる故に、この處では繪卷物としての文學を一瞥しようと思ふ。

〔一〕神佛信仰物

▲華嚴緣起　傳藤原信實、又は鳥羽僧正。山城高山寺所藏、朝鮮華嚴宗の祖師元曉、義湘の兩大師の傳說を描いたもの、鎌倉時代初期の作。▲地藏緣起繪卷　地藏靈驗物語繪卷が幾種も製作されてゐる。例へば「矢田地藏緣起」「地藏佛感應緣起」「壬生寺緣起」「星光寺緣起」▲地獄草紙　傳、詞寂蓮筆繪土佐光長筆　世の亂雜に伴ひ淨土欣求の念が痛切であるから穢土の觀念が盛に藝術的に表現されたものと見るべきである。此の同名の草紙中に屎糞所、鷄地獄、黑雲沙等を描出したものがあり、髮火流、火末蟲、雲火霧所等を描いたものがあり、鐵圍山の間にある火象、吽摩、飛火、剝肉、沸屎、解身、鐵山の諸地獄を描いたものがあり、北米ボストンの博物館藏の如きは天形星、乾闥婆、神蟲、鍾馗、毘沙門等を描いてゐる。大體鎌倉初頭を下らぬ頃の物らしい。▲西行繪物語　西行物語の實記ではないと松浦貞俊氏はいふ、(「西行」日本文學岩波講座)▲淨土五祖繪傳　鎌倉光明寺所藏一卷　曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の因緣譚。繪土佐光重、詞行俊筆とせられてゐるが明らかでない。▲圓光大師行狀畫圖翼贊　▲法然上人繪卷物　▲善信上人親鸞傳繪　親鸞の曾孫覺如の詞、信濃康樂寺の法眼淨賀畫。鎌倉末期から足利初期に亘つて淨

賀を初代とした信濃國更級郡鹽崎村の康樂寺では宗舜、丹寂等數代の住持が畫才を持つてゐて、皆親鸞繪傳の製作に從事してゐたことは注目に價する。▲最須敬重繪詞　乘專撰　文和元年の作。▲一遍聖繪の詞書（一遍上人六條緣起とも）聖戒法師撰、法眼圓伊畫、三品經尹卿筆、一遍上人の言行を敍述し隨所に遺詠、遺文を交へ、和語、佛語、漢語相混淆してゐる。語呂暢達、俗氣がない駢麗體の文章である。▲善教房物語繪卷　善教房といふ僧が一般庶民の日常生活の裡に淨土信仰を普及する話を描いたもの。南北朝時代か遲くも足利初期の作品らしい。▲春日權現驗記二〇卷　承平の託宣より嘉元神火の事まで五十有餘の物語。繪、右近大夫將監高階隆兼、詞、關白鷹司基忠その子攝政冬平、權大納言冬基、興福寺一乘院良信僧正。鎌倉時代の作品であつて古典派の典型と見るべき逸品。▲山王靈驗記　（い）山城蓮華寺一卷本（山門僧傳とも）賴豪暹賀、聖救、垣舜、院源等比叡山の僧侶の傳に因んで日吉山王の靈驗を敍述したもの、足利初期の六角寂濟の筆、（ろ）　沼津日枝神社本　蓮華寺本と物語の內容異り、後二條關白師通が日吉山王の神罰を蒙つた話より引いて本社の創立の緣起をといたものである。卷末に弘安十一年初春二十二朝云々と奧書がある。▲信貴山緣起三卷　大和國信貴山朝護孫子寺藏のもので。鳥羽僧正覺猷の筆と傳へられてゐる。描法雄勁にして流麗、色彩は濃厚でない。三卷の內容は宇治拾遺物語の一節となつてゐるもので、飛倉、劍の護法、姉尼と相會することであるが、人に知れ亘つた傳說であると思つてか詞書は僅かに四段あるだけである。鎌倉繪卷の先驅をなすものと見られてゐる。▲粉河寺緣起一卷　紀伊國粉河寺所藏のものでもとは二卷。鎌倉時代初期の作品である。▲當麻曼陀羅緣起二卷　鎌倉光明寺所藏　描寫の飽くまで精緻で整頓してゐる點で平治物語繪卷と系統の近いものである。▲清水寺緣起三卷　帝室博物館所藏　詞、近衞太政大臣尙通、中御門大納言宣胤、三條西內大臣實隆、東山左大臣義政、繪土佐右近衞將監光信　▲桑實寺緣起二卷　詞、後奈良天皇、青蓮院宮尊鎭法親王、三條西實隆、繪土佐光茂。天文元年將軍義晴の寄進したもの。▲清涼寺緣起　（清涼寺釋迦堂緣起とも、清涼寺栴檀佛緣起とも）六卷　印度の優塡王が造つた栴檀木の釋迦像が、鳩摩羅琰によつて龜茲國に移され、やがて支那王朝の有に歸し、宋の太宗の時東大寺の僧奝然が夢の告によつて木像の代作を止めて日本に持歸り、これを本尊として清涼寺を建立したる由來、其の後文明年間に至るまでを描寫してゐる。▲華嚴五十五所繪卷一卷　華嚴經の入法界品に說いてある善財童子が五十三の善智識歷參の法話を書いたもの。（東大寺所藏）▲天神緣起　菅公一代の傳記に併せて更に死後神人として靈驗の數々を書いたものである。元氣濃潤たる描寫で浪曼的である上に熾烈な六道觀念がよく表現されてゐて、鎌倉初期の作らしい特色を見せてゐる。▲將軍塚繪詞一卷　山城栂尾高山寺藏鳥羽僧正或は信實の筆と傳へられてゐる

が、詞書がなく、鎌倉初期の白描の草畫の作かと思はれ作成年代が問題にされるものである。

〔二〕 **戰爭物**

▲前九年合戰繪卷　原本六卷　詞書が缺けてゐる。鎌倉末期の製作。▲後三年合戰繪詞（後三年軍記繪詞、八幡太郎繪詞）四卷本　池田侯爵家にある此の繪卷には貞和三年法印權大僧都玄慧とあるので其の作成年代は其以前のものである。戰記物語としては奥州後三年記とも、奥羽軍記とも、後三年合戰記とも後三年軍記ともいはれて普及されて居る物語である。

▲結城合戰繪卷　帝國圖書館藏　繪も詞書も揃つてゐる（續群書類從本）原本は傳つてゐないが、足利時代の製作と推測されてゐる。▲秀卿草子三卷（俵藤太雙紙、俵秀卿草紙とも）、作は鎌倉時代。（「日本風俗史講座繪卷物集」國華二八六號所載）お伽草子とは大同小異の構想である。▲平治物語繪卷三卷　傳住吉慶恩筆　一は最も傑出した「三條殿燒打」で、これは本多修理舊藏のものであつたのが米國ボストン博物館に藏せられてゐる。二は、「信西の卷」で岩崎家藏、「三は六波羅行幸」で松平直亮伯所藏。

〔三〕 **物語繪卷**

▲住吉物語繪卷　土佐長隆筆といはれるもの、鎌倉末葉の作。

▲繪師草子一卷　傳藤原信實、明治二十年德川公爵家より宮中に獻納。「梗概」治める術も、徴税も辨へぬ繪師が伊豫國を賜つて狂喜し酒宴を催した。さて伊豫に使を遣はせば前の領主が税を徴收し、法勝寺に尋ねて行くと寺領になつて居る、やむを得ず再度御許しを願ふて再び伊豫を賜ふたが遠國の地で思ふに任せず、遂に一人の子さえ法師にする程貧乏になつた物語。作は鎌倉末葉といふより鎌倉以後の作であると見られる。▲十二類繪詞（獸太平記、十二類合戰畫、十二支繪卷とも）一卷、（又は、二卷三卷）繪土佐光弘、詞書後崇光院及尊道法親王といはれてゐるものがある。作は嘉吉頃であらうか。十二支の鳥獸を擬人的に取扱つた軍記物である。十二類歌合と題するものは群書類從五〇四に收められ。獸太平記と題した寛永版は稀書複製會第三期に刊行されてゐる。▲鏡破翁繪詞（鏡破の繪卷、鏡破の草紙、鏡破物語とも）一卷、全文は歷史と國文學第二七號に收められてゐる。外來說話の轉化して童話となつたもので、繪は土佐光信の手になつたといふものがある。骨董集で山東京傳は文安、寶德頃の作と見、歷世女裝考で京山は東山殿の頃の作と見てゐる。▲大江山繪詞（大江山記、酒顚童子雙紙、大江山繪卷、大江山追討圖、大江山物語とも）黑川眞賴は訂正增補考古畫譜（眞賴全集卷一）で鎌倉季世と見てゐる。▲付喪神緣起繪（付喪神、付喪神記、非情草木成佛とも）二卷平出鏗二郎は原本の成立を院政時代乃至鎌倉時代の初期と觀てゐるが、島津久基氏は其筆が土佐光信に似てゐるので室町時代と見てゐる。▲土蜘蛛草紙一卷　帝室博物館藏　傳、繪土佐長隆筆　詞兼好法師筆描寫の樣式が土佐派で、此傳は信ずるに足りない、南北朝か

足利初期の作と見る向もある。▲源夢繪詞　▲天狗草紙七卷帝室博物館所藏（延暦寺及東寺、醍醐、高野の卷）二卷、前田侯爵（園城寺の卷）、久松伯爵（淨土時宗等卷）、根津（嘉一郎）家（諸天狗成佛卷）に各一卷、その外模本によつてのみ知られる（東大寺卷及び興福寺卷）都合七卷が知られてゐる。蓋し興福寺卷を首とし、根津家本を結卷とすると全七卷で話が一貫して來る。博識雄辯の南都、比叡を初め諸大寺僧侶の驕慢なる天狗に喩へて諷諭したものであるが、內容の天狗連の所論は大體布敎の方便らしい所が窺はれる所が多いのに本書は一種獨特のものだと日本文學大辭典で田中　氏はいつてゐる。▲鎌倉時代の繪卷物と文學作品との表現　情趣（「日本文學史概說」三鎌倉室町時代、日本文學岩波講座）齋藤清衞　▲日本繪畫史（六）室町時代（「歷史敎育」昭和七年十一月號）相良德三　▲好古小錄　藤井貞幹　▲繪卷物集（「日本風俗史講座」第十二卷）

第十二章　有職・故實・法度

文學作品は、天賦の文才を持つた者がその時代に起つた事件を、自然に書き連ねて行くものと簡單に考へることは出來ない。時代の風俗・制度・社會勢力の發動地等の關係によつて事件の形態が種々に變る。この事件・世相を書き出さうとする作者も時代の掣肘を受けてゐて、ここに時代特有の作品や前代模倣の作品等が生れるのである。中世文學研究に當つても、制度・行事等を研究の背景とすることは極めて必要な方法である。鎌倉時代は武家制度確立のために幕府が努力を續けた時で、皇室に遠ざかつて居た鎌倉の地に幕府もあつたので、永い傳統によつて洗練された宮中行事や貴族生活からの掣肘を受けなかつたので、大膽な政策、質實な士氣、武士に恰好な制度が生れた。武士制度が北條末代の政治紊亂の機會に、朝廷の勢力は擡頭して建武中興親政の古い姿に立ち歸つた。しかし、武士の權勢は到底貴族者流の形式張つた虛勢の下風に默し得なかつた、足利幕府は斯樣にして又帝政を顚倒してしまつた。鎌倉の幕

府よりも、この度は王城の地に幕府の中心が移つたので、勢、幕府の組織制度の上に公家の制度を取り、又武士に適した室町制度を確立するに急であつたのである。この鎌倉室町期の文學には、制度の影響と、人心好尙の姿も變つて來るわけである。茲にこの中世にあらはれた有職・故實・法度等を檢しようと思ふ。

次將裝束抄　（定家裝束抄、夜鶴裝束抄とも）一卷　定家の撰したもの。

拾芥抄　六卷　洞院公賢撰、玄孫實熈の增補したものといはれてゐる。歲時、史系、文學、風俗、諸藝、官位、儀式、國郡、神佛、衣服、吉凶等に關する漢文の雜錄である。

▲拾芥抄撰者（「難波江」第五）岡本保高　▲拾芥抄に就いて（「書誌學」昭和八年三月）松井簡治　▲拾芥抄凡例（「故實叢書」）山田安樂　▲拾芥抄解題（「史學雜誌」三九號）岡田正之

行類抄　寫本十卷　藤原實熈　節會、遷宮、行幸、殿上等の諸儀式、雜例を集錄したもの、

貞永式目　（御成敗式目）北條泰時　武家の法度を評定衆に意見を提出させ、三善康連と計つてこれを取捨改正したものである。全文五十一ヶ條のもの、吾妻鏡に貞永元年五月十四日に康連と修訂に着手し、八月十日の條に編纂を完了した由が見えてゐる。家庭又は寺子屋の敎科書として、讀書習字のために、ひろく用ひられたことは最も注意しなければならない。

▲貞永式目考　萩野由之　▲御成敗式目研究　植木直一郎

蒐集について、慶長以前の寫本のみでも三十二種に達す、慶長より明治へかけて版本百三十一種に及ぶ。▲御成敗式目詳解　高井蘭山　▲北條泰時と貞永式目（「日本演劇の起源」）呉文炳著

名目抄　一卷　藤原實熈著群書類從四百六十八卷雜部所收恒例諸公事編付神事佛事、同臨時編、私儀編、諸公事言說編、人體編、院中編、雜物編、衣服編、喪服編付雜々等に分けて諸名目の訓方及び性質を列示したものである。

職原抄　二卷　北畠親房　興國元年、戰雲に籠められた常陸國小田城中に居ながら、神祇官、太政官以下諸官職の職掌、起源、階級、補任次第等を漢文で記述したものである。吉野朝廷に於て任官叙位に當つて典據とすべきものとして撰したもので、「在₂逆旅₁不ᴸ蓄₂一卷之文書₁毎事荒忽、恰如₂蒙瞽₁」と自ら書けるやうに參考文獻の一つもない城中でこの大著を出した親房の博識と濶眼と精力の絕倫と忠勇心とに感ぜざるを得ない。

▲職原秘鈔一卷　二條良基　永德二年成　▲職原私鈔二卷　淸原宗允　寬永五年刊　▲職原鈔私記四卷　正保五年刊　▲職原鈔引事大全一〇卷　植木悅　萬治二年刊　▲職原鈔別勘三卷　立野春節　萬治三年の自序　▲職原鈔首書五卷　藤原惺窩　寬文二年刊　▲職原鈔旬解十二卷　白井宗因　寬文十二年刊　▲職原會通十三卷　林恕　寬文十二年　▲職原鈔聞

書八巻　與志多分宜　延寶四年那須資信跋あり　▲職原鈔追加捃解四巻　三宅帯刀　天和元年刊　▲職原抄參考五巻　於雲子　寶永元年刊　▲職原抄辨疑私考三巻　壺井義知　享保三年　印本が不純で原形を亂すことを論じ考證十六條あり。▲職原抄通考二十三巻　壺井義知　享保十三年門人多田義俊の序あり。「職原鈔辨疑私考」の說に基き「職原鈔」に漢文で精細な註を施したもので、義知の官職に關する意見を知るに最適の書である。▲職原抄考證筆記四巻　荷田春滿　▲職原鈔假名抄寫本二巻　壺井義知　假名で註釋したもの　▲職原鈔竊考五巻　伊勢貞丈　▲職原鈔辨講寫本二十巻　多田義俊寛延元年より口授筆記せしむ寛延三年三月十四日功遂て　▲職原鈔考證十六巻　後藤世鈞　安永六年自序あり　▲職原鈔之抄寫二巻　安永九年に求め得た本によつて抄譯す　▲職原鈔盲節一巻　はなたちはなの叟　文化十一年自序あり　▲校註職原鈔校本六巻　近藤芳樹　安政五年刊　▲職原鈔私記十一巻　栗原信充　元治元年刊　▲職原鈔講義一巻　井上頼文　明治二十四年刊　▲職原鈔講義二巻　大久保初雄　明治二十七年刊　▲三五庵職原鈔標註二巻　宇都宮遯庵　▲職原鈔淺解二〇巻　▲職原鈔辨書寫二十六巻　逐條考辨　▲職原鈔名物六巻　▲職原抄註寫一巻　▲職原鈔支流大全一巻

年中行事大概　一巻　續群書類從二百五十五巻

建武年中行事（年中公事日記、假名年中行事、御秘抄、後醍醐院御次第、後醍醐院御抄とも）故實叢書所收、一巻又は三巻、北畠親房後醍醐天皇御即位後二十年頃、宮中に於ける一年中の公事を筆書あそばされたもの、南北朝時代宮中の公事を詳しく知り得るものには此書を以て最もよきものとする。

▲建武年中行事（「國語國文の研究」七巻二號―五號、七號―十二號、八巻二號―六號）和田英松　▲建武年中行事註解一巻　和田英松　▲建武年中行事略解　（「故實叢書」第一輯）谷村光義

日中行事　後醍醐院　增訂故實叢書

公事根源　一條兼良著　年中の宮中公事を一月から十二月まで其の根元から記述したものである。例へば四方拜、供御藥、御行仗、朝賀、小朝拜、元日節會、內侍所御供、供若水、から荷前、內侍所御神樂、追儺等百七十五項を數へることが出來る。皇學叢書、日本文學全書第二十二編所收

▲公事根源集釋三巻　松下見林　▲公事根源愚考　河村秀根　▲公事根源附標三巻　藤野井公麗　▲公事根源臆考十巻（增訂故實叢書）速見房常　▲公事根源新釋二巻　關根正直　▲公事根源の著者（「國學院雜誌」第十五巻第十一號）齋藤萬古刀　▲公事根源註釋　高橋圓憲

二判問答一巻　一條兼良　二階堂政行との故實關係の問答集、約四十條を含む。群書類從四百七十二巻所收

今川大草紙　二巻　今川了俊　群書類從四百十二號武家部第十三所收　弓馬其の他の式體作法に就きて評論したるものなり。即ち、弓法次第の事、鷹の式體の事、太刀等に付て式體の

事、躾式體の事、陣具に付て式法の事、衣類に付て式法の事、馬に付て式法の事、酒に付式法の事、鞠の式法の事、食物の式法の事、歌道の事等の大綱を更に數十目に分ちて其の式法を詳述したもの。

宗五大草紙　一巻（勢州恵聞書、條々聞書とも）伊勢下總守貞頼入道宗五、大永八年正月著者七十四歳の時その嫡子次郎貞茂に書き與へたものであること奥書にある。群書類從四百十三巻武家部所收

◇條々聞書貞丈抄　續々群書類從第七法制部

武家故實　細川幽齋

昭和九年七月十日印刷
昭和九年七月十五日發行

國語科學講座
（第九回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院